福島県文化財調査報告書第522集

会津縦貫南道路遺跡発掘調査報告２

瀧ノ入遺跡

２０１７年

福島県教育委員会
公益財団法人 福島県文化振興財団
国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所

会津縦貫南道路遺跡発掘調査報告２

瀧ノ入（たきのいり）遺跡

序　　文

文化財は、地域の歴史に根ざした文化遺産であり、我が国の歴史や文化を正しく理解するために必要不可欠なものです。

そのため、当時の姿がよく理解できるように、可能な限りそのままの形で文化財を保存し、後世に伝えていく努力が現代に生きる私たちに求められています。

会津縦貫南道路は、会津若松市と南会津町を結ぶ全長約50㎞の高規格道路であり、平成10年度に地域高規格道路の計画路線の指定を受け、平成14年度に小沼崎バイパスが一般国道改築事業として福島県主体で事業に着手しました。平成24年度からは、湯野上バイパスが国土交通省の直轄事業として、事業が進められています。

路線内には、周知の埋蔵文化財包蔵地を含め、先人が残した貴重な文化遺産が数多く所在しています。福島県教育委員会では、その遺跡等の所在を確認するとともに、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所と埋蔵文化財保護のための協議を重ねてきました。その中で現状での保存が困難なものについては、発掘調査を実施し、その貴重な遺跡の内容を詳細な記録として残すこととしました。

本報告書は、平成28年度に本発掘調査を実施した下郷町所在の瀧ノ入遺跡の調査成果をまとめたものです。

瀧ノ入遺跡の調査では、縄文・弥生時代の土器や石器、古代から中世の建物跡や井戸跡などが見つかりました。東北地方では珍しい装飾が施された火打金や、中国から輸入された青磁片など貴重な発見もありました。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査の実施に当たり、御協力いただいた下郷町教育委員会、国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成29年11月

福島県教育委員会
教育長　鈴　木　淳　一

あいさつ

当公益財団法人では、福島県教育委員会からの委託を受けて、県内における大規模開発に先立って、その対象地域内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しております。

会津縦貫南道路開発予定地内の埋蔵文化財につきましては、平成18年度からの分布調査及び試掘・確認調査を経て、平成27年度から本発掘調査を実施しているところであります。

本報告書は、平成28年度に実施した瀧ノ入遺跡の本発掘調査の成果をまとめたものです。

今回の調査では、縄文・弥生時代の土器や石器、古代から中世にかけての建物跡や井戸跡などが見つかり、昔の人々の生活の一端を知ることが出来ました。

出土した弥生土器の表面には、栽培植物であるイネやキビの種子の痕跡が残っていることがわかり、遺跡の周辺で農耕が行われた可能性を示す貴重な発見となりました。

また、中世の遺物では、東北地方では例の少ない装飾の施された火打金や、中国から輸入された青磁の破片なども発見されています。これらの遺物は、遺跡周辺に有力者がいたことを示すものです。下郷町では中世の城館跡が多く見つかっているため、中世の瀧ノ入遺跡はそれらと関連するものであった可能性もあります。

本報告書が、そのようなふるさとの原風景を解明、復元するための一助になれば幸いです。

終わりに、今回の発掘調査にご協力、ご助言をいただきました関係諸機関ならびに地元住民の皆様には厚く御礼を申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年11月

公益財団法人　福島県文化振興財団
理事長　　杉　　昭　重

緒　　言

1　本書は、平成28年度に実施した会津縦貫南道路遺跡調査の発掘調査報告書である。

2　本書には、以下に記す遺跡の調査成果を収録した。
瀧ノ入遺跡：福島県南会津郡下郷町大字白岩字瀧ノ入地内　　埋蔵文化財番号：0736200141

3　本事業は、福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し、調査にかかる費用は国土交通省が負担した。

4　福島県教育委員会は、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財団に委託して実施した。

5　公益財団法人福島県文化振興財団では、遺跡調査部調査課の下記の職員を配して調査にあたった。
文化財主査　吉野　勤也　　文化財主事　鶴見　諒平
なお、臨時的に下記の職員の協力を得た。
嘱　　託　松本　茂

6　本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。

7　本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の縮尺５万分の１の地形図(田島)、並びに同省東北地方整備局郡山国道事務所が製作した工事用地図を複製したものである。

8　本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し付章にその結果を掲載している。

火山灰分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
樹種同定・放射性炭素年代測定	株式会社　加速器分析研究所
土器種実圧痕の同定	株式会社　パレオ・ラボ

9　本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。

10　発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関から協力・助言をいただいた。
下郷町教育委員会

用　　例

1　本書における遺構図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 方　　位　　図中の方位は真北を示す。方位記号がないものは、本書の天を真北とする。

(2) 縮　　尺　　各挿図中に縮小率を示した。

(3) ケ　　バ　　遺構内の傾斜部は「 ⫼ 」、相対的に緩傾斜の部分には「 ⫧ 」、後世の撹乱部や人為的な削土部は「 ⫩ 」の記号で表現した。

(4) 土　　層　　遺構外堆積土はアルファベット大文字のＬとローマ数字、遺構内堆積土はアルファベット小文字のℓと算用数字を組み合わせて表記した。

(5) 標　　高　　挿図中に示した標高は、海抜高度を示す。

(6) 網　　点　　各挿図中に用例を示した。

(7) 遺構番号　　当該遺構は正式名称、その他の遺構は記号化した略称で記載した。

(8) 土　　色　　土層注記に使用した土色は、『新版標準土色帖』に基づいている。

2　本書における遺物図版の用例は、以下のとおりである。

(1) 縮　　尺　　各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。

(2) 土器断面　　須恵器の断面は黒塗りとした。粘土積み上げ痕を一点鎖線で示し、胎土中に繊維が混和されるものには▲を付した。

(3) 網　　点　　各挿図中に用例を示した。

(4) 遺物番号　　挿図ごとに通し番号を付した。本文中における遺物番号は、例えば図１の１番の遺物を「図１－１」とし、写真図版中では「１－１」と示した。

(5) 注　　記　　出土層位などは遺物番号の右脇に示した。

(6) 遺物計測値　　(　)内の数値は推定値、[　]内の数値は遺存値を示す。

3　本書で使用した略号は、次のとおりである。

下　郷　町……ＣＧ	瀧ノ入遺跡……ＴＫＩ	竪穴住居跡……ＳＩ
土　　坑……ＳＫ	井　戸　跡……ＳＥ	集石遺構……ＳＳ
焼土遺構……ＳＧ	小　　穴……Ｐ	グリッド……Ｇ
遺構外堆積土……Ｌ	遺構内堆積土……ℓ	沼沢パミス……N.P.

4　引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、本文末にまとめて掲載した。

目　　次

第１章　調査経緯と遺跡の環境

第１節　調査に至る経緯……1

事業の概要（１）　　調査経緯（１）

第２節　地理的環境……2

第３節　歴史的環境……4

第４節　調 査 経 過……7

第５節　調 査 方 法……8

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布……9

第２節　基 本 土 層……10

第３節　竪穴住居跡……13

１号住居跡(13)

第４節　土　　坑……14

縄文時代の土坑(15)　　弥生時代中期後半以降の土坑(15)

平安時代以前の土坑(16)　　中世以降の土坑(21)　　時期不明の土坑(21)

第５節　井　戸　跡……22

１号井戸跡(22)

第６節　集 石 遺 構……26

１号集石遺構(26)　　２号集石遺構(27)

第７節　焼 土 遺 構……27

１号焼土遺構(27)　　２号焼土遺構(27)

第８節　小　穴　群……28

第９節　遺構外出土遺物……37

縄文土器(37)　　弥生土器(41)　　須恵器・磁器・古銭(48)　　石器・石製品(48)

第３章　総　　括……54

縄文時代(54)　　弥生時代(54)　　古代から中世(55)

付　章　自然科学分析

第１節　火山灰分析……57

第２節　樹 種 同 定……63

第３節　放射性炭素年代測定……64

第４節　レプリカ法による土器種実圧痕の同定……68

挿図・表・写真目次

［挿図］

図１　会津縦貫南道路位置図……１
図２　地形分類図……３
図３　周辺の遺跡……５
図４　調査区位置図……９
図５　遺構配置図……11
図６　基本土層……12
図７　１号住居跡……13
図８　１号住居跡出土遺物……14
図９　１～６号土坑……16
図10　７～15号土坑……17
図11　16～23号土坑……18
図12　24～29号土坑……19
図13　30～33号土坑、出土遺物……20
図14　１号井戸跡……23
図15　１号井戸跡出土遺物（１）……24
図16　１号井戸跡出土遺物（２）……25
図17　１・２号集石遺構……26
図18　１・２号焼土遺構……27
図19　小穴群（１）……29
図20　小穴群（２）……30
図21　小穴群（３）……31
図22　小穴群（４）……32
図23　小穴群（５）……33
図24　小穴群出土遺物……36
図25　遺構外出土遺物（１）……38
図26　遺構外出土遺物（２）……39
図27　遺構外出土遺物（３）……40
図28　遺構外出土遺物（４）……43
図29　遺構外出土遺物（５）……44
図30　遺構外出土遺物（６）……45
図31　遺構外出土遺物（７）……46
図32　遺構外出土遺物（８）……47
図33　遺構外出土遺物（９）……49
図34　遺構外出土遺物(10)……51
図35　遺構外出土遺物(11)……52
図36　遺構外出土遺物(12)……53
図37　重鉱物組成および火山ガラス比……60
図38　火山ガラスの屈折率……60
図39　テフラ・砂分の状況……61
図40　重鉱物・火山ガラス……62
図41　出土井戸枠材の顕微鏡写真……63
図42　暦年較正年代グラフ（１）……66
図43　暦年較正年代グラフ（２）……67
図44　マルチプロット図……67
図45　出土土器と種実圧痕の写真……70
図46　原生標本の走査型電子顕微鏡写真……71
図47　出土土器圧痕レプリカの
　　走査型電子顕微鏡写真（１）……71
図48　出土土器圧痕レプリカの
　　走査型電子顕微鏡写真（２）……72

［ 表 ］

表１　周辺の遺跡一覧……６

表２　土坑一覧……20・21

表３　小穴一覧……34・35

表４　テフラ分析結果……59

表５　重鉱物・火山ガラス比分析結果……59

表６　出土井戸枠材の樹種……63

表７　放射性炭素年代測定結果……66

表８　放射性炭素年代測定結果および
暦年較正年代……66

表９　出土土器圧痕の同定結果……69

［写真］

1　調査区遠景……75

2　遺跡全景……75

3　調査区遠景……76

4　調査区遠景……76

5　調査区北側小穴群……77

6　調査区各部……77

7　１号住居跡全景……78

8　１号住居跡細部……78

9　１～８号土坑……79

10　９～16号土坑……80

11　17～24号土坑……81

12　25～27・30号土坑……82

13　１号井戸跡……82

14　１・２号集石遺構検出……83

15　１・２号集石遺構細部……83

16　Ｂ３～Ｅ３グリッド小穴群完掘全景……84

17　Ｄ３グリッド付近小穴群……84

18　小穴（１）……85

19　小穴（２）……86

20　１号住居跡・30号土坑出土遺物……87

21　１号井戸跡出土遺物（１）……87

22　１号井戸跡出土遺物（２）……88

23　小穴群出土遺物……88

24　遺構外出土遺物（１）……89

25　遺構外出土遺物（２）……90

26　遺構外出土遺物（３）……91

27　遺構外出土遺物（４）……92

28　遺構外出土遺物（５）……93

29　遺構外出土遺物（６）……94

30　遺構外出土遺物（７）……95

31　遺構外出土遺物（８）……96

32　遺構外出土遺物（９）……97

33　遺構外出土遺物(10)……98

第１章　調査経緯と遺跡の環境

第１節　調査に至る経緯

事業の概要

会津縦貫南道路は、会津若松市と南会津町間の約50㎞を結ぶ地域高規格道路である。平成10年度に計画路線として指定を受け、平成18年度には、４工区（南会津郡下郷町大字小沼崎～南会津郡下郷町大字塩生間約９㎞）が整備区間に指定され、平成19年度には福島県が主体となって事業を開始した。平成24年度からは、４工区の一部区間である湯ノ上バイパス（下郷町大字高陟～下郷町大字塩生間8.3㎞）が国の直轄事業となった。また、平成27年度には５工区（下郷田島バイパス：下郷町大字塩生～南会津町田島間約11㎞）について、福島県が主体となって事業を開始した。

会津縦貫南道路が完成すると、平成27年度に全線開通した会津縦貫北道路（喜多方市～会津若松市間）と合わせ、会津地方を南北に貫く基幹道路が出来上がる。これにより交通の利便性が飛躍的に高まり、地域活性化とともに、全県的な生活圏の拡大や観光振興などの点で、復興の一助となることが期待されている。

調査経緯

福島県教育委員会は、会津縦貫南道路建設予定地内にある埋蔵文化財の保護を図るため、平成18・19年度に財団法人福島県文化振興事業団（現、公益財団法人福島県文化振興財団）に委託して、下郷町内の工事予定地周辺における遺跡の分布調査を実施した。その結果、建設予定地内では、周

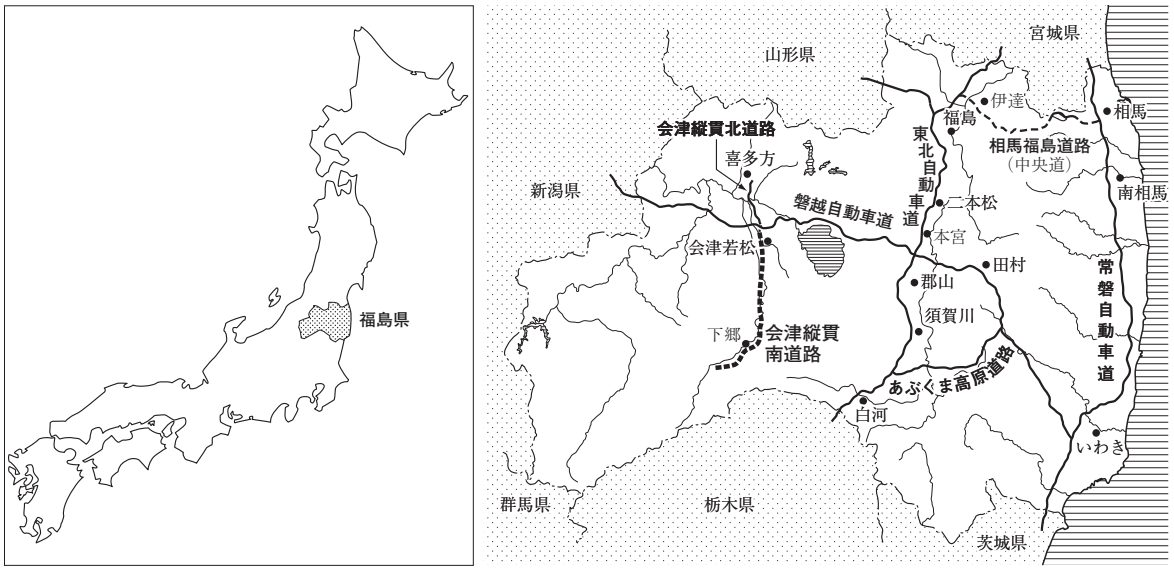


図１　会津縦貫南道路位置図

知の遺跡６カ所、遺跡推定地６カ所を確認した。その後のルート確定により、周知の遺跡３カ所、遺跡推定地２カ所が試掘・確認調査対象から除外されている。

用地内の遺跡および遺跡推定地は、平成24年度と26・27年度に試掘・確認調査を実施した。平成27年度からは本発掘調査も開始され、栗林遺跡（１次）で1,600㎡の調査が行われている。瀧ノ入遺跡は、平成27年度の確認調査によって、4000㎡の範囲について保存の必要があることが確認された。その取り扱いについて、福島県教育委員会文化財課と国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所が協議を行い、平成28年度に本発掘調査を実施して記録保存を図ることとなった。　（鶴　見）

第２節　地 理 的 環 境

下郷町は、会津地方の南東部に位置し、東は岩瀬郡天栄村と西白河郡西郷村、西は大沼郡昭和村と南会津郡南会津町、北は会津若松市および大沼郡会津美里町、南は栃木県那須塩原市と接している。昭和30年に楢原町、旭田村、江川村が合併し下郷町となった。この町名は、旧田島町（現南会津町田島地区）地域が上郷､大川とも呼ばれる阿賀川下流の地域は下郷と呼ばれていたことによる。会津盆地と下野方面を結ぶ交通の中間地点であり、かつては、大内宿などの宿場を廻る下野街道が主要道であった。面積は317.04㎢、人口は5,899人（平成27年12月１日現在）である。

下郷町は大部分が山地であり、標高約1,000～1,800ｍの急峻な山々に囲まれている。そのため、会津若松市のほぼ真南方向に位置するが、小野岳や大戸岳といった標高1,400ｍ級の山に隔てられている。町の中心には阿賀川が南から北に向かって流れており、その両岸には、会津若松市との境界付近から下郷町の楢原地区周辺にかけて、高さ50ｍ前後の段丘崖が連なっている。下郷町は、そのような阿賀川に沿って形成された谷底平野と河岸段丘上に展開された町である。

阿賀川の西岸は、1,000～1,300ｍの大起伏山地を中心に中起伏山地、さらには標高856ｍの中山などの大起伏丘陸地が広がり、急峻な谷部には幅の狭い河岸段丘が見られる。それに対し、阿賀川の東岸では比較的大きな河岸段丘が形成され、標高500ｍ前後の段丘面が帯状に発達している。その東方向には、奥羽山脈から続く中起伏山地や大・小起伏丘陸地の山並みが連なり、さらに標高1,500ｍ以上の大・中起伏火山地や火山麓地が続く。一方、町南東部の標高1,642ｍの大白森山を源とする観音川流域や、標高1,854ｍの三倉山から流れ出す加藤谷川の中・下流域には、扇状地や河岸段丘が形成されている。それらの河川と阿賀川との合流点の東側は、比較的広い段丘面が形成されており、農地や宅地、商用地や公共施設の場として活用されている。

下郷町の気候は、日本海側の気候と類似する。しかし、標高の高さが影響し、夏は高温多湿になるものの朝晩は冷涼であり、会津盆地とは異なる変化を見せる。また、冬は11月ごろから降雪が見られ、冬の期間が長く比較的積雪量が多い寒冷地帯といえる。

瀧ノ入遺跡のある白岩地区は、下郷町のほぼ中央、阿賀川と隈川の合流点付近の下位岩石段丘上にある。周辺は２つの河川による段丘崖と急峻な山地に囲まれており、限られた狭い段丘面に宅地

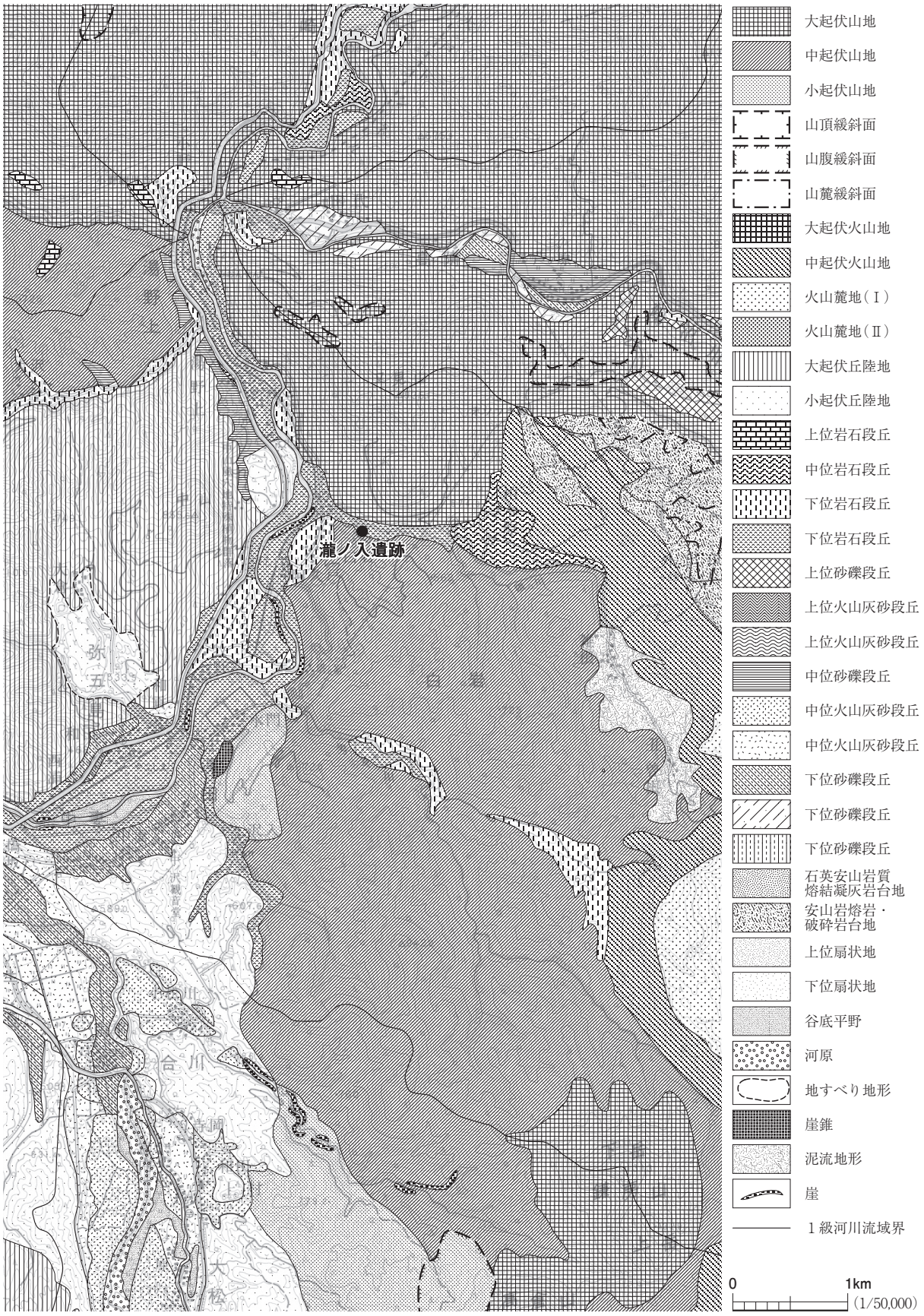


図2　地形分類図（福島県農地林務部農地管理課　1978「会津開発地域土地分類基本調査－田島－」）

や田畑が作られている。瀧ノ入遺跡も、隈川流域に形成されたわずかな段丘上の一部に位置する。

遺跡の周辺には、直線距離で南南西約1.3㎞に国指定天然記念物の「塔の弗(へつり)」、北西約7.1㎞には国重要伝統的建造物群保存地区「大内宿」がある。（吉　野）

第３節　歴 史 的 環 境

下郷町では147カ所の遺跡が確認されている。下郷町を含む南会津地域では、遺跡の調査事例が少ないため、詳細が明らかになった遺跡は少ない。そのため、下郷町だけではなく、周辺の遺跡についても触れながら歴史的な動向を整理する。

現在まで、旧石器時代の遺跡は下郷町では確認されていない。南会津町大明神遺跡でナイフ形石器が採集されているが、発掘調査で旧石器時代の遺構・遺物が確認された事例はない。

縄文時代の遺跡は、下郷町で確認されている遺跡の７割以上を占める。発掘調査が行われた事例も多く、そのうち、栗林遺跡(45)で早期から後期の土器が多量に出土しているほか、土坑や掘立柱建物跡が確認された。豊後海遺跡(58)では前期の土器、的場遺跡では晩期の遺構、瀧平遺跡では後期から晩期の土坑･配石墓が検出されている。これらの遺跡では、前期の浮島式、中期の阿玉台式、後期の堀ノ内式などの関東系の土器や、後期の三十稲場式といった新潟方面の土器が確認されており、広範囲の交流が考えられている。

弥生時代の遺跡は前期から確認でき、墓が見つかる事例が多い。只見町窪田遺跡で、前期の再葬墓が見つかっている。稲干場遺跡(83)・五百地遺跡では前期の土器が見つかっているが、遺構は確認されていない。中期には稲干場遺跡で中期中葉ごろの墓と考えられる遺構が確認されたほか、五百地遺跡では、中期中葉頃の土器がまとまって出土し、再葬墓の可能性が考えられている。中期後半の二ッ釜式から川原町口式の時期の土器は、多くの遺跡で出土している。遺構が確認できた事例は少ないが、明神遺跡の埋設土器や、瀧ノ入遺跡(１)で土坑などの事例がある。後期になると確認できる遺跡数は激減し、下郷町では事例がなく、南会津町鵜ノ瀬遺跡で後期の終わり頃の土器が採集されているだけである。

古墳時代の遺跡は、下郷町では宮田遺跡(60)・小野遺跡(２)・大矢遺跡(56)の３遺跡が登録されているが、詳細は不明である。その他、南会津町折橋Ｃ遺跡・上ノ原遺跡で後期の土器が、只見町七十刈遺跡では中期から後期頃の土器の出土事例があるだけで、南会津地方全体で遺跡が希薄である。

奈良時代の遺跡は調査事例がなく、詳細は不明だが、平安時代には遺跡数が増加してくる。左走遺跡では竪穴住居跡が確認され、土師器・須恵器・筒形土器が出土した。標高750ｍ前後の山間部に位置する南倉沢遺跡(82)でも竪穴住居跡が見つかり、土師器や須恵器・筒形土器や鉄鏃などが出土している。その他、瀧平遺跡・下平遺跡で平安時代の土師器・須恵器などが出土している。平安時代には、下郷町中ノ沢観音堂が大同２年(807年)に徳一により開山したと伝わる他、平安時代以

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46・47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
0
1km
(1/50,000)

図3　周辺の遺跡

降に創建されたと伝わる寺社も多く、人の進出と開発が進行していた状況が見て取れる。

平安時代後半には、旧田島町と下郷町の大半を含む長江荘が成立し、中世を通じて長沼氏の支配下に置かれる。下郷町では、中世の遺跡のほとんどが城館跡である。17カ所の城館跡が確認されている他、文献に記載はあるが位置不明なものもある。これらの城館跡は長沼氏との関連が想定されているものが多い。小平城跡では堀跡、小穴が調査されていて、堀跡の出土遺物から14～15世紀頃に機能していたと推定される。楢原館跡では、掘立柱建物跡が確認された。遺物は風炉･青磁･かわらけなどが出土し、かわらけ等の年代から15～16世紀を中心とした館跡と推定される。九々布城跡(59)では、石垣・土塁・堀跡・廓・虎口・物見台・敷石・礎石・柱穴などが確認できる。出

表１　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種　類	時　期
1	**瀧ノ入遺跡**	**集落**	**縄文・弥生・平安・中世**
2	小野遺跡	散布地	古墳～平安
3	小野城跡	城館跡	中世
4	田代館跡	城館跡	中世
5	寄上遺跡	散布地	奈良・平安
6	田代遺跡	散布地	縄文
7	大桑成Ａ遺跡	散布地	縄文
8	大桑成Ｂ遺跡	散布地	縄文
9	文次郎遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安
10	西ノ原遺跡	散布地	縄文
11	芦ノ原館跡	城館跡	中世
12	芦原遺跡	散布地	縄文
13	芦原口留番所跡	その他	近世
14	御霊平遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安・近世
15	菌沢遺跡	散布地	縄文
16	桜平遺跡	散布地	縄文
17	五百地遺跡	散布地	縄文・弥生
18	湯野上遺跡	散布地	縄文
19	舘本遺跡	散布地	縄文
20	舘本館跡	城館跡	中世
21	川向遺跡	散布地	縄文
22	白岩城跡	城館跡	中世
23	向平遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安
24	李平遺跡	散布地	
25	柏木原遺跡	散布地	縄文・弥生
26	上ノ平遺跡	散布地	縄文・弥生
27	柏木原Ｂ遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安
28	柏木山遺跡	散布地	縄文・弥生
29	雑根川向遺跡	散布地	縄文
30	雑根遺跡	散布地	縄文
31	雑根屋敷遺跡	散布地	縄文
32	白岩口留番所跡	その他	近世
33	北上平遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安
34	阿久戸遺跡	散布地	縄文
35	南上平遺跡	散布地	縄文
36	鳥井戸遺跡	散布地	縄文
37	半道田遺跡	散布地	縄文・弥生
38	水門口留番所跡	その他	近世
39	上抜平遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
40	小野平遺跡	散布地	縄文・弥生
41	和田遺跡	散布地	縄文
42	草岡館跡	城館跡	中世
43	和貢遺跡	散布地	縄文
44	水門遺跡	散布地	縄文
45	栗林遺跡	集　落	縄文・弥生
46	中丸遺跡	散布地	縄文
47	中妻館跡	城館跡	中世
48	中原遺跡	散布地	縄文・弥生
49	中ノ内遺跡	散布地	縄文
50	西浦居村遺跡	散布地	縄文
51	辻堂下遺跡	散布地	縄文
52	辻堂遺跡	散布地	縄文・弥生
53	屋敷遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安
54	上ミ田遺跡	散布地	縄文
55	家ノ下遺跡	散布地	縄文・弥生
56	大矢遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安
57	萩原遺跡	散布地	縄文
58	豊後海遺跡	集　落	縄文・奈良・平安
59	九々布城跡	城館跡	戦国
60	宮田遺跡	散布地	弥生・古墳
61	塩生遺跡	散布地	縄文・弥生
62	塩生館跡	城館跡	戦国
63	下林Ｂ遺跡	散布地	縄文
64	下林Ａ遺跡	散布地	縄文
65	桃曽根遺跡	散布地	縄文
66	塩生小山遺跡	散布地	弥生・奈良・平安
67	道州遺跡	散布地	縄文・近世
68	張平北遺跡	散布地	縄文
69	張平遺跡	散布地	縄文
70	羽子石遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
71	二階岨遺跡	散布地	縄文
72	赤岡館跡	城館跡	中世
73	和田原遺跡	散布地	縄文
74	上ノ台遺跡	散布地	縄文
75	藤ノ沢遺跡	散布地	縄文
76	陣場館跡	城館跡	中世
77	原遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安
78	木令遺跡	散布地	縄文
79	和久坂遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
80	札場遺跡	散布地	縄文
81	杉ノ沢一里塚	散布地	縄文
82	南倉沢遺跡	集　落	縄文・平安
83	稲干場遺跡	その他	縄文・弥生

土遺物から、戦国時代末の短い期間に機能していたと推定されている。

江戸時代に保科氏が会津に入って以降、下郷町は南山御蔵入と呼ばれ幕府直轄領となるが、実質的には会津藩の支配下に置かれた。会津若松と宇都宮を結ぶ下野街道が整備され、街道沿いには大内宿などの宿場が成立し、この街道を利用した物資輸送が重要な産業の一つとなった。南会津町・下郷町には当時の下野街道沿いに一里塚も残っており、阿賀川を渡る舟場の跡も伝わっている。

（鶴　見）

第４節　調 査 経 過

平成28年度は、瀧ノ入遺跡の4,100㎡の本発掘調査を実施した。当初は4,000㎡の調査に着手したが、遺物包含層が広がることがわかり、100㎡が追加調査となった。

４月26日に、国土交通省、県教育庁文化財課、（公財）福島県文化振興財団遺跡調査部の三者で現地協議を行い、排土置場や進入経路について協議した。５月11日から調査員２名を配置し調査に着手した。５月13日からは、表土掘削を開始し、５月30日には調査区内の表土除去を終了した。

５月18日からは、作業員20名を雇用して遺構の調査を開始し、５月20日には、調査区南側の遺物包含層の調査に着手した。それと並行して、調査区北側で確認した竪穴住居跡と、それに重複した小穴の検出・掘削作業を実施した。小穴からは透かしのある火打金が出土し、これらは中世の柱穴群と推定された。

６月６日から調査区南側の遺物包含層の掘削を開始し、多数の弥生土器・石器が出土した。遺物包含層周辺では、土砂流入等の二次的堆積により形成された褐色土の下に黒色土が堆積していることが判明した。この黒色土からの遺構・遺物の有無の確認のため、トレンチ調査を実施し、遺構・遺物がないことを確認した。

７月には、調査区南側の遺物包含層の堆積が厚かったため、作業員を27名に増員して調査の進展を図った。お盆休みを挟み、８月31日には遺物包含層が南東側に広がることがわかり、文化財課、国土交通省が協議を行い、遺物包含層が広がる100㎡の部分についても追加で調査を行うこととなった。５月から着手した範囲については、９月８日で調査が終了した。

９月９日からは本格的に調査区北側の遺構検出を開始した。多数の小穴を検出し、複数棟の建物跡が存在していたことがわかった。小穴の堆積土中から古代の土師器が出土したことから、中世に加え、古代の建物の存在が推測された。10月14日には下郷町の旭田・楢原・江川小学校の生徒・教員48名が遺跡を見学した。10月19日には、井戸跡を検出した。井戸跡は裏込めに大量の石材を用いており、崩落の危険があったため、安全に配慮しながら調査を進めた。

追加箇所の調査は11月８日に開始し、天候に恵まれたこともあり、遺物包含層の掘削が順調に進み、11月10日には終了し、小穴の検出および掘削も同日に終了した。

11月17日には空中写真撮影を行った。11月21日には、遺構の最終確認のため重機を用いて調査

区内の数カ所にトレンチを設け、地山と考えていた褐色土下に黒色土の堆積が認められるかを調査した。全てのトレンチで黒色土は確認されず、遺構・遺物も無かったため遺跡の調査を終了した。

11月22日から器材などの片付けを始め、11月25日には作業が全て終了した。国土交通省との協議の結果、埋め戻しは行わず調査区周辺の安全対策を実施した後、12月14日に引き渡しを行った。

（鶴　見）

第５節　調 査 方 法

今回の調査では、国土座標に基づいて10ｍ四方のグリッドを設定し、北から南に算用数字を、西から東にアルファベットを順番に付けてグリッド名とした。グリッドの原点は、Ｘ＝142,550、Ｙ＝7,000である。また、遺物が多く出土した調査区南側では、５ｍ四方の小グリッドを設定し、アルファベットの小文字を付けて、「Ｄ７ｂ」のように表記した。グリッド杭は、測量会社に10カ所の打設を委託した。それを基に、遺物・遺構の図化が必要な場所周辺を補う形で調査員が杭の打設を行った。標高は、標高基準杭の打設を委託し、その杭からグリッド杭に標高を移動し、調査時の基準とした。

遺構の掘削は、重機で表土を除去し、それ以下の層は人力で遺構検出面まで掘削した。遺構の掘削は２分割法を基本としたが、竪穴住居跡は４分割法で行った。遺構外堆積土は「ＬⅠ、ＬⅡ…」とし、細分した場合はアルファベットの小文字を用いて「ＬⅢａ」のように表記した。遺構内堆積土は「ℓ１、ℓ２…」で表記した。

遺構の調査状況は、検出状況・土層断面・遺物出土状況・完掘状況などを写真で撮影して記録した。撮影は35㎜判モノクロ・カラーリバーサルフィルムと、コンパクトデジタルカメラで行った。調査区全景写真は、空中写真撮影を委託し、ラジコンヘリコプターを使用して実施した。各遺構の測量は1/10または1/20、遺跡全体の地形測量は1/200の縮尺で図化した。図面作成にあたってはトータルステーションを用いて実測した。

遺構内・遺物包含層の遺物の採り上げは、遺構ごとに番号を付け、トータルステーションを用い出土位置を記録して行った。出土遺物は、遺物カードに遺跡名・グリッド名・遺構名・遺物番号・出土層位・遺物名(種別)・日付等を記載し、ビニール袋に入れて保管した。

本発掘調査で得られた出土遺物と図面、写真などの記録は、遺跡調査部において整理した。遺物は実測図を作成し、遺構図面とともにイラストレーターを用いてデジタルトレースを行った。遺構写真は、調査時に撮影したコンパクトデジタルカメラデータから掲載した。遺物写真は一眼レフデジタルカメラを用いて遺跡調査部で撮影し、RAWデータから現像した。火山灰と放射性炭素年代測定・土器圧痕については、業者に委託して分析を行った。これらの整理の成果をインデザインを用いて編集し、報告書としてまとめた。報告書刊行後、遺物・各種記録は福島県文化財センター白河館(まほろん)に収蔵予定である。

（鶴　見）

第2章　遺構と遺物

第1節　遺構の分布

瀧ノ入遺跡は、隈川の段丘上に立地している遺跡である。塔の弟(へつり)から北東に約1.3kmの白岩地区にあり、白岩地区と雑根(ぞうね)地区を結ぶ町道雑根線沿いに位置している。今回の調査区は、遺跡の西側部分にあたり、北側と東側は又見山から伸びる急斜面であり、南側と西側は段丘崖となっている。段丘上のわずかな平坦面に遺跡が形成されており、調査区内は東側から西側に向かって緩やかに下っていく。調査区中央付近には、土砂崩れ等により堆積したものと考えられる礫層が広がる場所がある。

調査区では、竪穴住居跡１軒、土坑33基、井戸跡１基、集石遺構２基、焼土遺構２基、小穴371基、遺物包含層１カ所を確認した(図５)。なお、遺構の分布状況は、調査区の北側と南側とでは確認できる遺構の種類と時期が大きく異なる様相を呈している。

調査区北側は、北端が又見山から延びる斜面の裾部付近に当たり、裾部から調査区中央付近までが調査区内では最も平坦である。遺構は古代の竪穴住居跡１軒、古代から中世の井戸跡１基、縄文

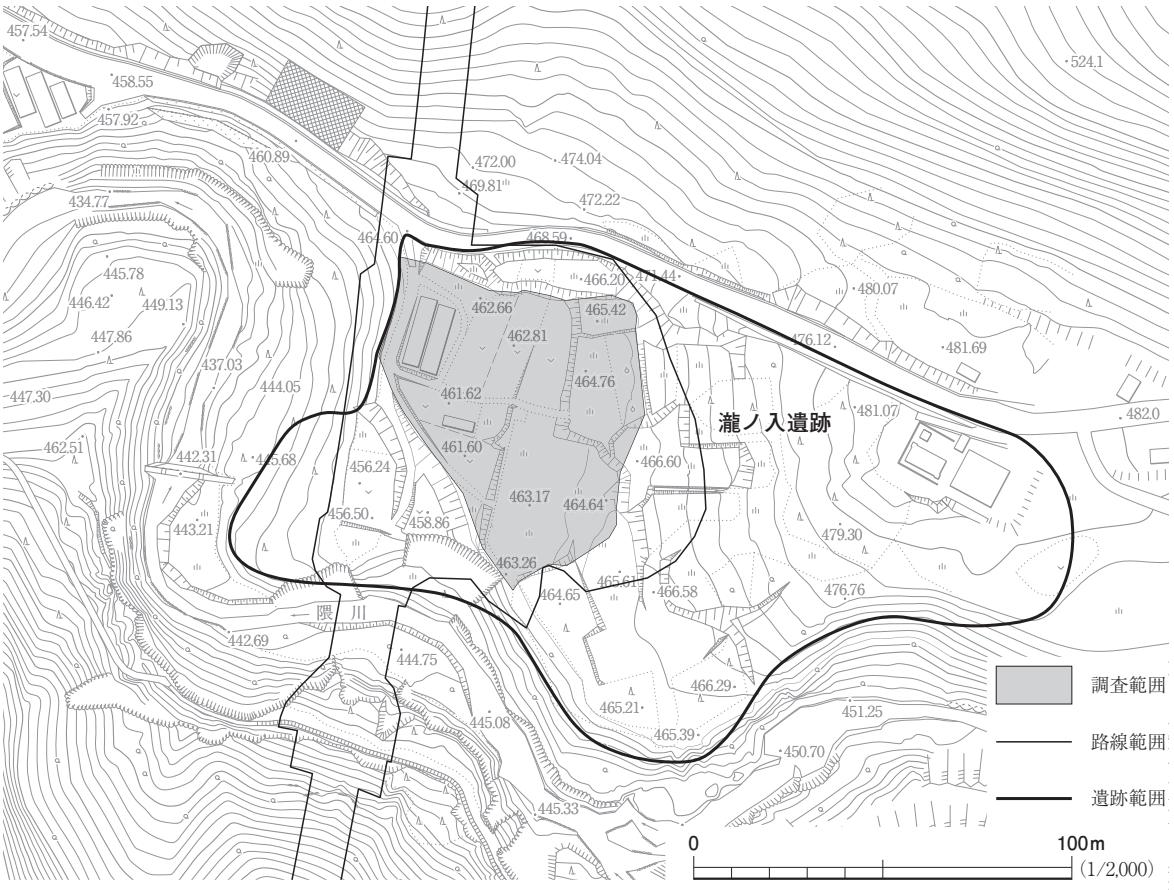


図４　調査区位置図

時代の土坑１基、時期不明の土坑11基、集石遺構２基、焼土遺構２基を確認した。遺物は縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器が出土している。また、遺構外からは縄文・弥生土器、石器も少数ではあるが出土している。なお、小穴から古代の土師器や中世の鉄製品が出土しており、放射性炭素年代測定の結果も踏まえると、古代・中世に居住域として利用されていたことが想定できる。

調査区南側では弥生時代中期後半以降の土坑19基、時期不明の小穴１基、縄文時代から弥生時代の遺物包含層１カ所を検出した。遺物包含層からは、弥生時代中期後半の土器および石器や石器製作時の剝片も多く出土している。土坑は、弥生時代中期後半の遺物を含む層を掘り込んでいるため、弥生時代中期後半以降と考えた。確認調査の経過から、土坑墓が多数検出されることを想定していたが、土坑墓の可能性があるのは18号土坑だけであった。弥生時代の遺物を含む層の下には、縄文時代晩期の遺物を含む層を確認した。調査区南側は、特に弥生中期後半の遺物が多く、土坑も近接する時期のものと考えられる。竪穴住居跡は確認できなかったが、表面に煤のついた甕が見られることから、近くに居住域があったことが推定される。

以上のように、調査区北側は古代から中世にかけての居住域としての性格が強い。それに対し、南側で確認された遺構は縄文・弥生時代の遺物包含層や弥生時代中期以降の土坑などで、調査区北側とは利用されていた時期が大きく異なっている。（鶴　見）

第２節　基本土層

基本土層は５層に大別した。以下、層ごとに特徴をまとめる（図６）。

ＬⅠは表土層で、腐葉土、畑の耕作土や、植林の際に整地した盛土などの土である。

ＬⅡは中世以降の層である。弥生時代から中世の遺物が少量含まれている。調査区北側の小穴はこの層で検出できるが、この層の上面では遺構の堆積土との色調の違いがあまりなく、輪郭を認識しにくい。

ＬⅢは沼沢パミスを含む黒褐色土を主体とした層である。遺物包含層であるＬⅢａ～ｃと、無遺物層のＬⅢｄ・ｅの５層に分層した。ＬⅢａは調査区内全体で確認できるが、ＬⅢｂ～ｅは調査区南側のみで確認した。以下、遺物を含む層について記述する。

ＬⅢａは縄文時代早期・後期・晩期、弥生時代中期後半の遺物を含む層である。この層に含まれる沼沢パミスの分析では、ＬⅢａの形成期に降下堆積があったことが推定されているが、縄文土器も早期から晩期の土器、弥生時代中期後半の土器が混在していて、下層のＬⅢｂからは弥生土器のみが出土していることから、二次堆積層によるもので、土砂崩れにより流入した層と判断している。

ＬⅢｂは、弥生時代中期後半の遺物を含む層である。調査区南側の土坑はこの層を掘り込んでいる。このことから、弥生時代中期後半以降の層と判断した。

ＬⅢｃは縄文時代晩期の遺物を含む層だが、出土量は少ない。調査区の南側のみで確認している。分析の結果、この層に含まれる軽石は、ＬⅢａ・ｂに含まれるものより径が大きく、風化が進んで

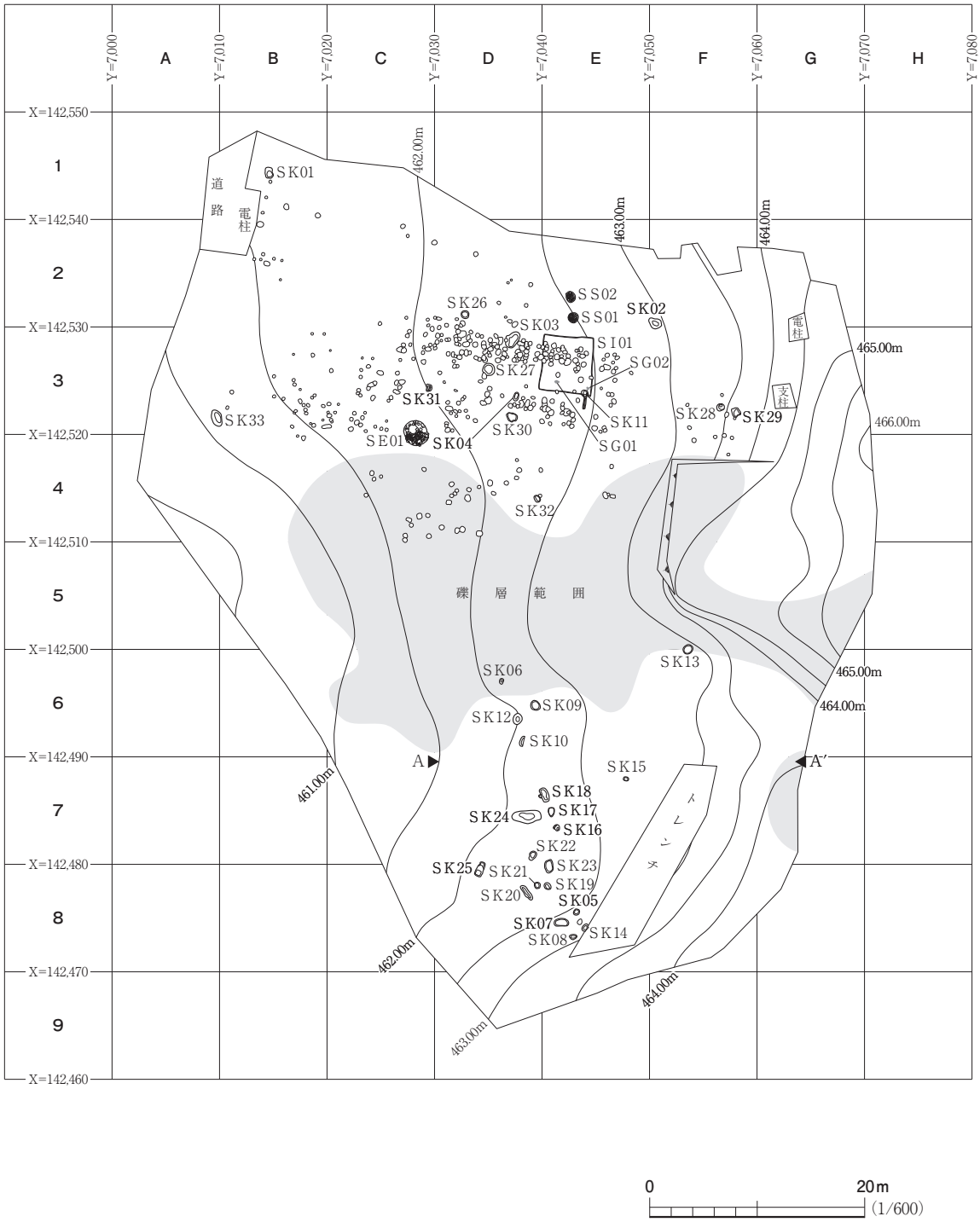
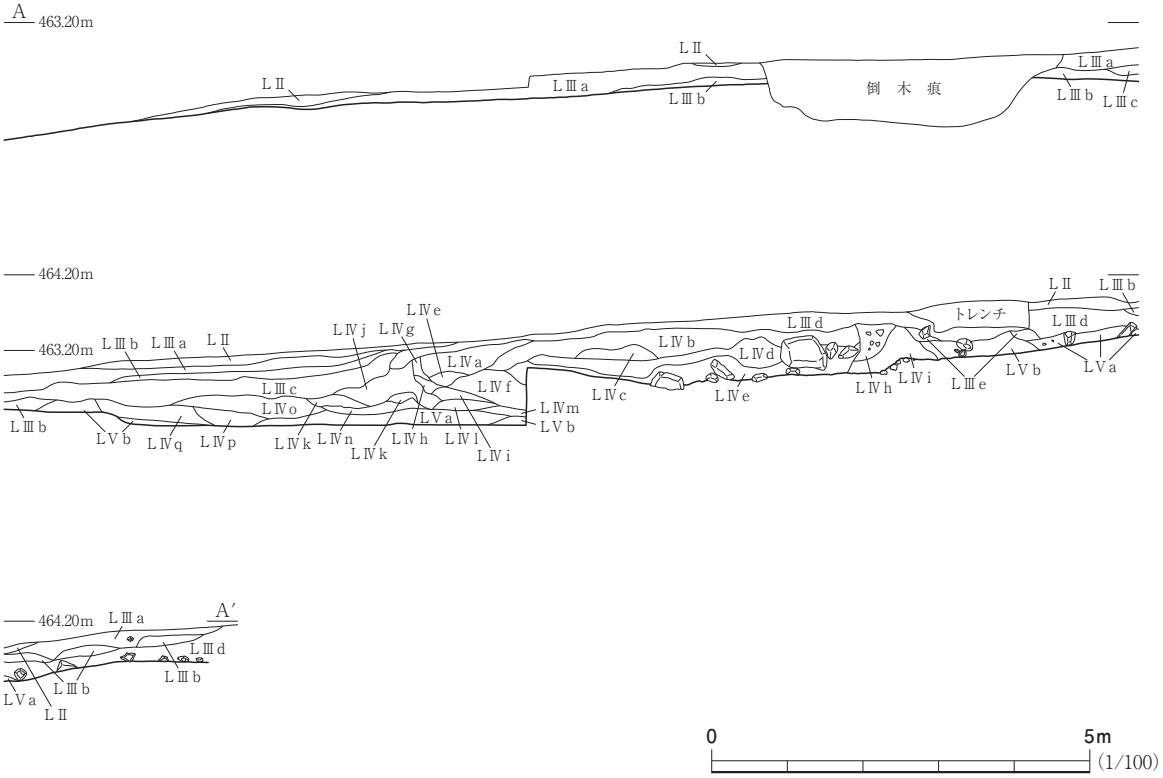

Y=7,000
A
Y=7,010
B
Y=7,020
C
Y=7,030
D
Y=7,040
E
Y=7,050
F
Y=7,060
G
Y=7,070
H
Y=7,080
X=142,550
1
X=142,540
2
X=142,530
3
X=142,520
4
X=142,510
5
X=142,500
6
X=142,490
7
X=142,480
8
X=142,470
9
X=142,460
道路
電柱
SK01
462.00m
463.00m
464.00m
SS02
SS01
SK02
SK26
SK03
SI01
SG02
SK27
SK31
SK33
SE01
SK04
SK30
SK11
SG01
SK28
SK29
電柱
支柱
465.00m
466.00m
SK32
礫層範囲
SK13
SK06
SK09
SK12
SK10
SK15
A
A′
461.00m
SK18
SK17
SK24
SK16
SK22
SK25
SK21
SK23
SK19
SK20
SK05
SK07
SK08
SK14
トレンチ
462.00m
464.00m
463.00m
0
20m
(1/600)

図5　遺構配置図



基本土層

ＬⅠ　表土
ＬⅡ　黒褐色粘砂質土　7.5YR2/2（N.P.微量含む）
ＬⅢａ　黒色粘砂質土　7.5YR2/1（N.P.少量含む）
ＬⅢｂ　極暗褐色粘砂質土　7.5YR2/3（N.P.少量、炭化物少量含む）
ＬⅢｃ　黒褐色粘砂質土　7.5YR3/2
（にぶい黄褐色粘砂質土塊〔10YR5/4〕、N.P.少量含む）
ＬⅢｄ　暗褐色粘砂質土　10YR3/3
（にぶい黄褐色粘砂質土塊〔10YR5/4〕、N.P.少量含む）
ＬⅢｅ　にぶい黄褐色粘砂質土　10YR4/3
ＬⅣａ　にぶい黄褐色粘砂質土　10YR5/4
ＬⅣｂ　灰黄褐色砂質土　10YR4/2
ＬⅣｃ　灰黄褐色砂質土　10YR5/2
ＬⅣｄ　明黄褐色砂質土　10YR6/6
ＬⅣｅ　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3
ＬⅣｆ　にぶい黄褐色砂質土　10YR4/3と
黒褐色粘質土　7.5YR3/1の互層
ＬⅣｇ　褐色粘砂質土　7.5YR4/3
ＬⅣｈ　褐色粘砂質土　7.5YR4/4
ＬⅣｉ　褐色粘砂質土　10YR5/6
ＬⅣｊ　灰黄褐色粘砂質土　10YR5/2（N.P.含む）
ＬⅣｋ　暗褐色粘砂質土　10YR3/4
ＬⅣｌ　黒褐色粘質土　10YR3/2
ＬⅣｍ　黒褐色粘質土　10YR3/1
ＬⅣｎ　暗褐色砂質土　10YR3/4
ＬⅣｏ　暗褐色粘砂質土　10YR3/3（N.P.含む）
ＬⅣｐ　にぶい黄褐色粘砂質土　10YR4/3
ＬⅣｑ　褐色粘砂質土　10YR4/4
ＬⅤａ　暗褐色土　10YR3/3（N.P.含む）
ＬⅤｂ　黄褐色砂質土　10YR4/3

図６　基本土層

おり、約50,000年前の水沼火砕堆積物と呼ばれるテフラに由来すると推定されている。

ＬⅣは調査区南側のみで確認した層で、砂や粘土などを多く含む水性堆積の層と、その上に堆積した黒褐色や暗褐色の土を基調とした土を一括してＬⅣとし、17層に細別した。いずれの層も無遺物層である。下半には砂を多く含む層があり、粘土と砂の層が互層になっている層もあることから、谷の埋没時の水性堆積層と判断した。上半の堆積土は地山に近い明るい色調の堆積土であり、土砂崩れなどで地山の土が流入した層と判断した。

ＬⅤは無遺物層で、遺構はこの層まで掘り込まれている。ＬⅤａ・ｂの２層に分層した。調査区中央付近では、多量の礫を含んでいる。　（鶴　見）

第３節　竪 穴 住 居 跡

１号住居跡　ＳＩ01

遺　　構（図７、写真７・８）

本遺構は、調査区北側の中央付近、Ｄ３グリッドからＥ３グリッドにかけて位置する。検出面はＬⅡである。本遺構は11号土坑、１・２号焼土遺構、多数の小穴が重複し、11号土坑以外いずれも本遺構より新しい。遺構の検出段階で重複していることが確認できた小穴もあるが、輪郭がはっきりとしない小穴も多く、住居跡の床面まで掘り下げた段階で輪郭が明瞭になったものもある。

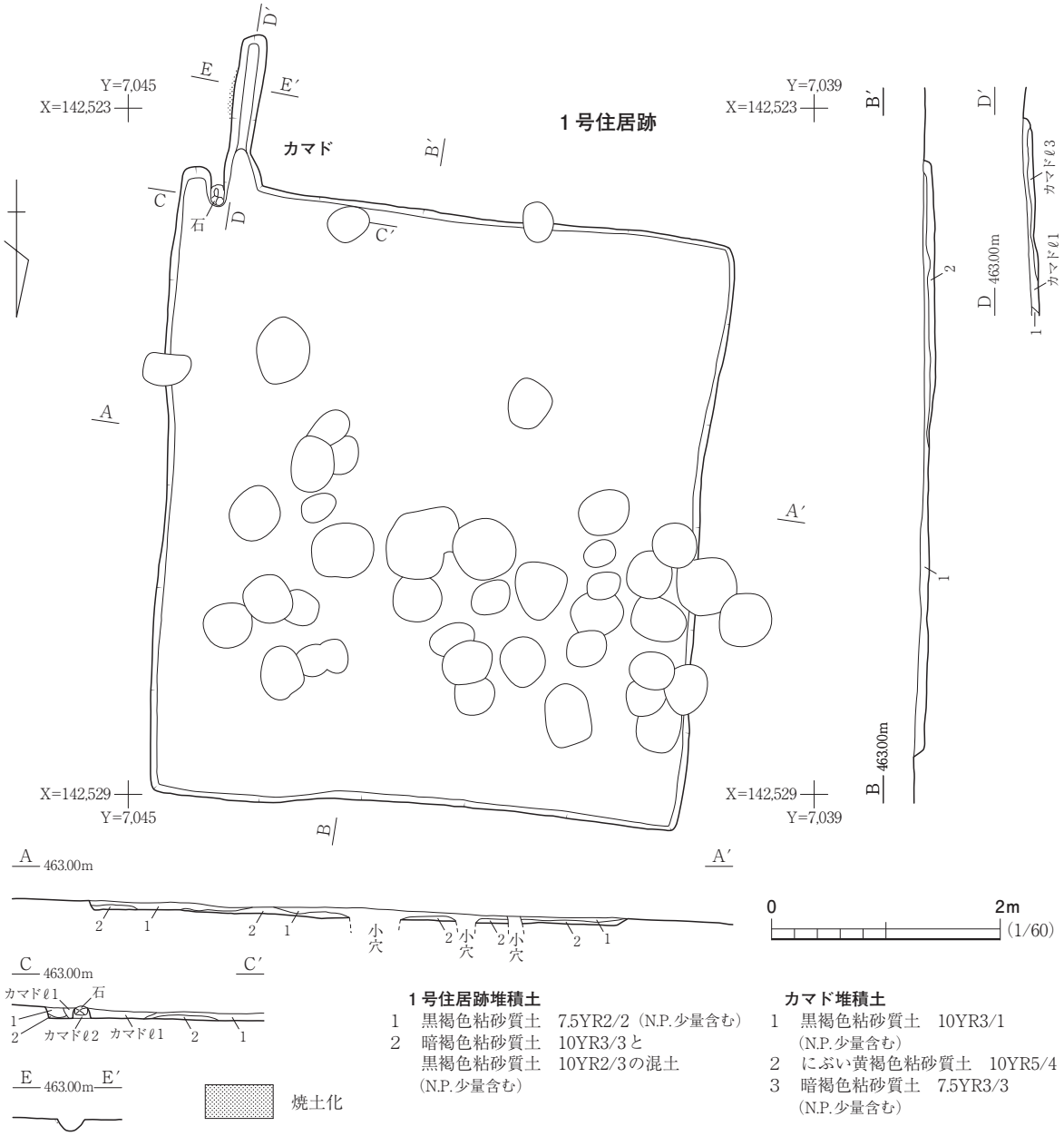


図７　１号住居跡

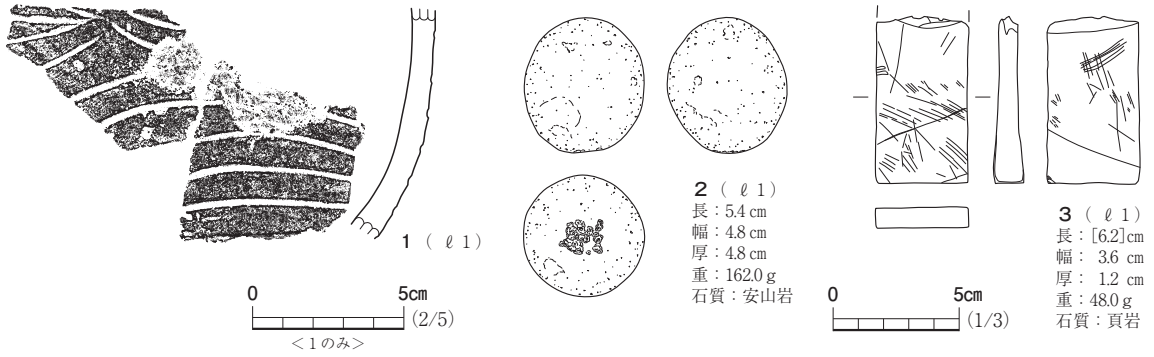


図8　1号住居跡出土遺物

本遺構については、ＬⅡの掘削時に黒色土の中にわずかに色調が異なる部分があり、カマドの煙道と推定される焼土を含んだ範囲が認識できたことから住居跡と判断して調査を行った。遺構内の堆積土は２層に分層でき、いずれも自然堆積と判断した。

住居跡の平面形は、南北5.15ｍ、東西4.7ｍの長方形で、検出面からの深さは10cm程である。周壁はもともとの立ち上がりを留めていない。床面は平坦で、貼床はされていなかった。また、壁際に周溝も確認されていない。多数の小穴が重複しているが、住居跡に伴うものではないと判断した。

カマドは南壁の東コーナーに構築されていた。残存状況は悪く、上部は大きく削平されている。堆積土は３層に分層できた。各部の計測値は、燃焼部で長さ50cm、最大幅34cm、煙道は長さ100cm、幅23cmである。東側の袖部が残存していて、中に石を用いて構築されていた。燃焼部が焼けた様子は確認できない。燃焼部の立ち上がりは極めて緩やかで、煙道部との段差はほとんどない。煙道は南方向に直線的に伸び、東壁の一部が熱を受けて焼土化している。

遺　　物（図８、写真20）

出土遺物は３点掲載した。１は縄文土器である。上側に連弧文状の沈線を、下側には横走沈線が描かれている。連弧文の結節点に瘤が貼り付けられていないため、瘤付土器の中でも早い段階のものの可能性がある。２は敲石である。楕円形の礫で、先端部に敲打の痕跡が確認できる。３は砥石で、一部欠損している。両面に研磨の痕跡が明瞭に確認できる。仕上げ用の砥石と思われる。

ま と め

本遺構は詳細な年代を示す遺物がないものの、カマドを持つこと、周辺から古代の土師器・須恵器が出土していることから、古代の竪穴住居跡と考えている。下郷町で調査事例のある竪穴住居跡では、カマドをコーナーに持っているものが数軒確認されている。カマドの構築位置が類似していることからも古代に属する可能性が高いと判断している。　　（鶴　見）

第４節　　土　　坑

土坑は33基検出した。土坑からは明確な時期を判断できる遺物が出土していないが、時代ごとに特徴のある土坑のみを説明していく。なお、所属する時期については土層観察の所見・自然科学

分析の結果などから判断した。土坑の検出位置や計測値については、表２にまとめた。

縄文時代の土坑

28号土坑　ＳＫ28（図12、表２－２）

調査区中央からやや北東寄りのＦ３グリッドに位置し、西側の谷に向かう緩斜面上に立地する。平面形は不整な楕円形で、規模は長軸73㎝、短軸64㎝、深さは検出面から最大22㎝である。断面形は椀形で､南西側に緩やかに立ち上がる。堆積土は３層に分層した。いずれも自然堆積土である。出土遺物はなかったが、ℓ２中から炭化物粒を検出した。この炭化物の放射性炭素年代測定を実施したところ、暦年較正年代で1281calBC－1124calBC(95.4％)という年代が得られた(付章第３節参照)。この年代は、縄文時代後期から晩期に相当するものである。周囲では縄文時代後期・晩期の土器が出土しているため、28号土坑も当該時期の遺構と判断した。性格については不明である。

弥生時代中期後半以降の土坑

弥生時代中期後半以降の土坑としたのは、５・７～10・12～25号土坑の19基である。全て調査区南側で検出し、検出面はＬⅢａまたはＬⅢｂ上面である。これらの土坑は、弥生時代の遺物を含むＬⅢｂ層を掘り込んでいることから、弥生時代中期後半以降と判断した。堆積土中から遺物が出土したものはなく、詳細な時期については不明であるが、ＬⅢｂからは弥生時代以外の遺物が出土しておらず､土坑の周囲からは多くの弥生土器や石器が集中して出土している。これらのことから、上記の土坑も遺物の年代と近接する時期に属する可能性が高いと考えている。性格について判断できる所見は得られていない。これらの土坑のうち、平面形、堆積土に特徴のある18・20号土坑を中心に記述する。

18号土坑　ＳＫ18（図11、表２－２、写真11）

Ｄ・Ｅ７グリッドに位置する。遺構の平面形は隅丸長方形を呈するが、中央西側付近には、外側にステップ上に張り出した部分がある。規模は長軸134㎝、張り出しを除いた短軸が70㎝、深さは検出面から最大29㎝である。底面は平坦ではなく、凹凸が見られる。周壁は直立していない。堆積土は２層に分層した。堆積土中にはＬⅤｂに由来する黄褐色土塊が含まれており、埋め戻し土の可能性もある。遺物は出土していない。

弥生時代中期後半には、平面形が長方形の土坑墓があり、その上面に土器を伴う事例が多数見つかっている。本遺構の上面からは土器は確認されなかったが、周囲からは多くの土器が出土している。平面形や堆積土の状況などから、土坑墓の可能性も想定される。

20号土坑　ＳＫ20（図11、表２－２、写真11）

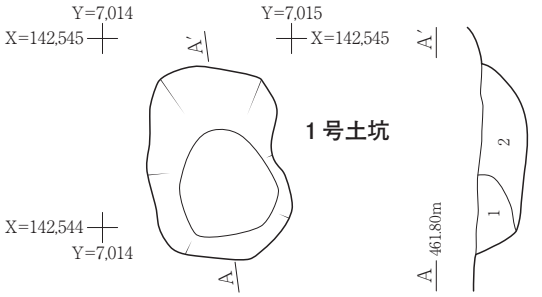
調査区南端部のＤ８グリッドに位置する。規模は長軸163㎝、短軸53㎝という幅の狭い長楕円形をしている。深さは検出面から最大25㎝あり、底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に分層した。このうち、ℓ１・２は炭化物や焼土塊を含む人為堆積土、ℓ３は自然堆積土と判断した。

ℓ１から弥生土器が出土しているが、検出面付近からの出土のため、遺構の年代を示す確実なものではない。また、細片のため図示していない。炭化物や焼土塊を含むが、付近に火を扱った痕跡はない。詳しい性格については不明である。

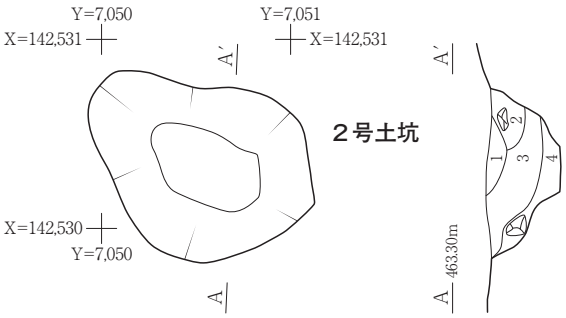
平安時代以前の土坑

11号土坑　ＳＫ11（図10、表２－１、写真10）

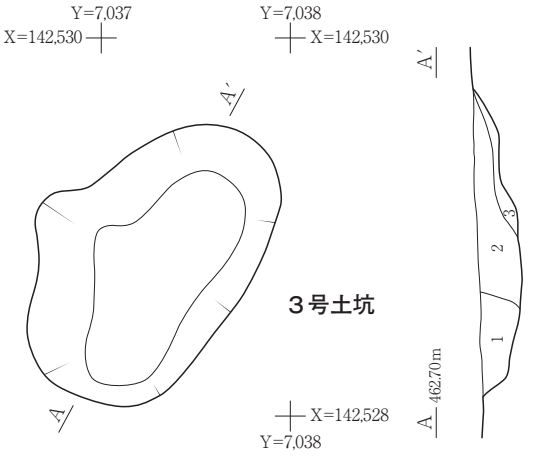
平安時代の１号住居跡の堆積土除去後に検出した。そのため、平安時代以前の土坑と考えている。



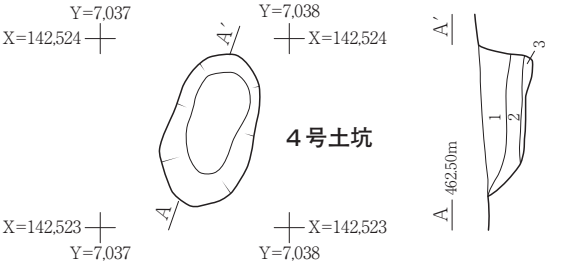
１号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR2/2
（炭化物、１～３㎝のN.P.少量含む）
2　黒褐色粘砂質土　10YR2/2
（５㎝程のN.P.多量含む）



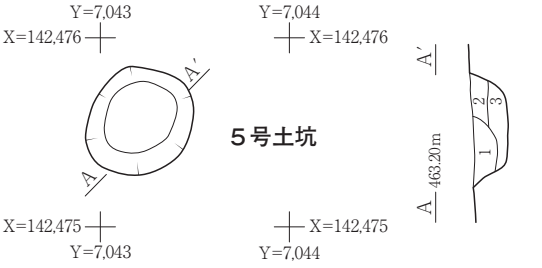
２号土坑堆積土
1　暗褐色粘砂質土　10YR3/4（黒褐色粘砂質土　10YR3/1少量、５～20㎜のN.P.微量含む）
2　暗褐色粘砂質土　10YR3/3（10㎝程の礫混ざる、１～２㎜のN.P.微量含む）
3　黒褐色粘砂質土　10YR2/2（１～２㎜のN.P.微量含む）
4　黒褐色粘砂質土　10YR2/3とにぶい黄褐色粘砂質土　10YR4/3（壁面崩落土）の混土



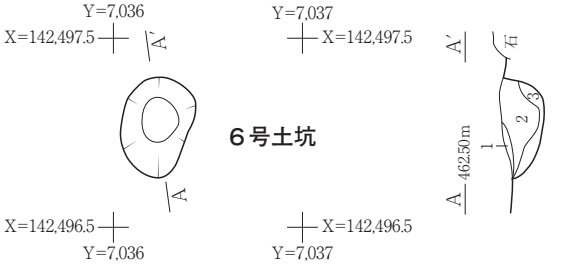
３号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR3/2と
褐色粘砂質土　10YR4/4の混土（N.P.微量含む）
2　黒褐色粘砂質土　10YR2/3（N.P.少量含む）
3　暗褐色粘砂質土　10YR3/4（N.P.少量含む）



４号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　7.5YR3/1（N.P.少量含む）
2　黒褐色粘砂質土　7.5YR2/2（N.P.少量含む）
3　黒色粘砂質土　7.5YR2/1（にぶい黄橙色土塊〔10YR6/3〕含む）

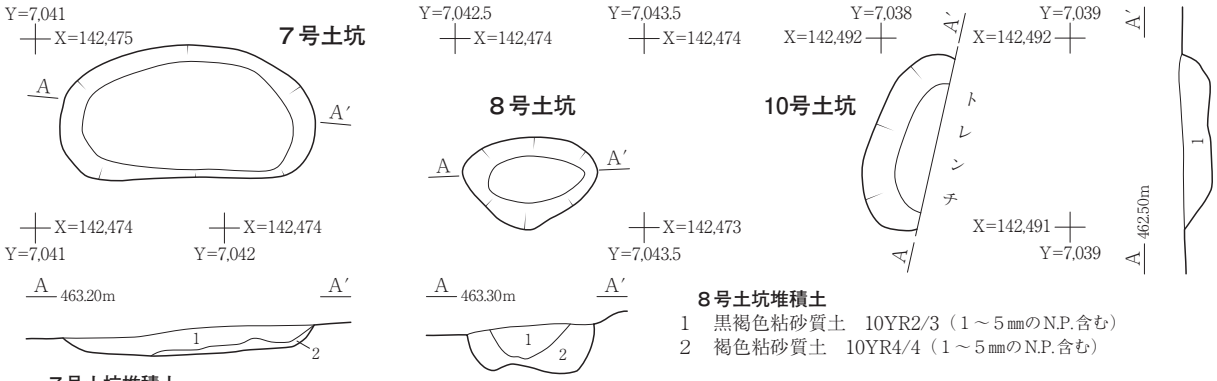


５号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR2/3（N.P.少量含む）
2　にぶい黄褐色粘砂質土　10YR4/3（N.P.微量含む）
3　褐色粘砂質土　10YR4/4（黒褐色土塊〔10YR2/2〕含む）



６号土坑堆積土
1　にぶい褐色粘質土　7.5YR5/3とにぶい褐色粘質土　7.5YR5/4の混土
2　暗褐色粘砂質土　10YR3/4（炭化物微量、N.P.少量含む）
3　褐色粘砂質土　10YR4/4

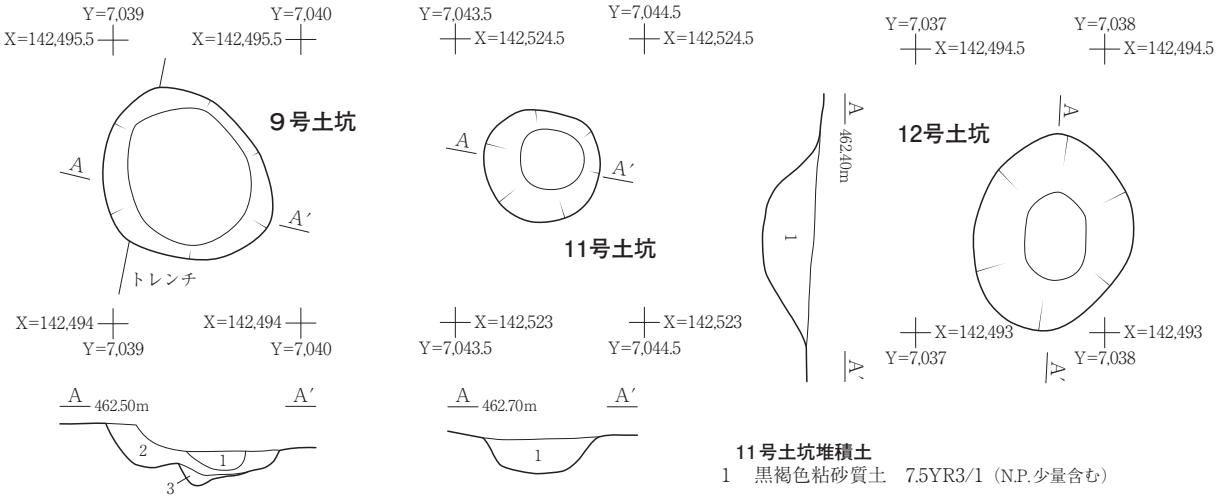
図９　１～６号土坑



７号土坑堆積土
1　黒色粘砂質土　10YR2/1（５㎜程のN.P.含む）
2　黒褐色粘砂質土10YR3/2

８号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR2/3（１～５㎜のN.P.含む）
2　褐色粘砂質土　10YR4/4（１～５㎜のN.P.含む）

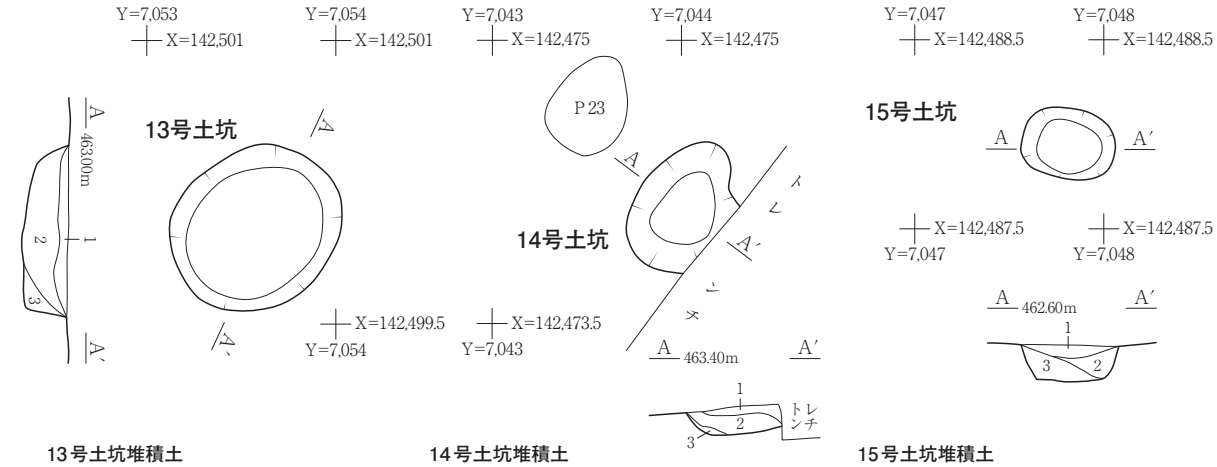
10号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR2/2（１～５㎜のN.P.含む）



９号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR2/2（５㎜程のN.P.少量含む）
2　黒褐色粘砂質土　10YR3/2（１～２㎜のN.P.含む）
3　にぶい黄褐色粘砂質土　10YR4/3

11号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　7.5YR3/1（N.P.少量含む）

12号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR3/1（N.P.少量含む）

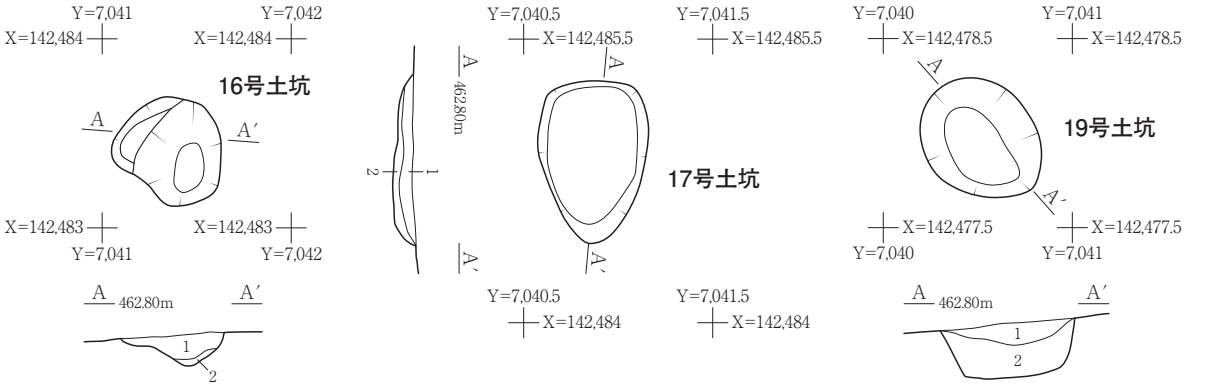


13号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR3/1
（N.P.微量含む）
2　黒褐色粘砂質土　10YR2/2
（１㎝程のN.P.少量含む）
3　黒褐色粘砂質土　10YR3/2
（N.P.微量含む）

14号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR2/2（N.P.少量含む）
2　暗褐色粘砂質土　10YR3/4（N.P.少量含む）
3　暗褐色粘砂質土　10YR3/3
（褐色土塊〔10YR4/4〕含む、壁面崩落土）

15号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　7.5YR3/1（N.P.少量含む）
2　黒褐色粘質土　7.5YR3/2（N.P.微量含む）
3　暗褐色粘質土　10YR3/3
（にぶい黄褐色土塊〔10YR5/4〕含む）

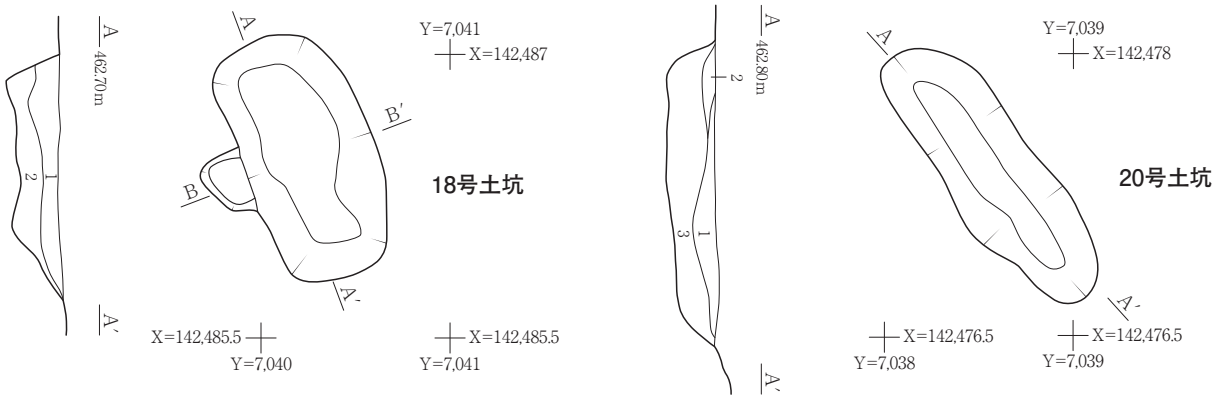
図10　７～15号土坑



16号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　7.5YR3/1
（1㎝前後のN.P.少量含む）
2　灰黄褐色粘質土　10YR4/2
（黒褐色土塊〔10YR2/2〕少量含む）

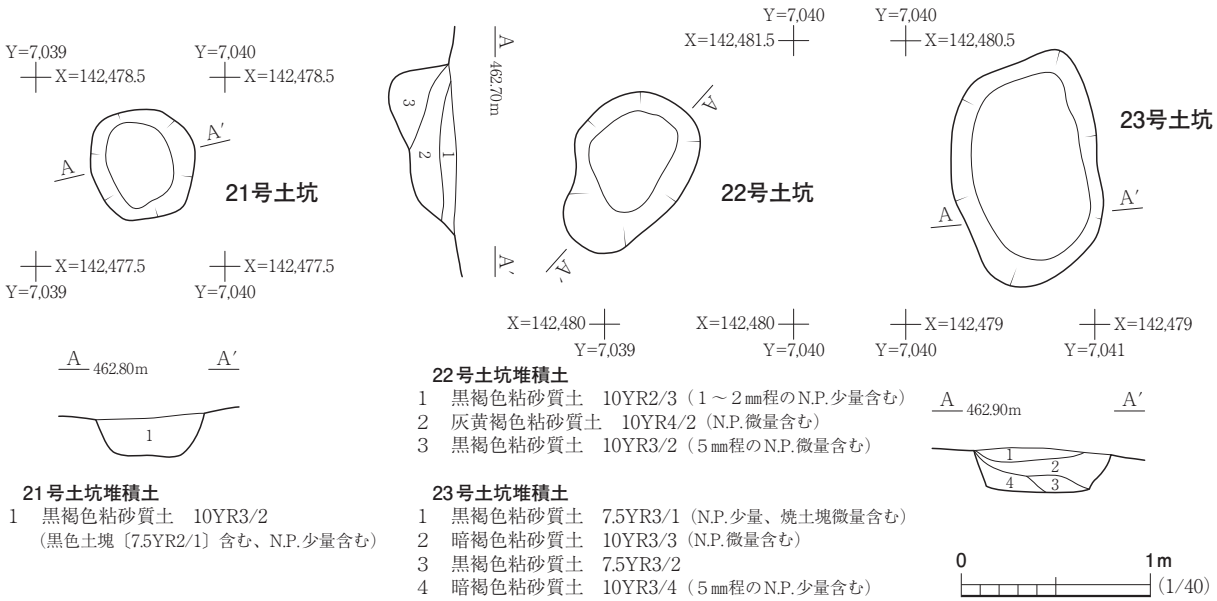
17号土坑堆積土
1　灰黄褐色粘砂質土　10YR4/2（N.P.少量含む）
2　にぶい黄褐色粘砂質土　10YR4/3
（褐色土塊〔10YR4/6〕少量含む）

19号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　7.5YR3/1（N.P.少量含む）
2　黒褐色粘砂質土　10YR3/2
（5～10㎜のN.P.少量含む）



18号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　7.5YR3/2（N.P.微量含む）
2　暗褐色粘砂質土　10YR3/3
（にぶい黄褐色土塊〔10YR5/4〕含む、N.P.少量含む）

20号土坑堆積土
1　黒色粘砂質土　7.5YR2/1（炭化物微量、N.P.少量含む）
2　黒褐色粘砂質土　7.5YR3/1
（明赤褐色焼土塊〔2.5YR5/6〕・N.P.少量、炭化物微量含む）
3　暗褐色粘砂質土　10YR3/3（N.P.少量含む）

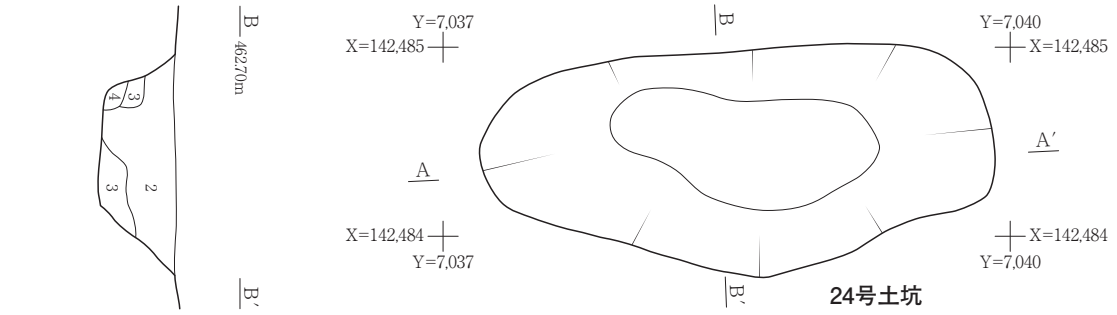


21号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR3/2
（黒色土塊〔7.5YR2/1〕含む、N.P.少量含む）

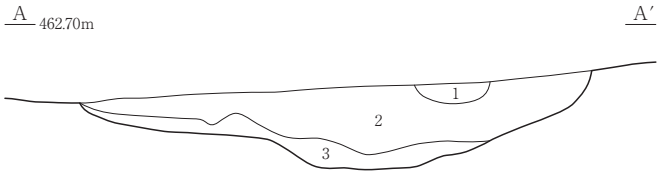
22号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR2/3（1～2㎜程のN.P.少量含む）
2　灰黄褐色粘砂質土　10YR4/2（N.P.微量含む）
3　黒褐色粘砂質土　10YR3/2（5㎜程のN.P.微量含む）

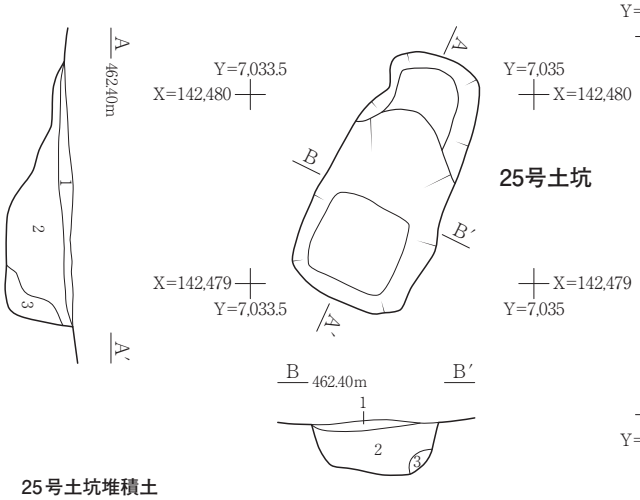
23号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　7.5YR3/1（N.P.少量、焼土塊微量含む）
2　暗褐色粘砂質土　10YR3/3（N.P.微量含む）
3　黒褐色粘砂質土　7.5YR3/2
4　暗褐色粘砂質土　10YR3/4（5㎜程のN.P.少量含む）

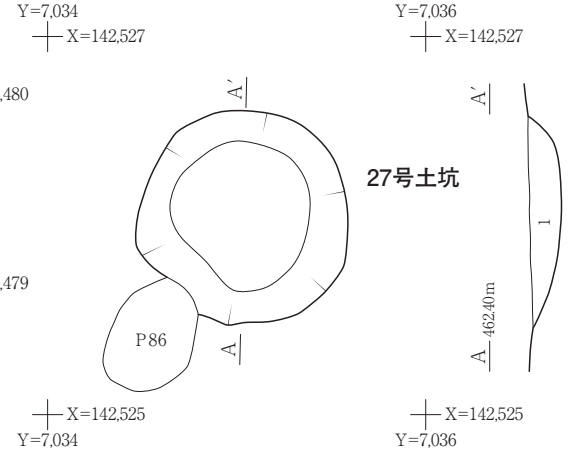
図11　16～23号土坑



24号土坑堆積土
1　黒色粘砂質土　7.5YR2/1（N.P.微量含む）
2　黒褐色粘砂質土　10YR3/2（N.P.少量含む）
3　にぶい黄褐色粘砂質土　10YR4/3
4　褐色粘質土　10YR4/4

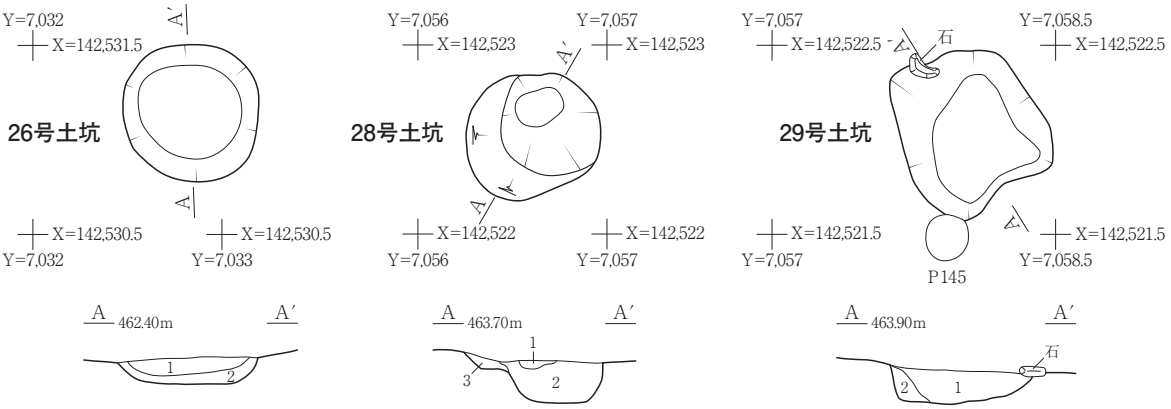






25号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR3/2（黄褐色土塊〔10YR5/6〕少量含む）
2　黒褐色粘砂質土　10YR2/2
3　黒褐色粘砂質土　10YR2/3（明黄褐色土塊〔10YR6/6〕少量含む）

27号土坑堆積土
1　黒色粘質土　10YR2/1（褐色砂質土塊〔10YR4/4〕少量含む）



26号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR3/1
2　黒色土　10YR2/1と
　　黄褐色土　2.5Y5/4の混土

28号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR2/2
2　暗褐色土　10YR3/3
　　（黒褐色土塊〔10YR2/3〕少量含む）
3　黄褐色土　10YR5/6と
　　暗褐色土　10YR3/4の混土

29号土坑堆積土
1　黒褐色粘砂質土　10YR2/2（N.P.微量含む）
2　暗褐色粘砂質土　10YR3/4

図12　24～29号土坑

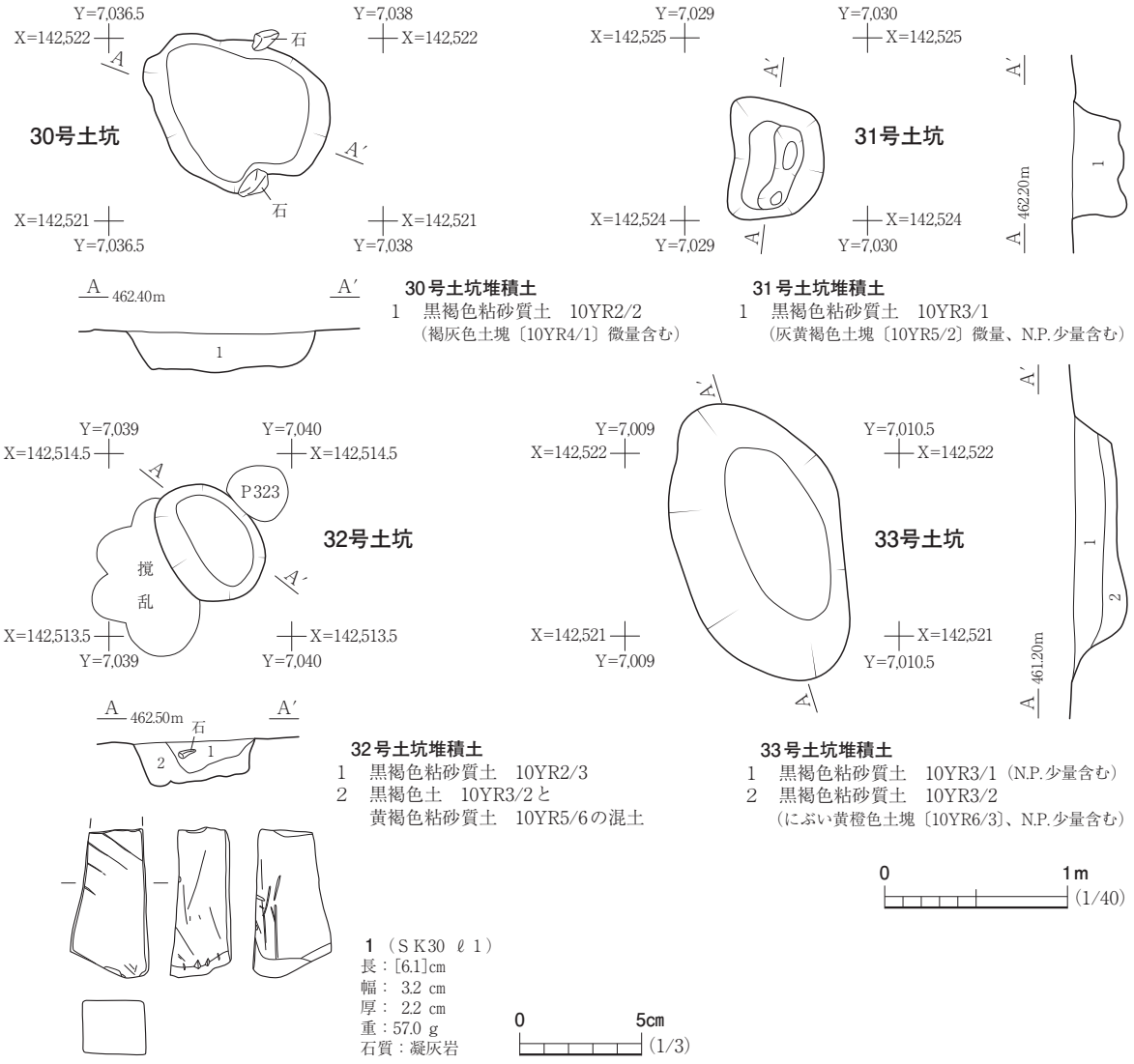


図13　30～33号土坑、出土遺物

表２－１　土坑一覧

遺構名	検出グリッド	検出面	平面形	規模（cm）			出土遺物	時期	性格	備考
				長軸	短軸	深さ				
１号土坑	Ｂ１	ＬⅢａ上面	楕円形	105	67	23	なし	不明	不明	
２号土坑	Ｆ２	ＬⅢａ上面	楕円形	127	99	41	なし	不明	不明	
３号土坑	Ｄ３	ＬⅢａ上面	楕円形	166	115	24	なし	不明	不明	
４号土坑	Ｄ３	ＬⅢａ上面	楕円形	83	47	29	なし	不明	不明	
５号土坑	Ｅ８	ＬⅢｂ上面	楕円形	60	53	19	なし	弥生中期後半以降	不明	
６号土坑	Ｄ６	ＬⅣｂ上面	楕円形	53	38	22	なし	不明	不明	
７号土坑	Ｅ８	ＬⅢｂ上面	楕円形	135	69	14	なし	弥生中期後半以降	不明	
８号土坑	Ｅ８	ＬⅢｂ上面	楕円形	72	48	24	なし	弥生中期後半以降	不明	
９号土坑	Ｄ６	ＬⅢｂ上面	楕円形	97	84	32	なし	弥生中期後半以降	不明	
10号土坑	Ｄ６	ＬⅢｂ上面	楕円形	95	35	15	なし	弥生中期後半以降	不明	
11号土坑	Ｅ３	ＬＶｂ	円形	63	60	18	なし	平安時代以前	不明	１号住居跡より古い
12号土坑	Ｄ６	ＬⅢｂ	楕円形	98	85	27	なし	弥生中期後半以降	不明	
13号土坑	Ｆ５・Ｆ６	ＬⅢｂ	楕円形	94	83	24	なし	弥生中期後半以降	不明	

表２－２　土坑一覧

遺構名	検出グリッド	検出面	平面形	規模（cm）			出土遺物	時期	性格	備考
				長軸	短軸	深さ				
14号土坑	Ｅ８	ＬⅢｂ	楕円形	74	47	18	なし	弥生中期後半以降	不明	
15号土坑	Ｅ７	ＬⅢｂ	楕円形	49	38	21	なし	弥生中期後半以降	不明	
16号土坑	Ｅ７	ＬⅢｂ	不整形	58	58	18	なし	弥生中期後半以降	不明	
17号土坑	Ｅ７	ＬⅢｂ	楕円形	86	59	10	なし	弥生中期後半以降	不明	
18号土坑	Ｄ７・Ｅ７	ＬⅢｂ	隅丸長方形	134	70	31	なし	弥生中期後半以降	土坑墓か	
19号土坑	Ｅ８	ＬⅢｂ	楕円形	72	57	29	なし	弥生中期後半以降	不明	
20号土坑	Ｄ８	ＬⅢｂ	長楕円形	163	53	25	弥生土器	弥生中期後半以降	不明	遺物は細片のため、図示不可
21号土坑	Ｄ８	ＬⅢｂ	楕円形	60	55	23	なし	弥生中期後半以降	不明	
22号土坑	Ｄ７	ＬⅢｂ	楕円形	90	64	32	なし	弥生中期後半以降	不明	
23号土坑	Ｅ７・Ｅ８	ＬⅢｂ	楕円形	114	80	28	なし	弥生中期後半以降	不明	
24号土坑	Ｄ７	ＬⅢｂ	楕円形	252	122	45	なし	弥生中期後半以降	不明	
25号土坑	Ｄ７・Ｄ８	ＬⅢｂ	隅丸長方形	140	70	35	石器	弥生中期後半以降	不明	遺物は細片のため、図示不可
26号土坑	Ｄ２	ＬⅤｂ	円形	72	72	15	なし	不明	不明	
27号土坑	Ｄ３	ＬⅤｂ	円形	112	112	17	なし	不明	不明	Ｐ86より古い
28号土坑	Ｆ３	ＬⅤｂ	楕円形	73	64	22	なし	縄文後期～晩期	不明	年代測定を実施
29号土坑	Ｆ３	ＬⅤｂ	隅丸長方形	82	77	18	なし	不明	不明	Ｐ145より古い
30号土坑	Ｄ３	ＬⅡ	楕円形	107	82	21	砥石	中世以降	不明	
31号土坑	Ｃ３	ＬⅤｂ	隅丸長方形	67	50	30	なし	不明	不明	
32号土坑	Ｄ４	ＬⅤｂ	楕円形	70	52	24	なし	不明	不明	Ｐ323より古い
33号土坑	Ａ３・Ｂ３	ＬⅤｂ	楕円形	161	94	30	なし	不明	不明	

平面形は円形で、堆積土は単層の自然堆積土である。遺物は出土していない。性格や詳細な所属時期については不明である。

中世以降の土坑

30号土坑　ＳＫ30（図13、表２－２、写真12・20）

調査区中央からやや北寄りのＤ３グリッドに位置する。検出面はＬⅡである。平面形は不整な楕円形を呈する。規模は長軸107cm、短軸82cm、深さは検出面から最大21cmである。堆積土は単層の自然堆積土で、断面形は鍋底形である。底面および周壁表面には５～10cm程の礫が多数見られるが、遺構周辺の状況から地山に含まれるものと考えられる。

堆積土中からは図13－１の砥石が出土した。断面形は正方形で、３面に使用の痕跡が確認できる。本土坑の周囲には多くの中世の小穴があり、周辺の遺構の状況から考えても、中世のいずれかの時期に使用されたものが流入または廃棄されたと考えられる。以上のことから、本遺構は中世以降のものと判断した。性格については不明である。

時期不明の土坑（図９・12・13、表２－１・２、写真９・12）

１～４・６・26・27・29・31～33号土坑の11基は時期不明の土坑である。土器・炭化物が出土せず、土層の観察の結果からも所属時期が判断できなかった。６号土坑は、調査区南側のＤ６グリッ

ドに位置し、ＬⅣｂ上面で検出した。それ以外の土坑は調査区北側で検出したもので、検出面はＬＶｂである。平面形は、隅丸長方形の31号土坑以外は円形または楕円形である。堆積土は単層または２層のものが多く、いずれも自然堆積である。（鶴　見）

第５節　井　戸　跡

１号井戸跡　ＳＥ01

遺　　構（図14、写真13）

調査区北側のＣ３・４グリッドで検出した。当初はＬⅡ上面で礫の集中域が確認され、集石遺構あるいは地山に含まれている礫が露出しているという想定で調査を進めた。周囲をＬＶｂまで掘り下げたところ、礫集中箇所の一角に円形の黒褐色土の範囲を確認したため、土坑と考えて調査を進めたが、最終的には井戸枠と考えられる板と湧水が確認されたため、井戸跡とした。遺構の南側半分は石材が集中していたのに対し、北側半分は石材が少なかった。そのため、石の状況が確認できるように残しながら、北側半分を掘削して調査を進めた。

平面形は南北に長い楕円形である。掘形まで含めた規模は、南北2.32ｍ、東西2.08ｍ、検出面からの深さは1.46ｍである。井戸枠の内側の形状は円形であり、大きさは径0.8m程である。周辺から井戸の上屋の柱穴は確認していない。

井戸枠は、掘形の中心からわずかに西側にずれた場所に構築されている。東・西・南は板が残存していたが、北側では残存していなかった。残存していた井戸枠の上部から、底面までの深さは最大で30㎝程である。これは水位の上限とほぼ同じ高さである。土層の観察では板の痕跡は見られず、もともとの長さは不明であるが、本来はより長い板であったと推定される。

井戸枠は４枚が原位置を保っていた。ℓ３中からも井戸枠と推定される板材やその破片が出土している。そのため、本来の井戸枠の構造は、掘形内部に縦板を並べて方形に構築したものと考えられる。板の幅は、東西の板が24㎝前後で、南側の板は30㎝前後のものが使用されている。井戸枠内部の規模は、東西40㎝で、南北もほぼ同規模と推定される。

掘形堆積土中からも複数の木材を検出した。これらの板は井戸枠材から15～20㎝間隔をあけ、井戸枠に沿うように配置されていた。井戸枠同様、底面から30㎝程の高さまでが残存していた。また、使用されている板材の幅は井戸枠に10～30㎝とばらつきが見られる。北東隅からは角材も検出している。これらの木材が検出された東・南側は、井戸枠から掘形壁面までの間隔が広く、土量が多い。そのため、これらの木材は、掘形の土の崩落を防ぐ土留め対策として設置されたものと推定される。

遺構内の堆積土は６層に分層した。いずれも黒褐色を基調としていて、ℓ１～３が井戸枠内の堆積土、ℓ４～６が掘形内の堆積土である。ℓ１～３は自然堆積、ℓ４～６は人為堆積である。断面形はＵ字形を呈している。東西断面では中位部に屈曲が認められるため、２段階での掘り込みの状

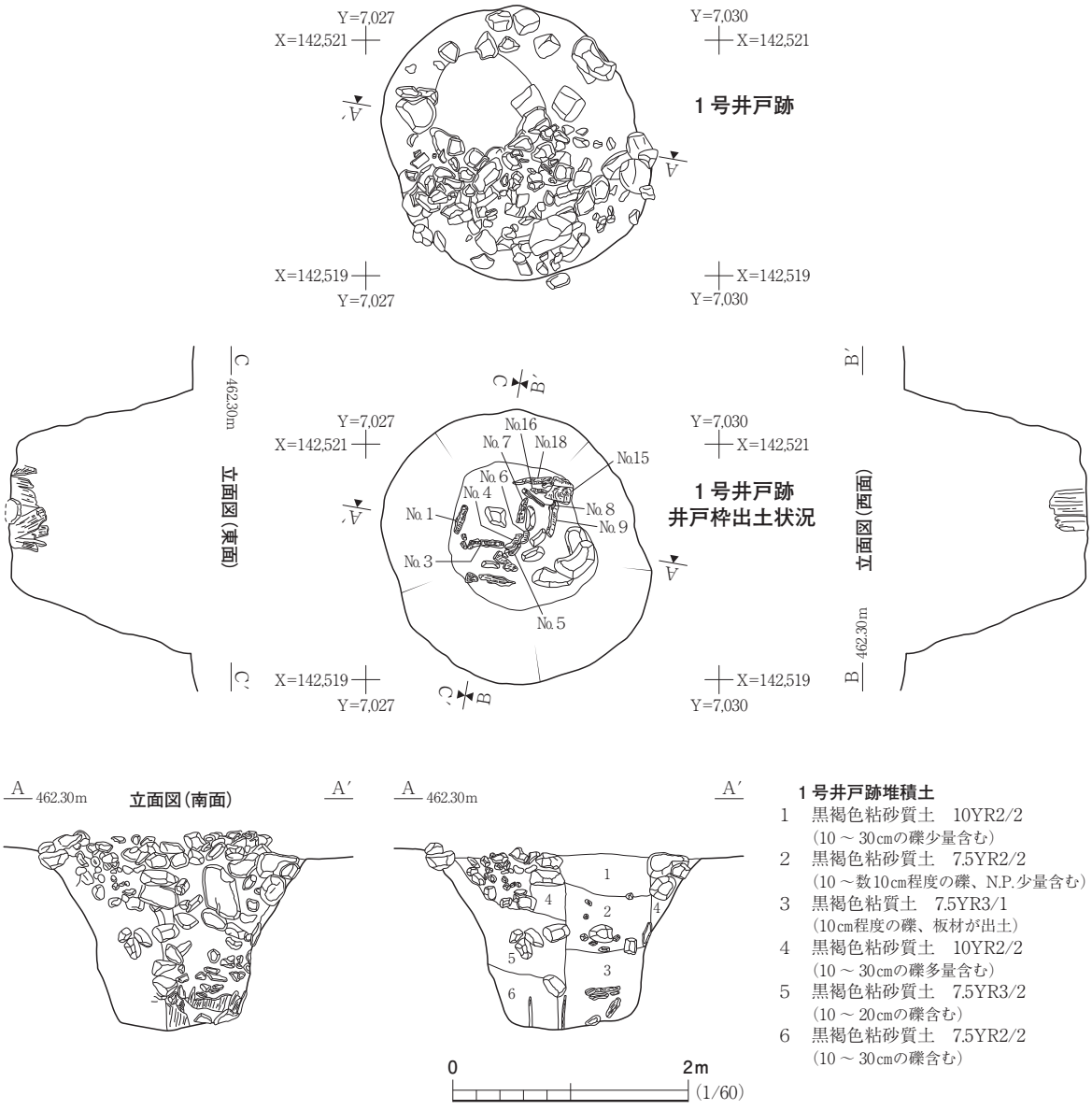


図14　１号井戸跡

況が見えるが、南北断面では明瞭ではない。ℓ１・４には20～30㎝大の礫が含まれているが、特にℓ４に多く含まれていた。ℓ４は掘形上部の堆積土であり、裏込の補強として多量の石を使用したものと思われる。また、井戸枠内堆積土との境付近に認められた石は、それよりも外側のものよりも大きく、本来は井戸枠を囲うように配置してあった可能性が高い。これらの石については、掘削時に本来の位置を留めていると判断したものは残したが､掘削中に崩落してしまったものも多い。残存していた石から、円形に配置されていたと推定される。また、ℓ１～３に含まれていた石は、上縁部の石が崩落して流入したものと考えられる。ℓ５・６は同じ掘形の堆積土であるℓ４に比べ、含まれる石の量が少ない。これは、掘形の埋め戻しに掘り上げた土を使用したためと推測される。井戸枠内の堆積土であるℓ３は粘性が強く、層位中程からは湧水があり、木片も出土した。底面から30㎝程の高さまでが水位の上限であって、湧水層にあたる。

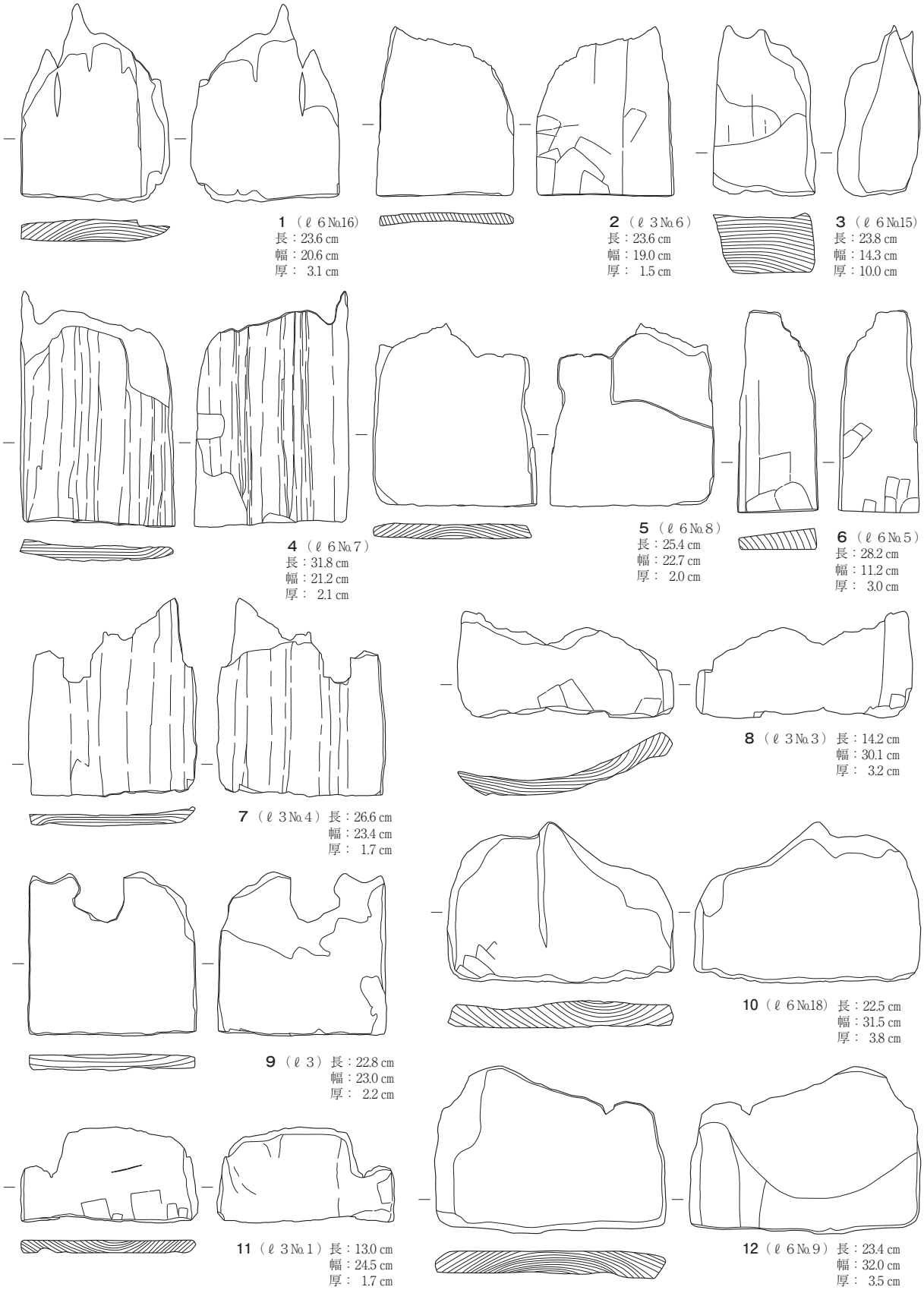


図15　1号井戸跡出土遺物（1）

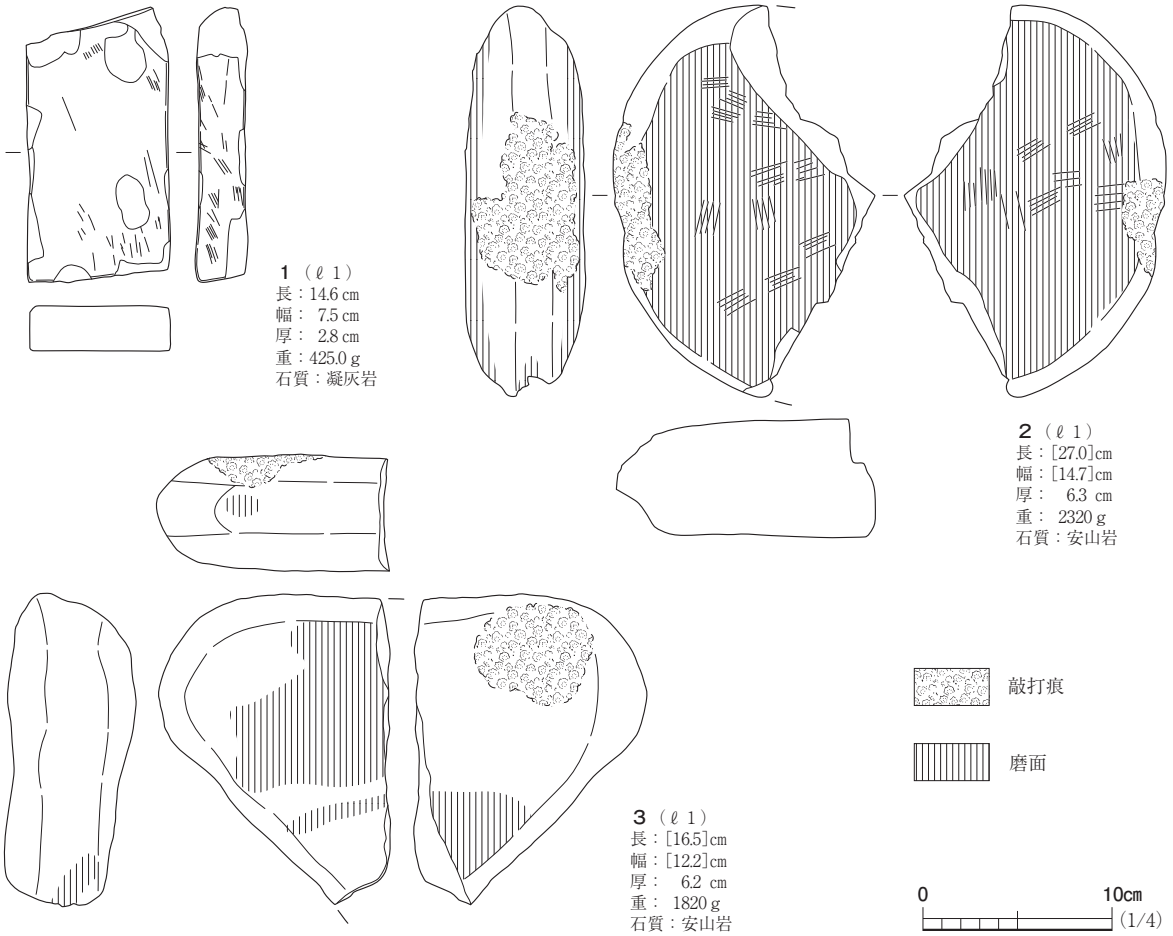


図16　１号井戸跡出土遺物（２）

遺　　物（図15・16、写真21・22）

遺物は、木製品、石器･石製品が出土した。木製品については、遺存状態の良いものを掲載した。

井戸枠材は図15－２・７・８・11で、原位置を保っていたものである。９はℓ３から出土したもので、井戸枠材の可能性が高い。それ以外は掘形内から出土したものである。

同図３は角材で、腐食が進行しているため、明瞭な加工痕は確認できない。出土状況からは井戸の隅柱とは考えられない。１・２・４～12はいずれも板材である。腐食が進んでいるものが多く、上部は欠損している。２の片面には、手斧痕と見られる加工痕が確認できる。６は下端部を中心に加工痕が残る。検出した木材の中では比較的遺存状態が良い。８は土圧によって大きく木材が歪んでいる。10は厚さと幅が最も大きい板材で、下端部にわずかに加工痕が見られる。

図16－２・３は石皿である。２は半分以上が欠損している。両面ともに使用痕が確認できる。表面が研磨されて滑らかで、凹凸も少ない。側面には敲打痕も確認できる。繰り返し使用されたものと考えられる。３も半分以上が欠損している。２に比べると使用された痕跡は少ないが、両面に使用痕が見られるほか、側面も一部摩耗している。２・３ともに縄文時代のものと考えられ、井戸の構築の際に、裏込めの石として集められ、混入した遺物と判断した。１は砥石で､比較的大型の製品である。井戸の検出面付近から出土しており、井戸が機能していた時期に使用されたものの可

能性があり、古代から中世のものと考えられる。

ま と め

本遺構からは年代の手掛かりになる遺物が出土しておらず、調査時にも詳細な年代を示す所見は得られなかった。検出した井戸枠材の放射性炭素年代測定を実施したところ、暦年較正年代で1156calAD－1250calAD(95.4%)という年代が得られた(付章第３節参照)。このことから、12世紀後半から13世紀後半にかけての、平安時代末から鎌倉時代頃に機能していた井戸跡と考えられる。

福島県内では、縦板を用いた中世の井戸跡の事例がいくつか確認されている。そのため、年代測定結果の幅の中では、中世に近い時期に属する可能性がある。また、後述する小穴は、年代測定によって井戸跡と近接する測定結果が出ている。そのため、その時期に存在した建物に伴う井戸であったと推定される。　（鶴　見）

第６節　集 石 遺 構

１号集石遺構　ＳＳ01（図17、写真14・15）

本遺構は調査区北側のＥ２グリッドに位置し、ＬⅡ上面で検出した。重複関係にある遺構はないが、１ｍ程北側に２号集石遺構を確認している。

南北94cm、東西92cm、検出面からの深さ20cmの円形土坑の中に、石材が集められていた。集石の上部は10cm前後の礫が多いのに対し、下部は15～20cm前後の石が多く入っていた。加工痕がある石はなく、熱を受けた痕跡や、炭化物などの付着も見られなかった。遺跡周辺に多く見られる角

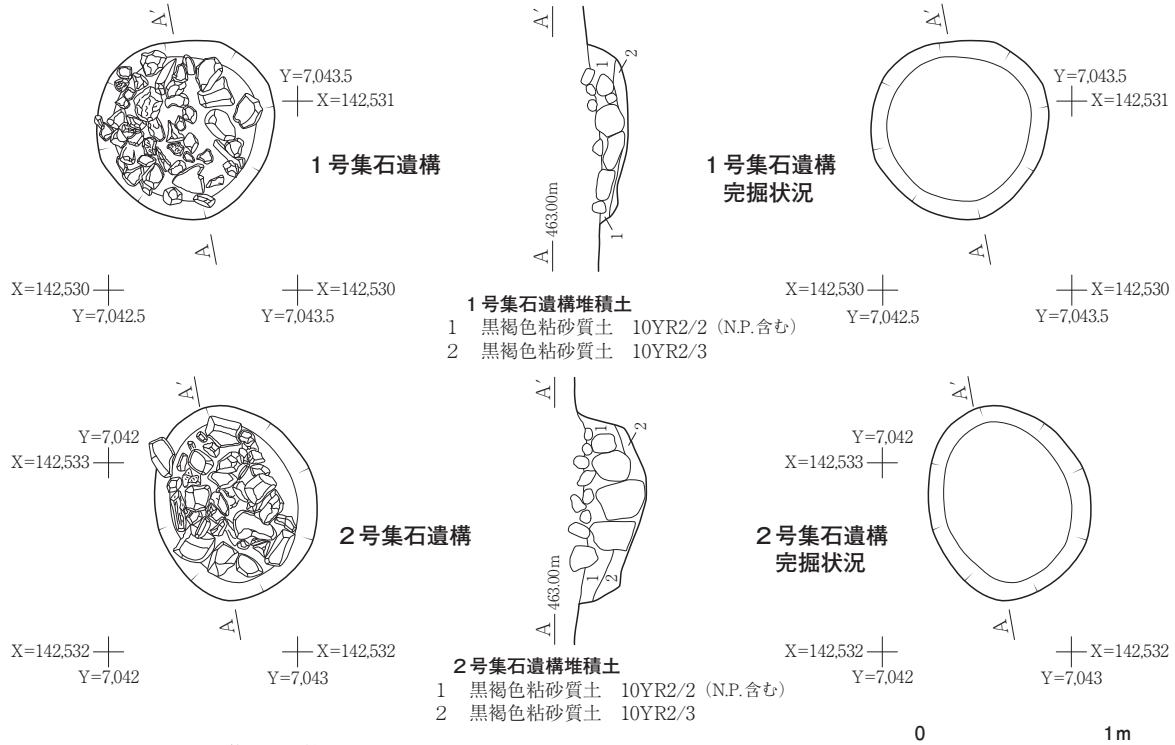


図17　１・２号集石遺構

礫を集めたものと考えられる。集石の直下は土坑の底面となっていて、土器等を埋設したような状況は確認されなかった。堆積土は２層に分層できた。石の堆積状況から、人為的に埋め戻したものと判断した。堆積土中に炭化物・焼土は見られず、土器は出土していない。本遺構の時期・性格は不明である。

２号集石遺構　ＳＳ02（図17、写真14・15）

本遺構は、調査区北側のＥ２グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。本遺構の南側１ｍに１号集石遺構を確認している。石は南北102cm、東西84cm、検出面からの深さ34cmの楕円形の土坑の中に集められていた。１号集石遺構同様に、上部は10cm前後の石、下部に20～30cmの石が多い。石材の表面に加工痕、熱変化、炭化物などの付着は確認できなかった。堆積土は２層で、人為堆積と判断した。堆積土中から弥生土器が出土したが、細片のため図示しなかった。本遺構は弥生時代以降のものだが、詳細な時期・性格は不明である。（鶴　見）

第７節　焼 土 遺 構

１号焼土遺構　ＳＧ01（図18）

本遺構は、調査区北側のＥ３グリッドに位置する。検出面は１号住居跡の遺構内堆積土上面である。小穴の検出時に東西48cm、南北30cmの範囲で確認した。出土遺物はなく時期の特定は難しいが、小穴群に伴う可能性があり、古代から中世の可能性がある。炭化物の放射性炭素年代測定の結果、暦年較正年代で1076calAD－1154calAD(61.1%)の年代が出ている(付章第３節参照)。

２号焼土遺構　ＳＧ02（図18）

本遺構はＥ３グリッドに位置し、検出面は１号住居跡の遺構内堆積土上面である。東西32cm、南北41cmの不整形の範囲で確認した。１号焼土遺構同様、出土遺物はないが、炭化物の放射性炭素年代測定の結果、暦年較正年代で1303calAD－1367calAD(73.3%)の年代が出ている(付章第３節参照)。（鶴　見）

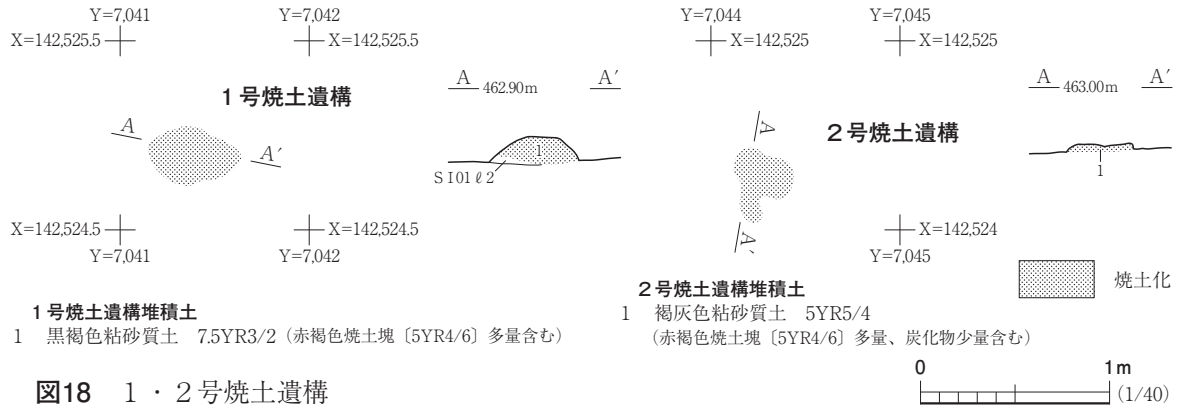


図18　１・２号焼土遺構

第8節　小　穴　群

遺　　構（図19～23、表３－１・２、写真16～19）

調査区北側において、柱穴と推定される小穴（ピット）を370基、調査区南側では１基、合計371基の小穴を検出した。調査区北側では、小穴の堆積土とＬⅡとの区別が難しく、ＬⅢａまたはＬＶｂまで掘削して遺構の輪郭が明瞭になったものが多い。北側の小穴の大半はＬＶｂまで掘削した段階で調査を行ったが、本来はＬⅡから掘り込まれていたと考えられる。調査区北側の小穴はＤ３・Ｅ３グリッドに集中していて、多数の小穴が重複している。Ｅ３グリッドでは１号住居跡の堆積土を掘り込む形で多数の小穴を確認しているため、それらの小穴は１号住居跡よりも新しい。

各小穴の形状および計測値などについては表３にまとめて記した。表中に番号のない小穴については、調査後に撹乱と判断した等の理由で欠番としている。各小穴の堆積土の状況は、それぞれ代表するものを例として図23に示した。同図中の小穴土層注記に（○もしくは○－○）として表記した記号は、表３に示した堆積土の記号に対応していている。

小穴の堆積土は、堆積状況から４つに大別した。ａは単層のもので、自然流入土である。ｂは堆積土が上下２層に分層できるものである。堆積土は自然流入土であり、上層部分が削平された場合、ａになる。ｃは４つに細別した。ｃ－１は最も遺存状態が良いと判断した。柱痕の堆積土の両脇に、掘形堆積土があり、さらにそれらの上部に堆積土が確認できる。下部の土はいずれも人為堆積土、上部の土は自然流入土である。ｃ－２はｃ－１の上部が削平されたものである。ｃ－３は、柱痕両脇の掘形堆積土のどちらかが確認できないものか、土層断面を確認した箇所でたまたま柱痕が確認できなかったものである。ｃ－４は、上部が削平されたもので、柱痕が底面まで届いていないものである。ｄは堆積土が垂直方向に３層に分層できるものである。最下層の堆積土は人為堆積の可能性があるが、それより上部は自然流入土と考えられる。堆積土は、半数以上が自然堆積土であるａまたはｂであった。柱痕を残すｃに分類されるものも多く、柱材が残った状態のままで廃絶したものと考えられる。

小穴の平面形は、円形または楕円形のものが多数を占める。直径10㎝前後のものもあるが、長軸で50㎝を越えるものも多数あり、柱痕だけで30㎝の太さがあるものも検出した。検出面からの深さはばらつきがあるが、20～30㎝前後のものが多い。

これらの小穴は掘立柱建物跡の柱穴と考えられるが、重複が激しく、小穴の組み合わせを断定することは困難であった。ただ、Ｅ３グリッドの竪穴住居跡に重複している付近では、ある程度東西に軸線を揃え、小穴が２列に並んでいる。そこから４ｍ程南でも、東西方向に軸線を揃えて小穴が並んでいる。これらの小穴の組み合わせで掘立柱建物跡が１棟存在している可能性は高い。また、北側でも小穴が２列に並ぶ状況からは、少なくとも北側には廂がついていたと推定される。しかし、南側については北側と対称の位置に対応する小穴が無い箇所もあるため判断が難しい。Ｄ３グリッ

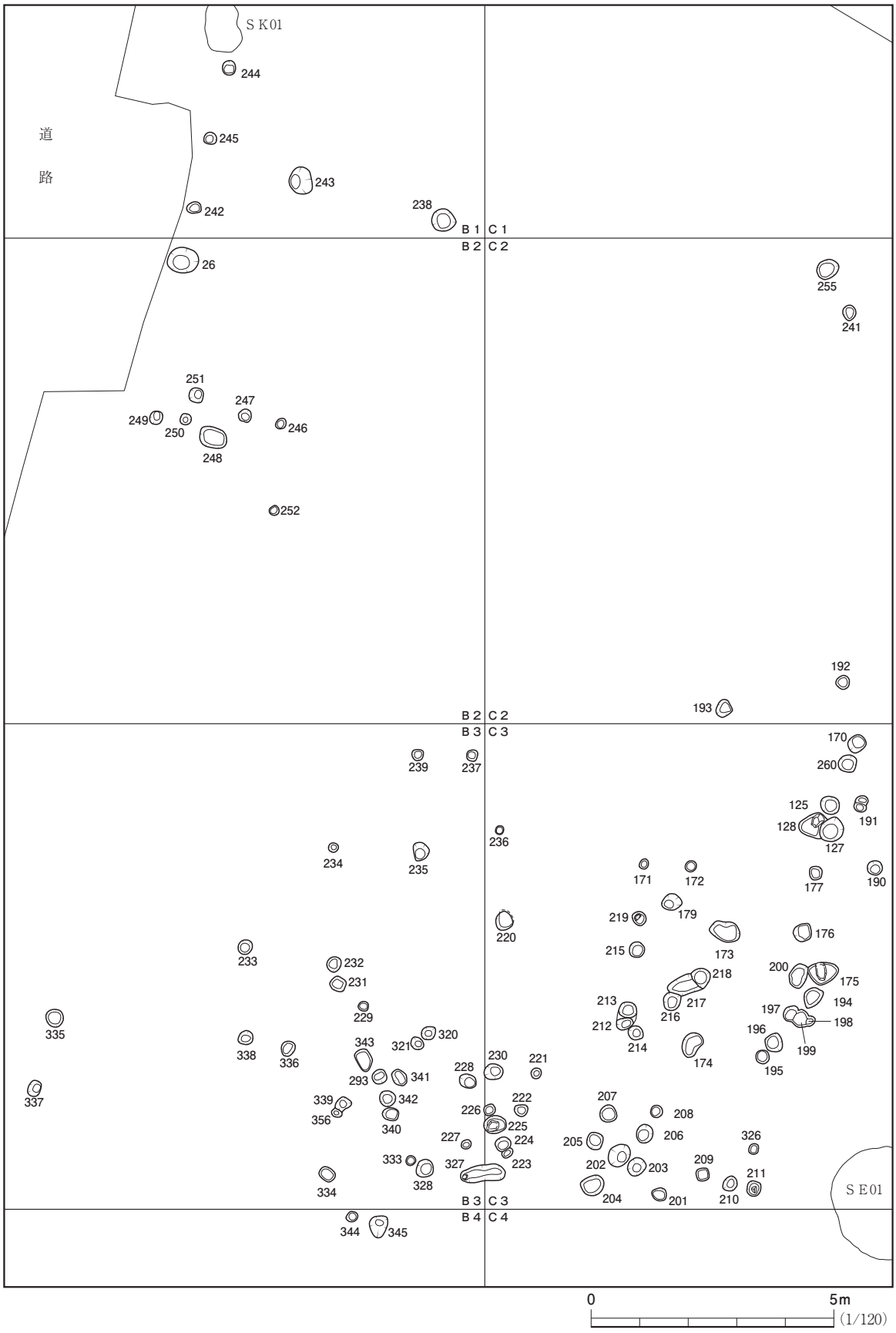

S K01
244
道
路
245
243
242
238
B 1 C 1
B 2 C 2
26
255
241
251
247
249
250
246
248
252
192
193
B 2 C 2
B 3 C 3
170
260
239
237
125
191
128
127
236
234
235
171
172
177
190
219
179
220
176
233
215
173
232
218
200
175
231
213
217
194
229
216
197
198
335
212
196
320
321
343
214
199
338
336
174
230
221
228
195
293
341
337
339
342
222
207
226
208
356
340
225
206
326
227
224
205
333
327
223
202
203
209
211
328
334
204
201
210
S E01
B 3 C 3
B 4 C 4
344
345
0
5m
(1/120)

図19　小穴群（1）

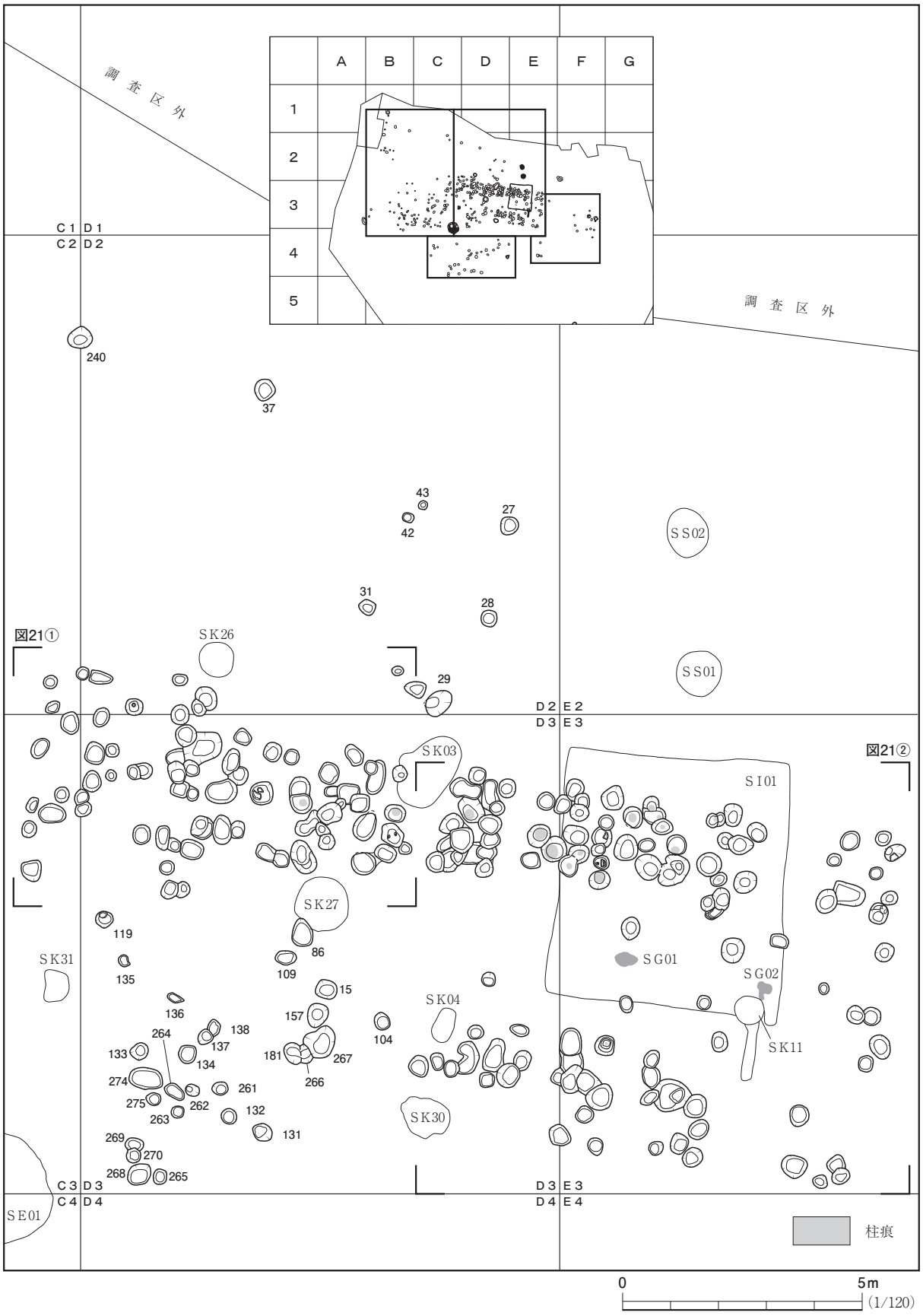

A
B
C
D
E
F
G
1
2
3
4
5
調査区外
調査区外
C1 D1
C2 D2
240
37
43
42
27
SS02
31
28
図21①
SK26
29
SS01
D2 E2
D3 E3
SK03
図21②
SI01
SK27
119
86
109
SG01
SG02
SK31
135
15
SK04
136
157
104
138
264
137
133
181
267
134
274
266
261
275
262
132
263
SK11
SK30
269
131
270
268
265
C3 D3
C4 D4
D3 E3
D4 E4
SE01
柱痕
0
5m
(1/120)

図20　小穴群（2）

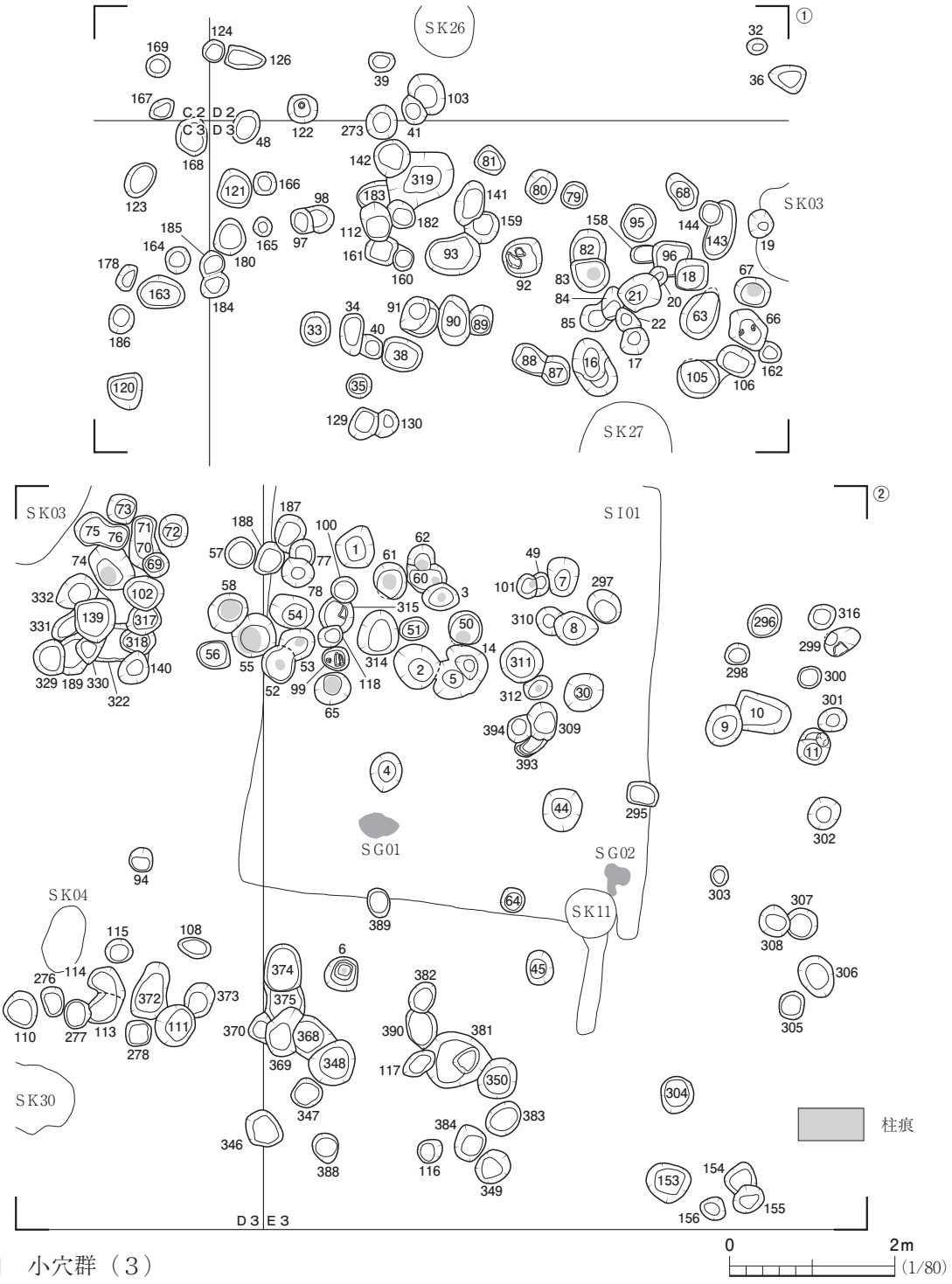


図21　小穴群（３）

ド周辺では、Ｅ３グリッドに比べ規則性のある配置を見いだせなかった。

遺　　物（図24、写真23）

遺物は、縄文土器・土師器・筒形土器・鉄製品・古銭が出土した。図24－１は縄文時代後期中葉の加曾利Ｂ式期に比定できる深鉢の資料である。三条の連弧文状の沈線の下に二条の横線が見られる。図24－２はロクロ成形された土師器の蓋である。外面には口縁部付近から体部にかけて墨痕と考えられる痕跡がある。３は土師器杯の底部である。ロクロ成形されたもので、内面にはミガ

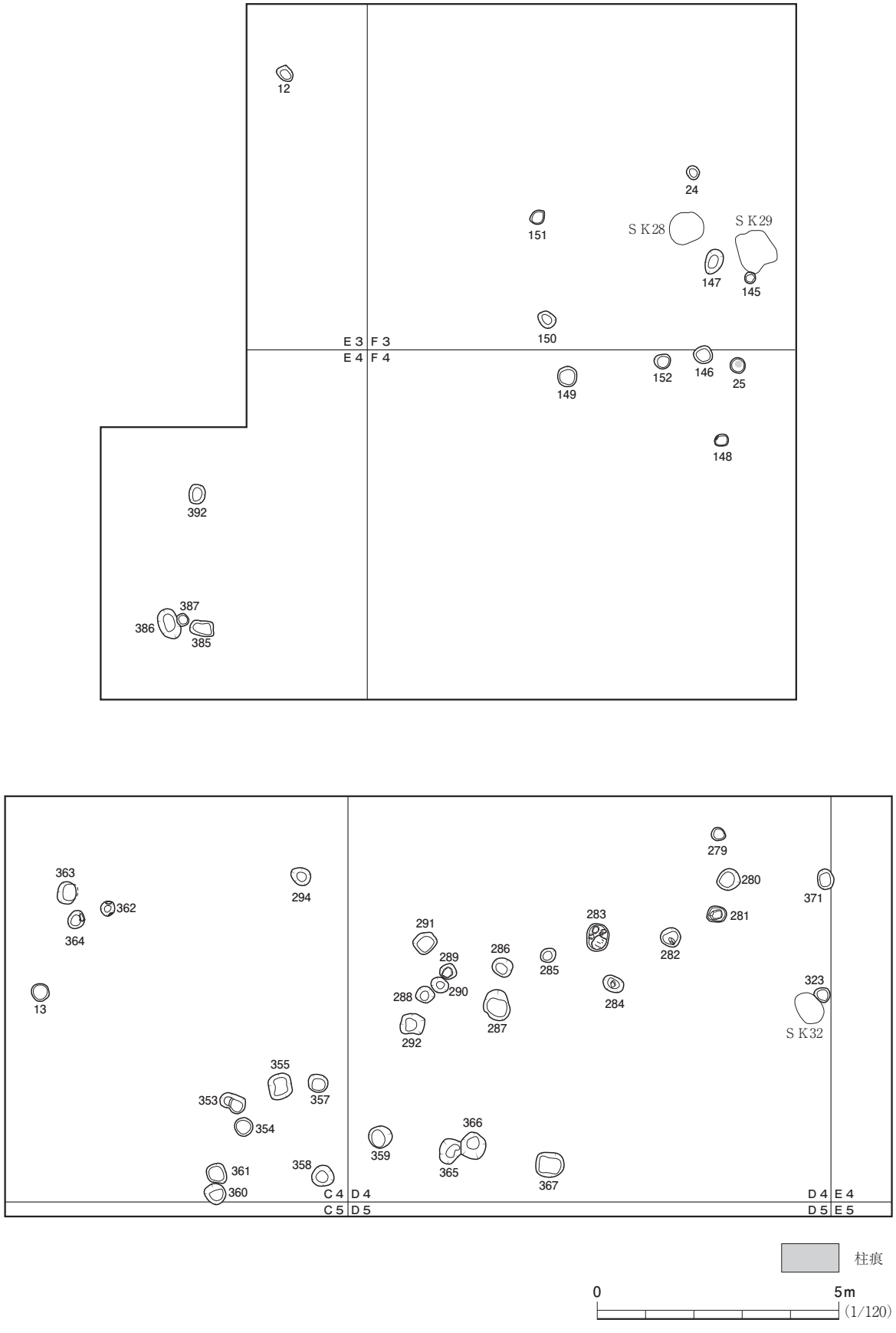

12
24
151
S K28
S K29
147
145
150
E 3 F 3
E 4 F 4
152
146
25
149
148
392
387
386
385
363
362
364
294
13
279
280
371
281
291
283
289
286
285
282
288
290
284
323
287
S K32
292
355
357
353
354
366
359
365
361
358
360
367
C 4 D 4
C 5 D 5
D 4 E 4
D 5 E 5
柱痕
0
5m
(1/120)

図22　小穴群（4）

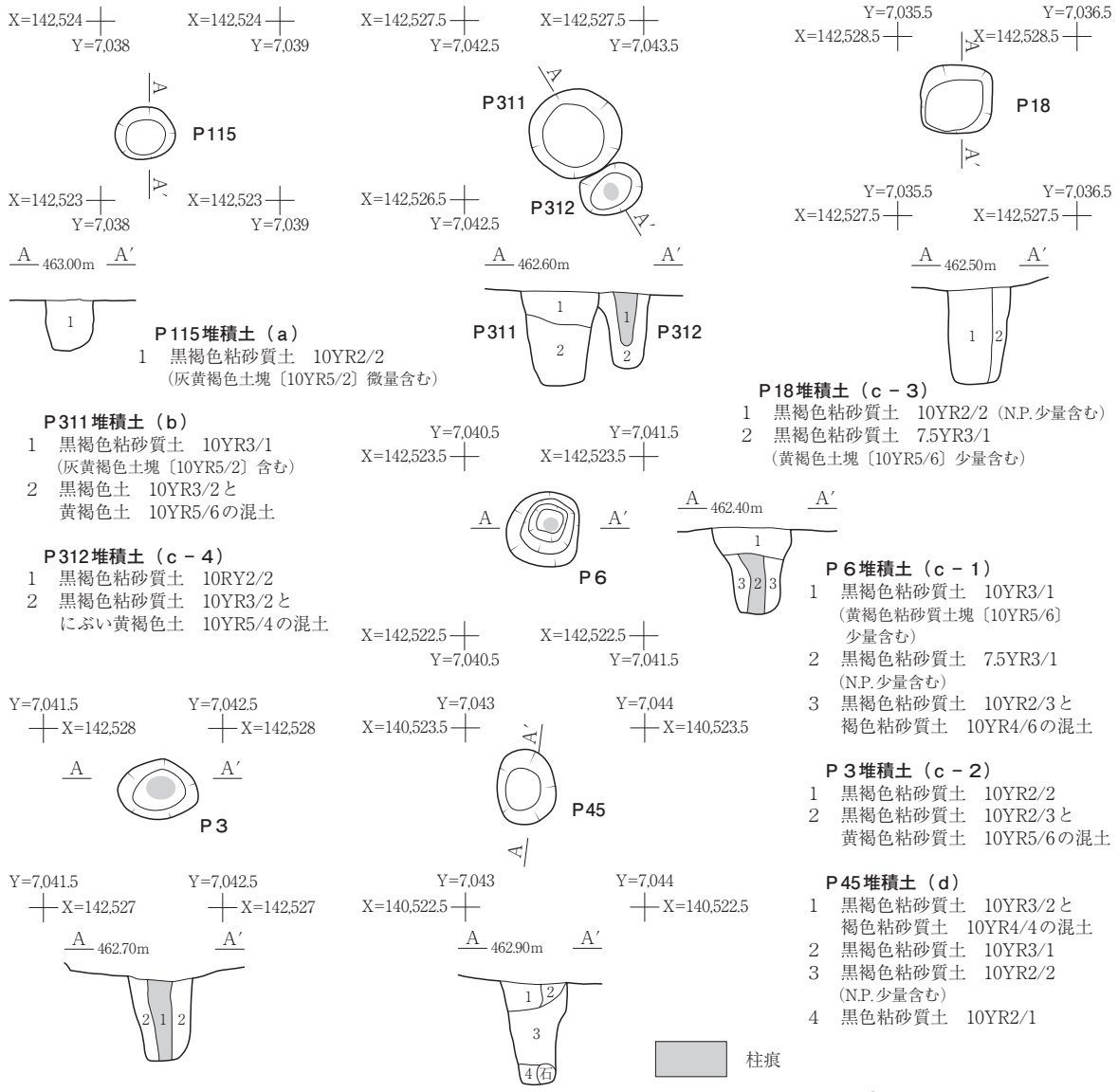


図23　小穴群（５）

キが認められるが、表面の摩耗のため黒色処理の有無は確認できなかった。底部の切り離しは不明である。４は筒形土器である。口縁部付近から体部にかけて残存していたものを図上復元した。内面はナデ調整で器面を平滑に成形しているが、外面は凹凸があり、体部上半に粘土の積み上げ痕が残る。５は火打金である。透かし入りのもので、上部が欠損している。基部の両端は内湾して立ち上がり、突起状に張り出している。透かしは、５つ残存している。類例から判断すると、上部にさらに透かしがあったと考えられる。12世紀後半から14世紀頃に類例があり、平安時代末から鎌倉時代頃の製品と判断した。６は曲刃の鉄鎌である。基部には装着された柄の木質が残っている。７は雁股の鉄鏃である。鏃身部の先端が片方欠けている。木質の付着は見られなかった。８・12は鉄釘である。９は刀子で、刃部のみが残存している。10は責金具である。幅が狭いことから、刀ではなく刀子などに伴うものと推定している。11は用途不明の鉄製品である。13は皇宋通宝で、表面の文字は比較的明瞭に読み取ることができる。

表3－1　小穴一覧

Pit番号	グリッド	規模(cm) 長軸×短軸	深さ	平面形	堆積土	備考
1	E3	56×42	28	隅丸長方形	d	
2	E3	54×50	53	円形	b	責金具
3	E3	45×34	14	楕円形	c－3	
4	E3	47×39	49	楕円形	c－2	
5	E3	47×40	54	楕円形	c－3	
6	E3	49×40	43	楕円形	c－1	
7	E3	46×38	49	楕円形	c－2	
8	E3	54×41	46	楕円形	b	
9	E3	49×44	22	円形	b	
10	E3	67×46	22	隅丸長方形		
11	E3	42×38	46	隅丸方形	a	
12	E3	35×25	20	隅丸長方形	b	
13	C4	36×36	28	円形		
14	E3	55×37	57	楕円形	a	
15	D3	55×53	26	円形	b	
16	D3	72×45	31	楕円形	c－3	
17	D3	42×34	26	円形	a	
18	D3	42×42	44	円形	c－3	
19	D3	36×30	25	楕円形	c－4	
20	D3	24×21	49	円形	b	
21	D3	53×42	25	不整円形	b	
22	D3	29×28	19	楕円形	b	
23	E8	53×41	14	楕円形	a	
24	F3	29×28	12	円形	b	
25	F4	32×30	13	円形	a	
26	B2	64×53	20	楕円形		
27	D2	37×37	20	円形		
28	D2	34×33	14	円形	b	
29	D2	62×44	70	楕円形	c－2	
30	E3	46×45	61	円形	c－2	
31	D2	27×22	15	隅丸長方形	c－4	筒形土器
32	D2	24×18	14	楕円形		
33	D3	40×36	20	円形	a	
34	D3	51×29	23	楕円形	b	
35	D3	30×28	19	円形	b	
36	D2	43×33	8	楕円形	b	
37	D2	45×43	11	円形	c－3	
38	D3	48×40	33	楕円形	b	
39	D2	32×24	8	楕円形		
40	D3	29×25	14	楕円形		
41	D3	37×25	18	楕円形	a	
42	D2	24×23	11	隅丸方形		
43	D2	24×23	11	円形		
44	E3	51×45	49	楕円形	c－2	古銭
45	E3	42×32	57	楕円形	d	
48	D3	42×32	21	楕円形	b	
49	E3	30×24	23	楕円形	c－3	
50	E3	39×25	30	楕円形	c－2	
51	E3	35×28	31	楕円形		
52	E3	45×40	28	楕円形	b	
53	E3	30×24	23	楕円形	b	
54	E3	39×25	30	楕円形	d	
55	D3	53×52	53	円形	c－2	
56	D3	43×37	21	楕円形		
57	D3	47×47	24	円形	b	
58	D3	48×48	43	円形	c－2	
60	E3	54×50	33	楕円形	c－3	
61	E3	45×40	30	楕円形	c－3	
62	E3	32×25	34	楕円形	c－3	
63	D3	60×34	45	楕円形		
64	E3	30×29	45	円形	b	
65	E3	44×38	54	円形	c－2	
66	D3	50×41	36	不整円形	b	
67	D3	43×35	30	楕円形	b	
68	D3	47×32	19	楕円形	c－2	
69	D3	31×30	31	円形	a	
70	D3	40×38	18	楕円形	a	
71	D3	29×25	15	隅丸方形	a	
72	D3	39×35	37	円形	c－2	
73	D3	35×35	27	円形	c－1	
74	D3	48×43	24	隅丸方形	b	
75	D3	42×37	28	隅丸方形	c－4	
76	D3	31×29	22	隅丸方形	a	
77	E3	32×23	22	円形	b	
78	E3	39×35	28	円形	b	
79	D3	32×30	26	円形	b	土師器
80	D3	39×37	27	円形	b	
81	D3	35×30	16	隅丸長方形	b	
82	D3	43×35	15	楕円形	a	
83	D3	48×42	24	円形	c－2	
84	D3	34×30	33		a	
85	D3	35×32	34	円形	c－4	
86	D3	58×44	16	楕円形	b	
87	D3	35×33	16	円形	c－2	
88	D3	40×32	22	隅丸長方形	a	
89	D3	35×24	27	楕円形	b	
90	D3	60×39	26	楕円形	b	
91	D3	48×45	20	円形	b	
92	D3	47×46	39	円形	c－3	
93	D3	66×47	22	楕円形	c－2	
94	D3	29×28	30	円形	a	
95	D3	46×43	28	楕円形	c－2	
96	D3	47×43	28	隅丸方形	c－3	
97	D3	35×26	20	円形	c－2	
98	D3	33×29	30	円形	a	
99	E3	33×29	30	楕円形	c－3	
100	E3	32×32	29	円形	b	
101	E3	29×23	26	楕円形	c－3	
102	D3	49×41	30	楕円形	d	
103	D2	51×34	14	楕円形	c－3	
104	D3	36×31	20	楕円形	c－2	
105	D3	51×45	28	円形	a	
106	D3	45×34	19	隅丸長方形	c－4	
108	D3	40×24	18	楕円形		
109	D3	45×28	22	楕円形	a	
110	D3	45×41	23	楕円形	a	
111	D3	51×46	40	円形	d	
112	D3	49×35	43	楕円形	c－2	縄文土器
113	D3	54×34	15	楕円形	a	
114	D3	48×33	21	楕円形	c－3	
115	D3	33×28	31	円形	a	
116	E3	30×30	27	円形	b	
117	E3	44×26	18	楕円形	a	
118	E3	30×25	38	隅丸長方形	b	土師器
119	D3	36×34	15	円形	c－3	
120	C3	43×42	21	不整円形	b	
121	C3	45×41	31	円形	c－4	
122	D3	35×33	26	円形	a	
123	C3	45×32	20	楕円形	b	
124	C2	27×26	12	円形	a	
125	C3	41×36	32	円形	d	
126	D2	47×27	16	隅丸長方形	a	
127	C3	51×48	32	円形	c－4	
128	C3	55×52	20	不整円形	b	
129	D3	39×33	25	隅丸長方形	a	
130	D3	33×24	22	楕円形	a	
131	D3	40×32	34	楕円形	c－2	
132	D3	32×32	24	円形	a	
133	D3	37×34	17	円形	c－4	
134	D3	38×37	9	円形	b	
135	D3	25×21	7	不整円形	a	
136	D3	28×17	8	不整円形		
137	D3	31×30	15	円形	a	
138	D3	35×25	10	楕円形	a	
139	D3	54×35	31	楕円形	b	鉄鏃
140	D3	40×37	63	楕円形	c－2	
141	D3	56×35	31	楕円形	c－2	
142	D3	46×45	30	円形	c－3	
143	D3	73×45	30	楕円形	a	
144	D3				c－3	鉄釘
145	F3	23×22	6	円形	a	
146	F4	39×35	15	円形		
147	F3	45×35	10	隅丸長方形	a	
148	F4	30×25	22	隅丸方形	a	
149	F4	41×39	20	円形	a	
150	F3	38×31	20	隅丸方形		
151	F3	30×29	7	隅丸方形		
152	F4	34×30	18	円形	a	鉄鎌
153	E3	52×45	23	楕円形	b	
154	E3	38×31	20	隅丸長方形	a	
155	E3	38×33	34	楕円形	b	
156	E3	31×30	13	円形		
157	D3	54×48	18	楕円形		
158	D3	26×22	15	隅丸長方形	a	
159	D3	42×37	25	円形	c－3	
160	D3	29×25	17	円形	b	
161	D3	35×34	17	隅丸方形	a	
162	D3	25×25	18	円形		
163	C3	58×40	20	楕円形	c－3	
164	C3	31×30	24	円形	c－3	
165	D3	23×23	11	円形	a	
166	D3	28×27	29	円形	d	
167	C2	34×24	10	楕円形	a	
168	C3	47×37	15	楕円形	a	
169	C2	29×28	7	円形	a	
170	C3	42×34	27	楕円形	c－4	
171	C3	20×19	13	円形	a	
172	C3	23×23	14	円形	a	
173	C3	64×42	22	楕円形	c－2	
174	C3	52×38	18	不整円形	c－3	
175	C3	62×45	12	不整円形	c－3	
176	C3	39×37	22	円形	a	
177	C3	27×25	20	円形	a	
178	C3	32×21	12	隅丸長方形	a	
179	C3	42×34	26	不整円形	a	
180	C3	49×42	40	楕円形	c－4	
181	D3	47×38	12	楕円形	a	
182	D3	36×31	23	楕円形	a	
183	D3				a	
184	C3	36×28	20	楕円形	a	
185	C3	35×29	19	楕円形	a	
186	C3	33×30	22	楕円形	b	
187	E3	43×36		楕円形	c－2	
188	E3	41×33	28	楕円形	a	
189	D3	49×26	29	楕円形	a	
190	C3	31×29	22	円形	a	刀子

表３－２　小穴一覧

Pit番号	グリッド	規模(cm) 長軸×短軸	規模(cm) 深さ	平面形	堆積土	備考
191	C3	34×25	16	楕円形	a	
192	C2	28×28	25	円形	c－4	
193	C2	35×34	22	不整円形	a	
194	C3	45×34	24	楕円形	c－4	
195	C3	28×27	15	円形	a	
196	C3	38×35	30	円形	b	
197	C3	33×23	24	円形	c－1	
198	C3	20×18	13	楕円形	a	
199	C3	37×30	20	円形	b	
200	C3	50×35	25	楕円形	c－4	
201	C3	32×27	19	円形	c－3	
202	C3	49×40	41	楕円形	c－2	
203	C3	39×33	22	円形	a	
204	C3	48×42	18	円形	a	
205	C3	35×34	24	円形	a	
206	C3	37×34	24	円形	b	
207	C3	36×34	20	円形	a	
208	C3	25×25	21	円形	a	
209	C3	26×25	7	隅丸方形	a	
210	C3	31×27	26	楕円形	a	
211	C3	30×28	15	隅丸方形	a	
212	C3	35×24	28	楕円形	b	
213	C3	37×32	30	円形	b	
214	C3	30×28	26	円形	a	
215	C3	32×31	24	円形	a	
216	C3	37×35	20	楕円形	a	
217	C3	52×38	12	楕円形	b	
218	C3	42×38	26	円形	a	
219	C3	30×26	16	円形	a	
220	C3	39×35	32	円形	c－4	
221	C3	22×21	14	円形	a	
222	C3	28×24	13	円形	a	
223	C3	24×15	24	円形	a	
224	C3	32×29	23	円形	c－4	
225	C3	45×36	22	楕円形	c－4	
226	C3	23×21	10	円形	a	
227	B3	20×19	13	円形	a	
228	B3	35×27	19	楕円形	a	
229	B3	21×19	13	円形	a	
230	C3	39×33	34	楕円形	a	
231	B3	34×30	24	隅丸方形	a	
232	B3	30×30	22	円形	c－4	
233	B3	30×29	23	円形	a	
234	B3	21×19	12	円形	a	
235	B3	37×32	33	不整円形	a	
236	C3	17×17	17	円形	a	
237	B3	23×23	16	円形	a	
238	B1	50×45	14	円形	a	
239	B3	24×21	21	円形	a	
240	C2	52×45	18	楕円形	b	
241	C2	29×26	13	楕円形	a	
242	B1	30×24	9	楕円形	a	
243	B1	55×47	48	楕円形	d	
244	B1	30×27	18	円形	a	
245	B1	27×25	13	円形	a	
246	B2	22×21	25	円形	a	
247	B2	27×26	27	円形	a	
248	B2	57×41	10	隅丸長方形	a	
249	B2	27×25	29	円形	a	
250	B2	23×23	26	円形	c－3	
251	B2	30×29	26	円形	a	
252	B2	21×20	12	円形	a	
255	C2	47×38	21	楕円形	b	
260	C3	37×35	26		b	
261	D3	34×27	19	楕円形	a	
262	D3	30×23	16	楕円形	a	
263	D3	26×24	17	円形	a	
264	D3	45×25	11	隅丸長方形	a	
265	D3	32×28	13	楕円形	a	
266	D3	40×27	13	円形	a	
267	D3	64×60	35	楕円形	b	
268	D3	46×43	18	隅丸方形	a	
269	D3	38×23	12	楕円形	a	
270	D3	31×30	19	円形	a	
273	D3	44×38	12	円形	b	
274	D3	71×45	14	楕円形	a	
275	D3	30×26	17	円形	a	
276	D3	36×26	10	楕円形	a	
277	D3	34×28	37	楕円形		
278	D3	31×30	15	隅丸方形	a	
279	D4	30×27	12	円形	a	
280	D4	49×45	14	円形	a	
281	D4	39×32	15	隅丸長方形	a	
282	D4	42×40	12	円形	a	
283	D4	56×45	18	楕円形	a	
284	D4	45×32	15	楕円形	a	
285	D4	33×28	10	円形	a	
286	D4	42×37	15	楕円形	a	
287	D4	66×51	35	楕円形	b	
288	D4	39×34	17	楕円形	a	
289	D4	35×32	5	円形	a	
290	D4	36×30	12	楕円形	a	
291	D4	46×41	14	隅丸長方形	a	
292	D4	50×40	27	隅丸長方形	c－2	
293	B3	30×28	37	円形	c－2	
294	C4	42×36	24	楕円形		
295	E3	38×27	17	隅丸長方形	b	
296	E3	44×38	33	楕円形	c－4	
297	E3	38×35	48	楕円形	a	
298	E3	34×29	14	円形	c－2	
299	E3	45×30	53	楕円形	c－3	
300	E3	31×30	37	円形	c－2	
301	E3	35×28	18	楕円形	b	
302	E3	39×36	45	円形	a	
303	E3	24×21	7	円形	a	
304	E3	45×39	62	楕円形	c－2	
305	E3	34×30	34	隅丸方形	c－3	
306	E3	51×40	25	楕円形	a	
307	E3	37×34	31	円形	c－2	
308	E3	38×38	40	円形	c－3	
309	E3	44×35	47	楕円形	c－2	
310	E3	34×30	33	円形	c－4	
311	E3	51×49	54	円形	b	
312	E3	35×26	44	楕円形	c－4	火打金
314	E3	53×49	40	楕円形	c－2	
315	E3	42×40	30	円形	b	
316	E3	35×29	16	円形		
317	D3	41×31	26	楕円形	c－3	
318	D3	43×27	26	楕円形	c－3	
319	D3	80×65	27	楕円形	c－4	
320	B3	27×27	29	円形	a	
321	B3	30×24	12	楕円形	a	
322	D3					
323	D4	33×30	16	円形		
326	C3	21×20	12	円形	a	
327	C3	86×34	18	隅丸長方形	a	
328	B3	35×35	21	円形	a	
329	D3	43×39	30	円形	b	
330	D3	33×30	30	円形	c－3	
331	D3	40×30	20	不明	a	
332	D3	52×42	44	楕円形	c－4	
333	B3	20×20	23	円形	a	
334	B3	33×26	8	隅丸長方形	a	
335	B3	36×36	21	円形	a	
336	B3	32×26	20	円形	b	
337	B3	43×26	32	楕円形	a	
338	B3	30×29	19	円形	b	
339	B3	28×25	13	不整円形	a	
340	B3	33×27	18	楕円形	a	
341	B3	35×28	12	楕円形	a	
342	B3	32×32	17	円形	a	
343	B3	45×30	19	隅丸長方形	b	
344	B4	25×21	12	円形	a	
345	B4	44×37	43	楕円形	c－4	
346	D3	46×40	15	隅丸長方形	a	
347	E3	35×32	17	隅丸方形	a	
348	E3	57×52	45	楕円形	b	
349	E3	43×36	28	楕円形	c－3	
350	E3	50×45	55	円形	b	鉄釘
353	C4	54×35	22	隅丸長方形	a	
354	C4	38×37	16	円形	a	
355	C4	52×47	25	隅丸長方形	a	
356	B3	22×16	13	楕円形	a	
357	C4	40×36	17	円形	a	
358	C4	45×43	22	円形	a	
359	D4	49×47	30	円形	a	
360	C4	45×43	22	円形	a	
361	C4	39×38	11	隅丸方形	a	
362	C4	31×29	17	円形	a	
363	C4	45×37	25	楕円形	a	
364	C4	37×32	21	楕円形	a	
365	D4	47×45	27	楕円形	a	
366	D4	52×50	24	楕円形	a	
367	D4	58×49	21	隅丸長方形	a	
368	E3	50×45	30	楕円形	c－3	
369	E3	62×44	18	楕円形	b	
370	E3	35×29	18	隅丸方形	a	
371	D4	42×34	12	楕円形	c－4	
372	D3	69×44	33	隅丸長方形	b	
373	D3	42×34	26	楕円形	a	
374	E3	57×45	25	楕円形	a	
375	E3	46×45	22	楕円形	a	
381	E3	75×66	67	楕円形	c－2	
382	E3	38×30	31	楕円形	a	
383	E3	45×36	22	楕円形	a	
384	E3	41×35	25	隅丸長方形	b	
385	E4	50×31	17	隅丸長方形	a	
386	E4	25×24	15	円形	c－4	
387	E4	64×40	33	楕円形	a	
388	E3	38×32	36	楕円形	a	
389	E3	35×28	33	楕円形	a	
390	E3	49×37	28	楕円形	c－2	
392	E4	40×33	15	隅丸長方形	a	
393	E3	27×20	23	隅丸長方形		
394	E3	30×27	40	円形	a	

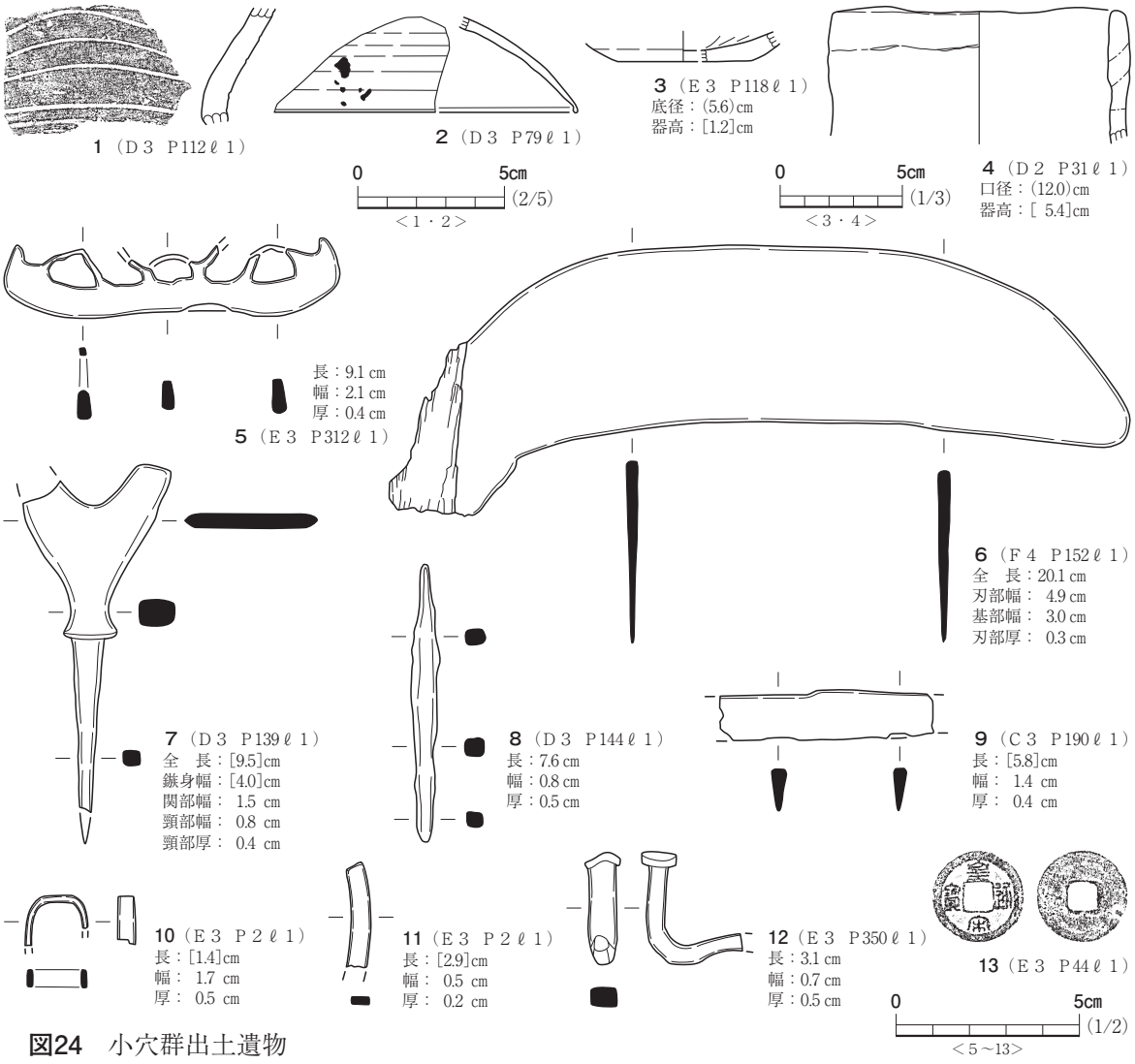


図24　小穴群出土遺物

ま と め

各小穴の詳細な年代は不明だが、P18とP92から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を実施した(付章第３節参照)。その結果、暦年較正年代でP18が1169calAD～1260calAD(95.4%)、P92が665calAD～726calAD(61.6%)という年代が得られた。P92の測定結果は７世紀後半から８世紀前半にあたるが、調査ではその時期の遺物は確認していない。したがって、分析を行った炭化物は伐採された年代を示している可能性がある。小穴から出土した土師器は断片的なものではあるが、ロクロ成形で、９世紀代のものと判断した。以上のことから、少なくとも９世紀以降の小穴が含まれており、その時期にも建物が機能していたと判断した。

P18の年代値は12世紀後半から13世紀後半にあたる。周辺から出土した遺物には、P312出土の火打金があり、12世紀後半から14世紀に類例がある。このほか、井戸跡や焼土遺構の年代測定結果も同じ年代幅の中におさまることから、一部の小穴群については中世に含まれると判断した。

以上のことから、個々の小穴の詳細年代については不明だが、小穴の検出状況からは複数棟の建物があると推測でき、古代から中世にかけてのものと推測している。　（鶴　見）

第９節　遺構外出土遺物

遺構外出土遺物としては、縄文土器125点、石器257点、弥生土器1,534点、須恵器１点、磁器１点、古銭１点等がある。これらは主に、調査区南のＤ６～８、Ｅ６～８、Ｆ６～８グリッドから出土している。主体を占めるのは弥生土器で、中期後半の川原町口式期のものである。器形は壺・甕が多い。また、一部の土器には種子圧痕と思われる痕跡が見られたため、レプリカ法による土器種実圧痕同定分析を実施した(付章第４節参照)。これらの遺物から抽出したものを図25～36に示した。

縄文土器（図25～27、写真24～26）

図25－１・２・４は同一個体で、早期後葉の条痕文系土器である。胎土に繊維痕があり、隆起線と円形竹管刺突が認められる。鵜ヶ島台式期のものと思われる。３は早期後葉の土器で、日向前Ｂ式期のものである。胎土には繊維痕が認められる。縄文を縦走させた上から、二段の沈線を描いている。

図25－５～８は後期前葉の堀ノ内式期の土器である。５は蓋で、６～８は深鉢である。６・８は体部の破片で、太い沈線で区画した間に縄文を充填している。７には集合沈線による渦巻文が描かれている。

図25－９～11・14・17・18・19は、後期中葉の加曾利Ｂ式期の土器と判断した。９・11は横位の沈線で区画された間は無文で、ミガキが施されている。10は羽状縄文を地文としている。14は口縁部に円形の刺突文が施され、口唇内面が肥厚している。口縁部には沈線による縄文帯が確認できる。17は体部下半から底部までが残るものである。二条の横走沈線により施文帯が形成されている。また､底部には布目圧痕が見られる。19は底部が残るものである。文様帯が確認できないが、胎土の状態が17に近いことから後期中葉と判断した。

図25－15・16は後期後葉の瘤付土器と判断した。15は口縁部の資料で、口縁端部に瘤が貼り付けられている。口唇部付近は器壁が厚く、貼瘤を結節点として横位に沈線が引かれている。沈線の上下の部分が隆起した形態になっており、その部分には横位の櫛歯状条線文が確認できる。16は胴部上方に接して展開する弧線文が見られ、その下方には横走沈線が見られる。

図25－12・13と図26－１・２は晩期の資料である。12の頸部には、二溝間の裁痕が見える。12・13の体部には沈線で雲形文が描かれている。１は頸部が屈曲する鉢である。口唇部に刺突を施し、口縁部は無文で、体部上半には玉抱き三叉文が描かれている。地文は複節の斜縄文である。２は深鉢で、口縁部に刺突を施し、頸部には羊歯状文が見られる。胴部は斜縄文が施され、胴部下部の一条の横走沈線で文様体を区画している。１は大洞式またはBC式、12・13は大洞Ｃ２式期と思われる。

図26－３～13、図27には後・晩期の粗製土器を示した。器形はいずれも深鉢である。図26－

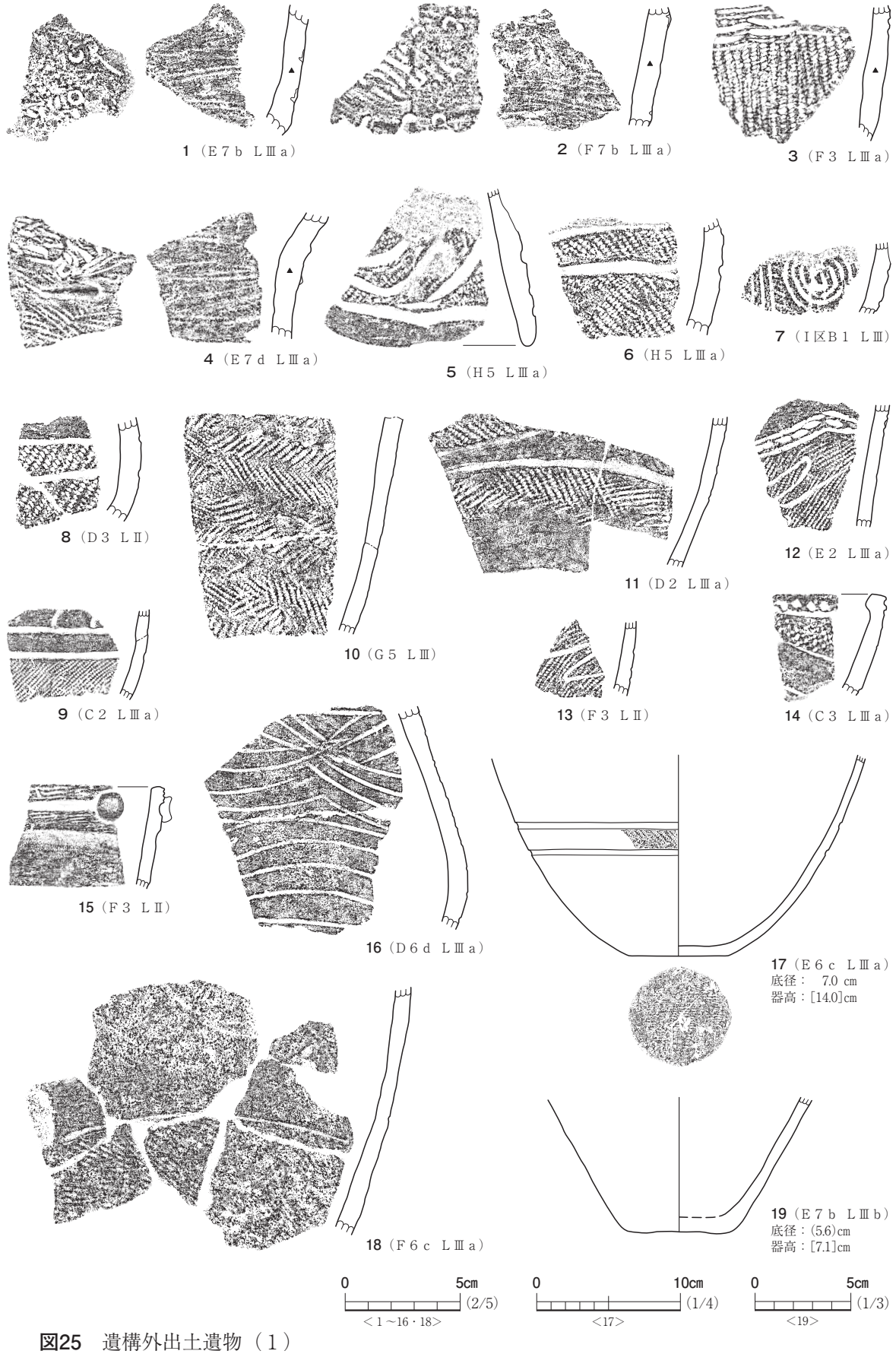
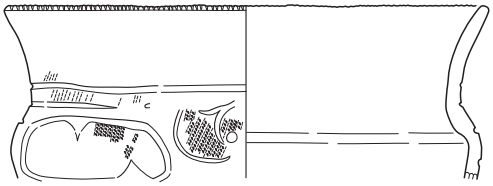
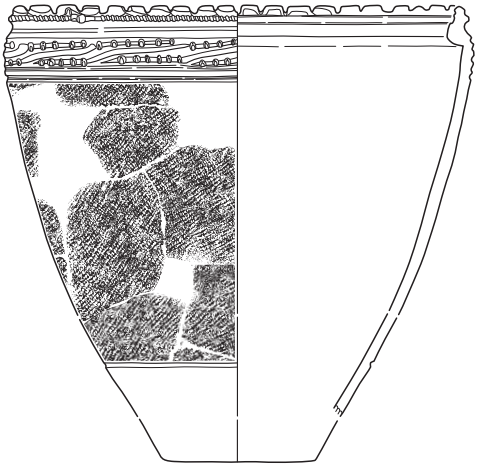


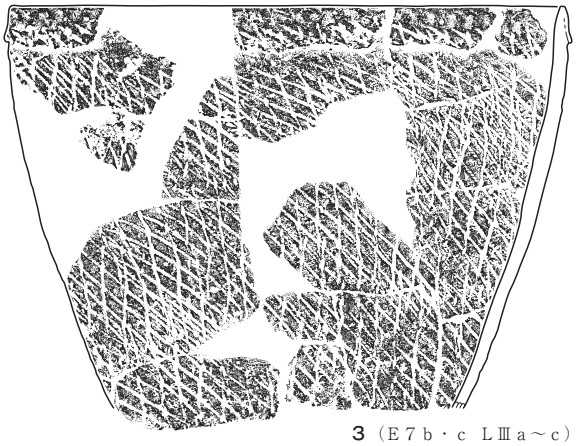
図25　遺構外出土遺物（1）



1（Ｆ７ｄ・Ｆ８ｂ ＬⅢａ）
口径：(19.2)cm
器高：[6.9]cm



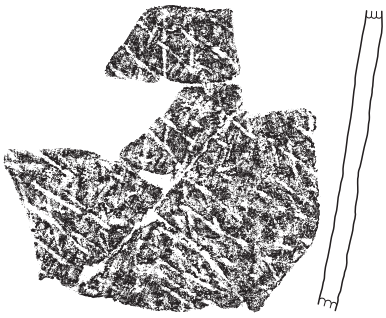
2（Ｅ７ ＬⅡ、Ｅ７ｂ～ｄ ＬⅢａ・ｂ）
口径：(23.2)cm
器高：(24.0)cm



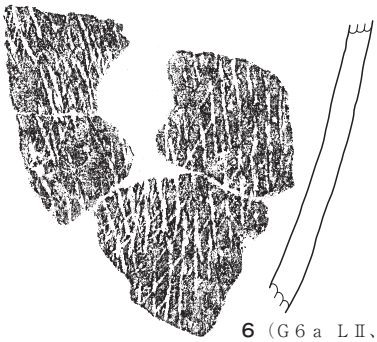
3（Ｅ７ｂ・ｃ ＬⅢａ～ｃ）
口径：(29.4)cm
器高：[22.0]cm

0　10cm　(1/4)
＜1～3＞

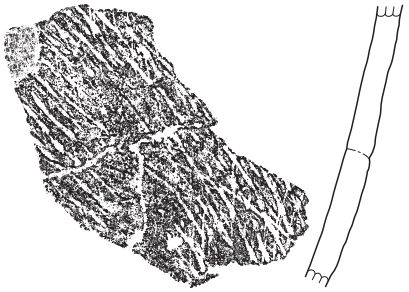
4（Ｇ５ ＬⅡ・Ⅲａ）



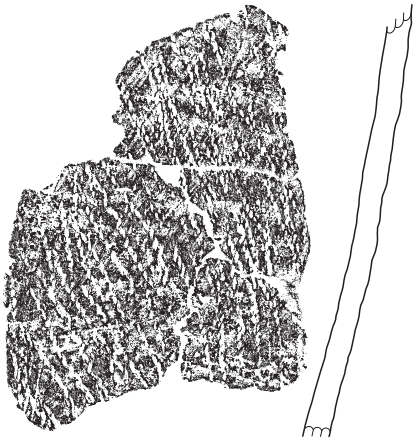
5（Ｇ５ ＬⅡ・Ⅲａ、Ｈ５ ＬⅢａ）



6（Ｇ６ａ ＬⅡ、Ｇ６ｃ ＬⅢａ）

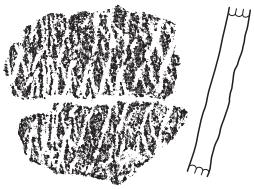


7（Ｇ６ｃ ＬⅢａ）



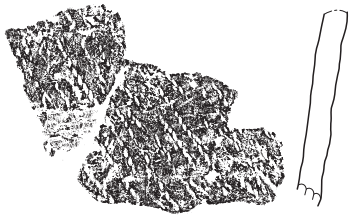
8（Ｆ８ｂ ＬⅢａ）

9（Ｅ２ ＬⅢａ）

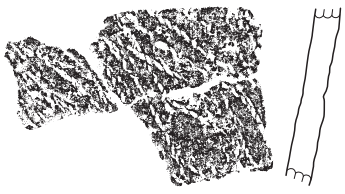


10（Ｂ１ ＬⅢ）

11（Ｆ８ｂ ＬⅢａ）



12（Ｆ８ｂ ＬⅢａ）



13（Ｆ８ｂ ＬⅢａ）

0　5cm　(2/5)
＜4～13＞

図26　遺構外出土遺物（２）

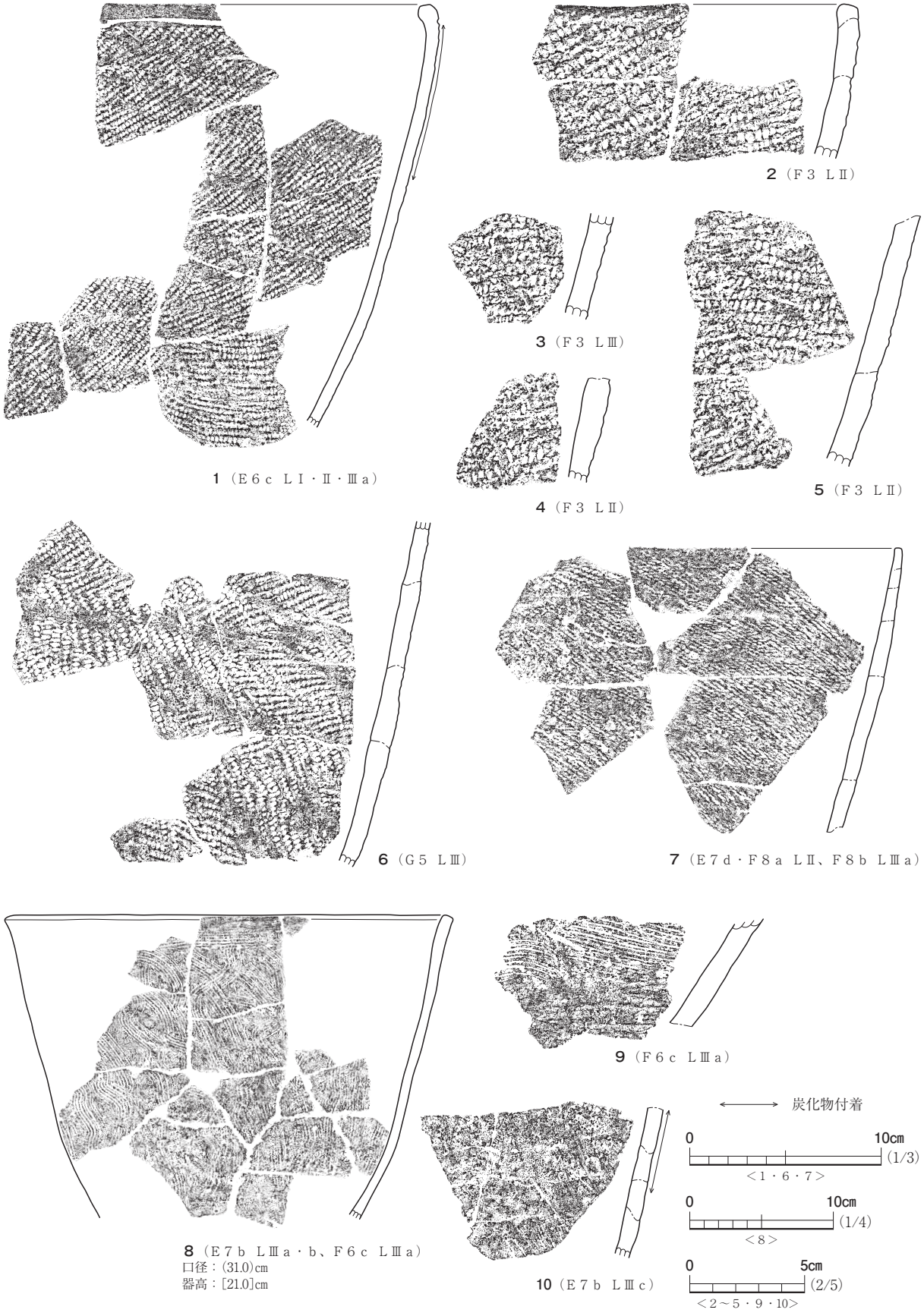


図27　遺構外出土遺物（3）

３～６・９・10は網目状撚糸文、同図７・８・11～13は施文間隔の粗い撚糸文が施されている。図26－３・４は口縁部が残る資料である。３は折り返し口縁の深鉢で、平縁の４には地文に擦痕が加えられている。８・11・12は同一個体である。

図27－１～５は斜縄文の地文が観察できる資料で、１の口縁部下には一条の横走沈線が施されている。６は撚りの異なる原体で羽状縄文が施されている。７は口縁部の資料で、施文間隔の細かい撚糸文が施されている。８～10は引掻文が施された資料で、８の波状文は、後期に比定される資料に近い。

弥生土器（図28～33、写真27～30）

図28～図33－11には弥生土器をまとめた。図28－１～３は長頸壺である。１は口縁部と底部を欠くが、本遺跡出土の壺の中では最も遺存状態がいい。頸部はくの字に屈曲し、胴部は丸く張る。胴部には煤と思われる炭化物が複数箇所に確認できる。また、胴部下半を中心に二次的な被熱によって器面が赤色化している。頸部から胴部上半にかけては、一本引きの横走沈線を施し、胴部には一本引きの渦巻文が描かれ、その上方にはＣ字文、下方には三角文が充填される。渦巻文の中央には縦長の貼瘤が確認できる。地文は直前段多条の原体による斜縄文と思われる。

２は口縁部から頸部にかけて残存していた。口縁部は受口状で一本引きによる連弧文を四条施し、その接点には貼瘤が貼付されている。頸部は上部が枠状文、下部がＣ字文を施している。いずれも非常に細い一本引きの沈線による。わずかに見られる胴部には、おそらく渦巻文と、その間を充填する弧線文が見られる。本資料は内面に炭化物の付着があり、その痕跡は、くの字に屈曲した頸部上方と、細長い頸部上位と上胴部との境付近に認められる。

３は口縁部の上半が欠けているが、口縁部下端が屈曲し、細長い頸部と、球状に広がる上胴部が確認できる。口縁部には上向きの連弧文が施され、頸部には上方に枠状文、下方にＣ字文が描かれている。いずれも一本引きの沈線である。上胴部には渦巻文と充填した不整三角文が見られる。本資料も内面に炭化物の付着があり、屈曲した口縁直下から頸部上半に見られる。頸部上半の付着境界は直線的であり、煮沸された状態か、液体があったことを示唆している。炭化物の付着は外面にもわずかに認められる。

図28－４は短頸の壺で、口縁部から胴部上半が残存したものである。口縁部は受口状に開く。口縁部文様は、上端に横走沈線を施し、頸部との境にも一条の沈線を巡らせている。沈線間には細い工具による多条の連弧文が見られる。上胴部には、上端に四条の横走沈線を配し、その直下に渦巻文と、渦巻文の間に充填する弧線文が見られる。いずれも一本引きの沈線である。

同図５～11は壺の口縁部である。口唇部直下に横走沈線を描き、その下には上向きの連弧文を配置している。７・８・11は連弧文の接点に瘤が貼り付けられている。７は付着した炭化物から放射性炭素年代測定を実施し、暦年較正年代で174calBC－50calBC（95.4％）という年代が得られた（付章第３節参照）。

図28－12～14は高杯もしくは鉢の口縁部資料と思われる。口縁上端に横走沈線を配し、その直下に連弧文が施されている。沈線はいずれも一本引きである。

図29－1～11は壺の頸部資料をまとめた。1～4・6にはC字文が確認できる。1～4はC字文の上に横走沈線のみが確認でき、1・4・5には横走沈線上に瘤が貼り付けられている。1・4には補修孔と思われる穿孔が確認できる。1は頸部と口縁部の境付近の横走沈線上に2カ所の穿孔が見られ、口縁部と頸部を繋いだと推定する。4も同様である。

同図12～27は壺の胴部上半の資料で、12～23は渦巻文が描かれたもの、24～27は三角文が描かれたものである。13の外面には二次的な被熱の痕跡が見られた。15の渦巻文の結節点には瘤が貼り付けられている。いずれも一本引きの沈線で文様を描いている。23の外面からはキビの圧痕を検出した(付章第4節参照)。また、26の外面には煤が付着している。

図29－28・図30－1～12・15は壺の下胴部資料で、わずかに文様と沈線が確認できるものをまとめた。確認できる文様は基本的に渦巻文だが、渦巻文の間に三角文が挟まれた資料もある。図29－28の外面にはわずかに赤色塗彩が見られる。図30－1は図上で復元したものだが、胴部が球形をなすものである。胴部は渦巻文を描き、その間には三角文が描かれる。2は沈線に囲まれた施文帯に、交互にミガキを施している。3は内面に火ハゼ痕が認められる。10の内面には炭化物の付着が見られる。15には地文とわずかに横走沈線が認められる。沈線は部分的である。地文は直前段多条の斜縄文が大半で、8は付加条文、15がRLの斜縄文である。

図30－13・14・16～18、図31は地文のみの資料である。図30－13、図31－1～4・7・13は斜縄文で、LR撚り(図30－13・図31－1～3・7)とRL撚り(図31－4・13)がある。図30－13の外面には種子圧痕があり、イネの圧痕を検出した(付章第4節参照)。図30－14・16～18、図31－5・6・8～12・14・15は直前段多条の斜縄文で、いずれもLR撚りである。図31－2・11の内面と同図3・7の外面には炭化物の付着が見られる。11の資料では、付着した炭化物で放射性炭素年代測定を実施し、暦年較正年代で175calBC－47calBC(95.4%)という年代が得られた(付章第3節参照)。

図32には甕形土器をまとめた。1は口縁部径と胴部径がほぼ同じである。口縁端部は強く外反し、上胴部が丸く張る。口唇部に縄文を施し、頸部は無文で、上胴部には一本引きの沈線により九条の横走沈線を施している。沈線の一部はミガキにより消されている。上胴部には綾繰文が見られ、胴部には直前段多条の撚りで、LRの斜縄文が施されている。胴部中ほどの外面と、内面は胴部中央付近と下端にかけて多量の炭化物の付着が認められる。

2～11は口縁部が確認できるもので、頸部から胴部上半にかけて沈線が描かれないものである。共通する特徴としては、口縁部に縄文が転がされ、口縁部から頸部にかけては無文で横方向のナデ調整がされている。胴部と頸部の境には結節縄文が施され、無文帯との境界になっている。2は結節縄文ではなく、波状の沈線で区画している。口唇部付近に向けて器壁が厚くなるものが多いが、4は口唇部に向けて器壁が薄くなる。地文は4が無節縄文Rで、他はLRの単節縄文である。

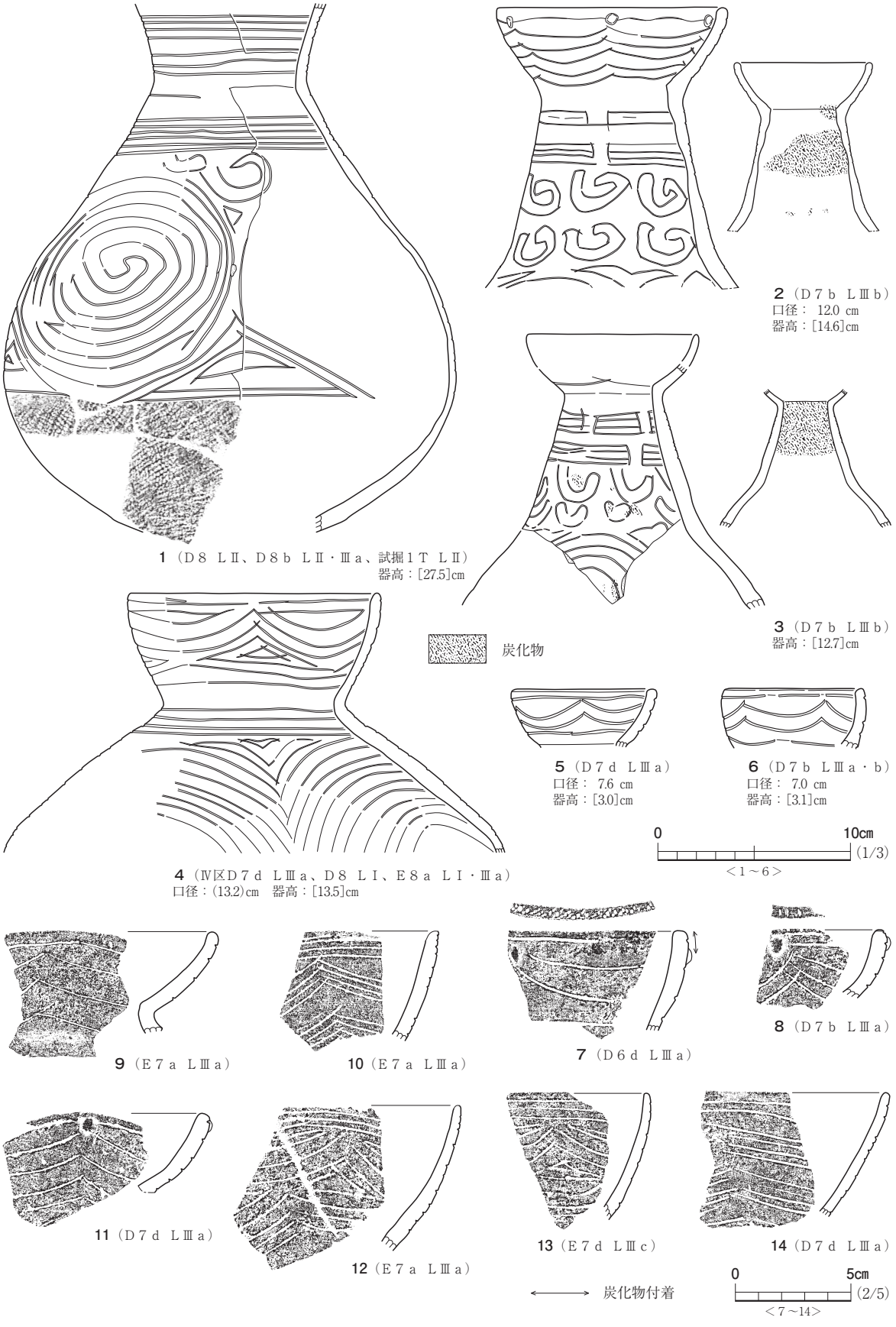


図28　遺構外出土遺物（４）

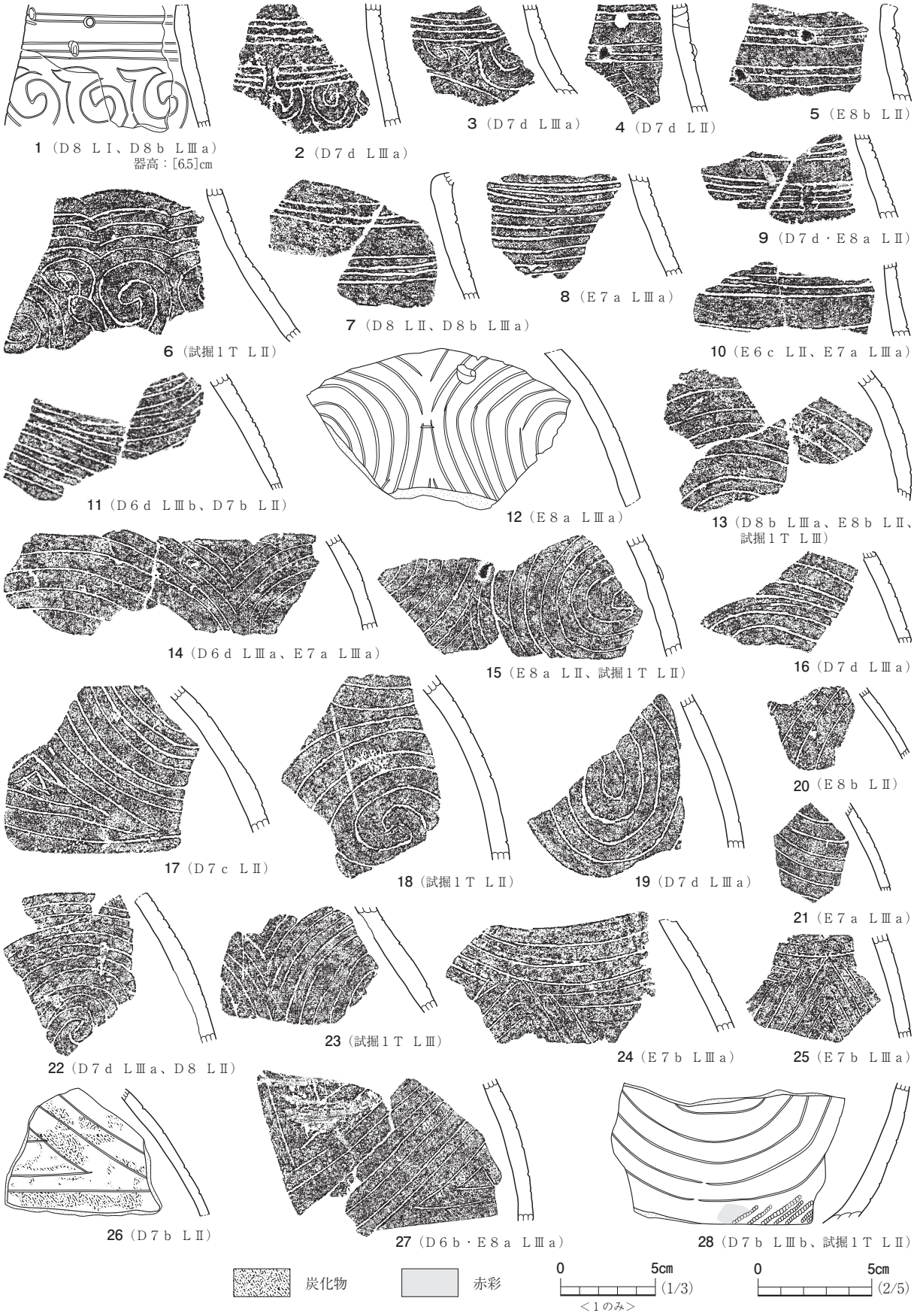


図29　遺構外出土遺物（5）

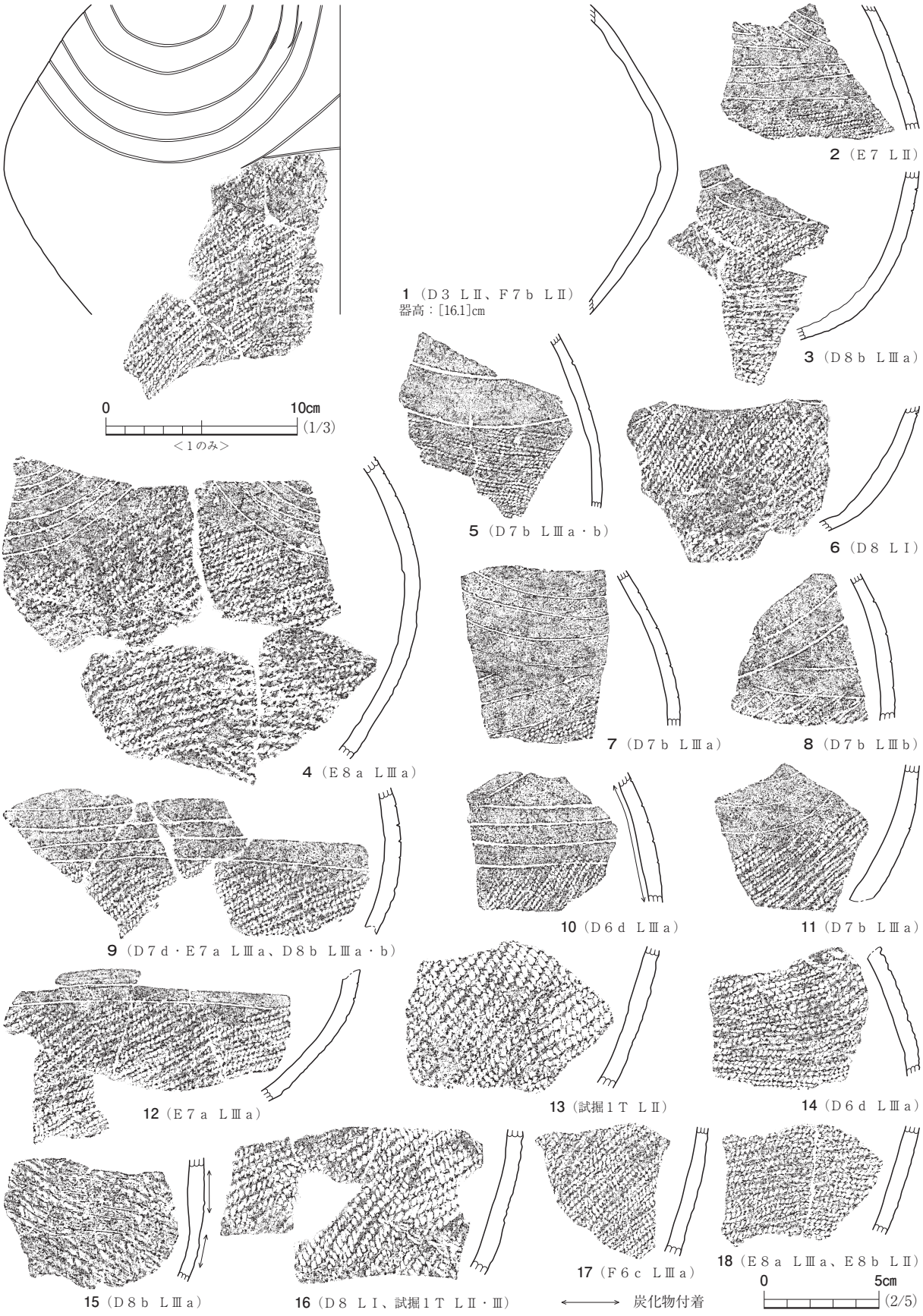


図30　遺構外出土遺物（６）

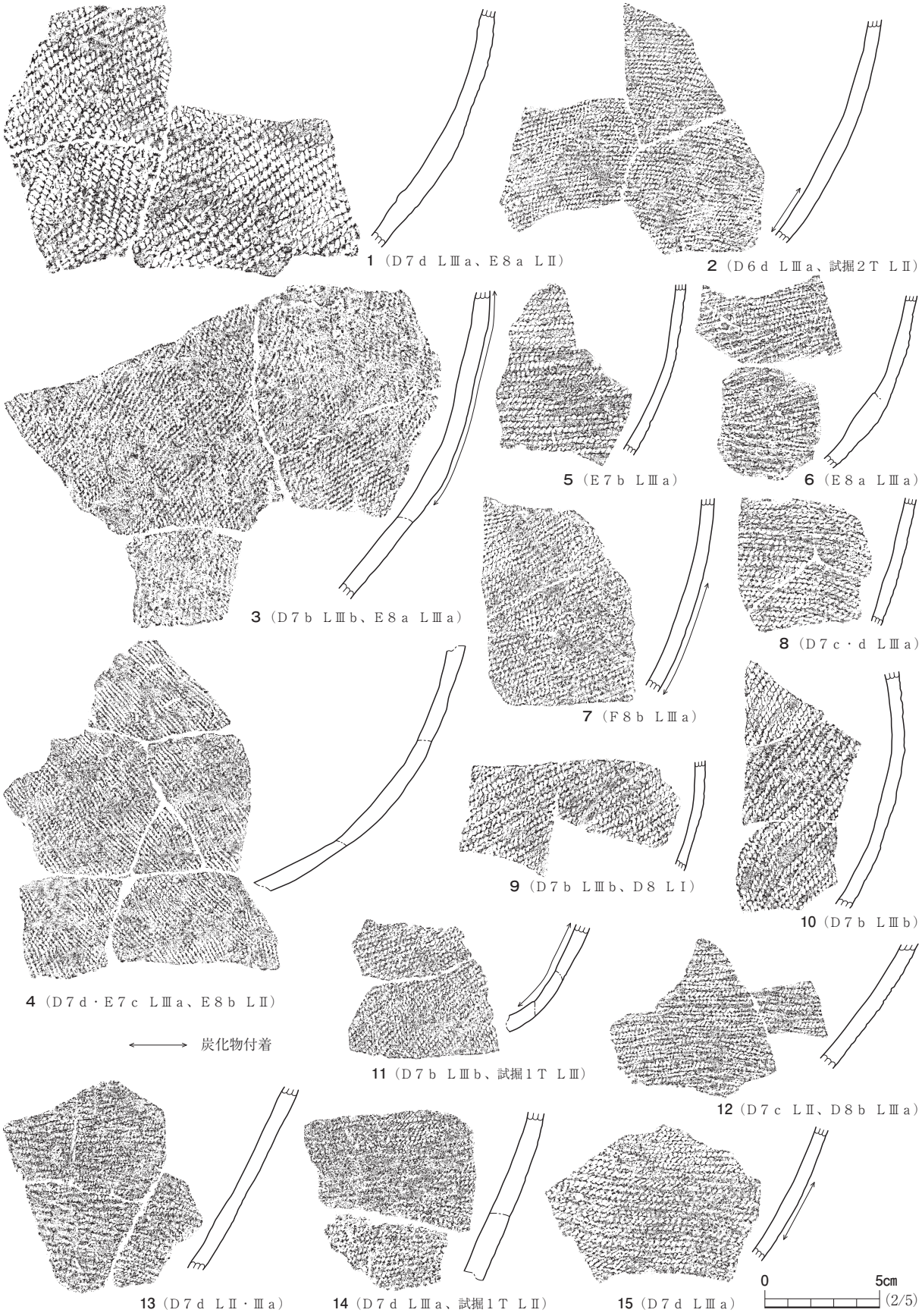


図31　遺構外出土遺物（7）

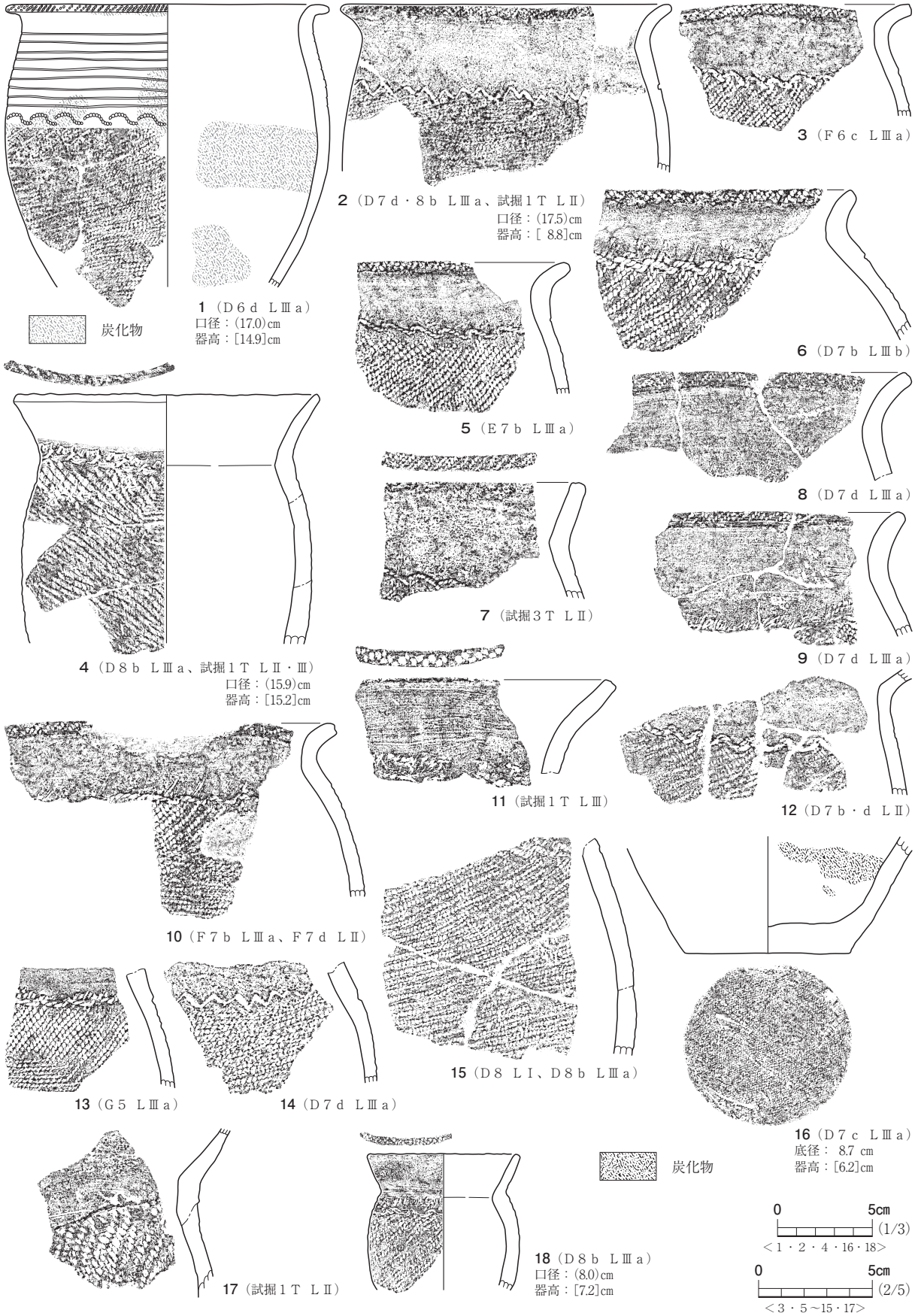


図32　遺構外出土遺物（８）

図32－12～15・17は頸部から胴部上半が残存していたものである。12・13・15は頸部付近に結節縄文が見られるが、17にはない。また、14は波状文を描いて区画している。

18は小型の甕で、調整や文様の特徴は大型のものと同じである。

図32－16、図33－１～６は底部の資料をまとめた。底部から胴部にかけての立ち上がりが急な角度のものが多いが、図33－６のように緩やかなものもある。５は台状に底部を作り出している。図32－16、図33－１・３・４の底面には布目圧痕を確認することができる。図33－１・５の内面には炭化物の付着が見られる。

図33－７～９は蓋である。７は破片から直径を復元した。上半分ほどが推定になるが、口縁端部に三条の横走沈線を二段に施し、縦の短沈線で枠状文としている。胴部には渦巻文が描かれている。内面は口縁部端部付近に三条の横走沈線が施され、外面同様、縦の短沈線により枠状文としている。９は外面に三条の沈線によりは枠状文が施され、口唇部には刺突によるキザミが見られる。内面は口縁部付近に三条の横走沈線が施されている。８は摘み部の資料である。

同図10・11は小型鉢と思われる。10は破片から径を復元した。口縁部を無文とし、屈曲した頸部に二条の横走沈線を施し、頸部から上胴部に二条の横走沈線を施し、その下方には三角文が描かれている。11も頸部が屈曲する鉢で、頸部には七条の横走沈線を施し、それより下は連弧文が見られる。口唇部にはわずかにキザミが施されている。

須恵器・磁器・古銭（図33）

図33－12～14は古代以降の遺物である。12は須恵器片だが、器種の判別は難しい。13は青磁碗の破片で、口縁が強く外側に屈曲し、外面には鎬蓮弁文が見られる。13世紀後半から14世紀頃の龍泉窯系のものと推定される。14は熙寧元宝で、鋳と摩耗によって肉眼での文字の判別は難しい。

石器・石製品（図33～36、写真31～33）

図33－15～21・図34～36には石器・石製品をまとめた。

図33－15・16は石鏃である。15は未製品と考えられ、長さ1.7㎝と短く、小型のものである。16は無茎鏃で、基部に抉りがある。17は石錐である。刃部を中心に細かく調整されている。18は石匙である。左右の側面に細かな調整が見られ、摘み部が作りだされている。19～21は削器で、19・20は先端部が欠損している。３点とも、刃部の側縁に細かな調整が見られる。

図34－１・２は石鍬である。１は完形品で、刃部に使用痕と推定される摩耗が見られる。基部と刃部の境には抉りが入れられている。抉りの部分を側面から見ると、敲打痕が確認できる。２は刃部の一部が欠損している。抉りはなく、基部が薄い。刃部には磨耗が見られる。３は完形の打製石斧である。ほぼ全体が加工されているが、裏面の一部に自然面が残る。刃部は基部よりも薄く作られている。４はピエス・エスキーユである。上下の側縁に細かな剝離が見られるが、特に下端を中心に調整を加えている。

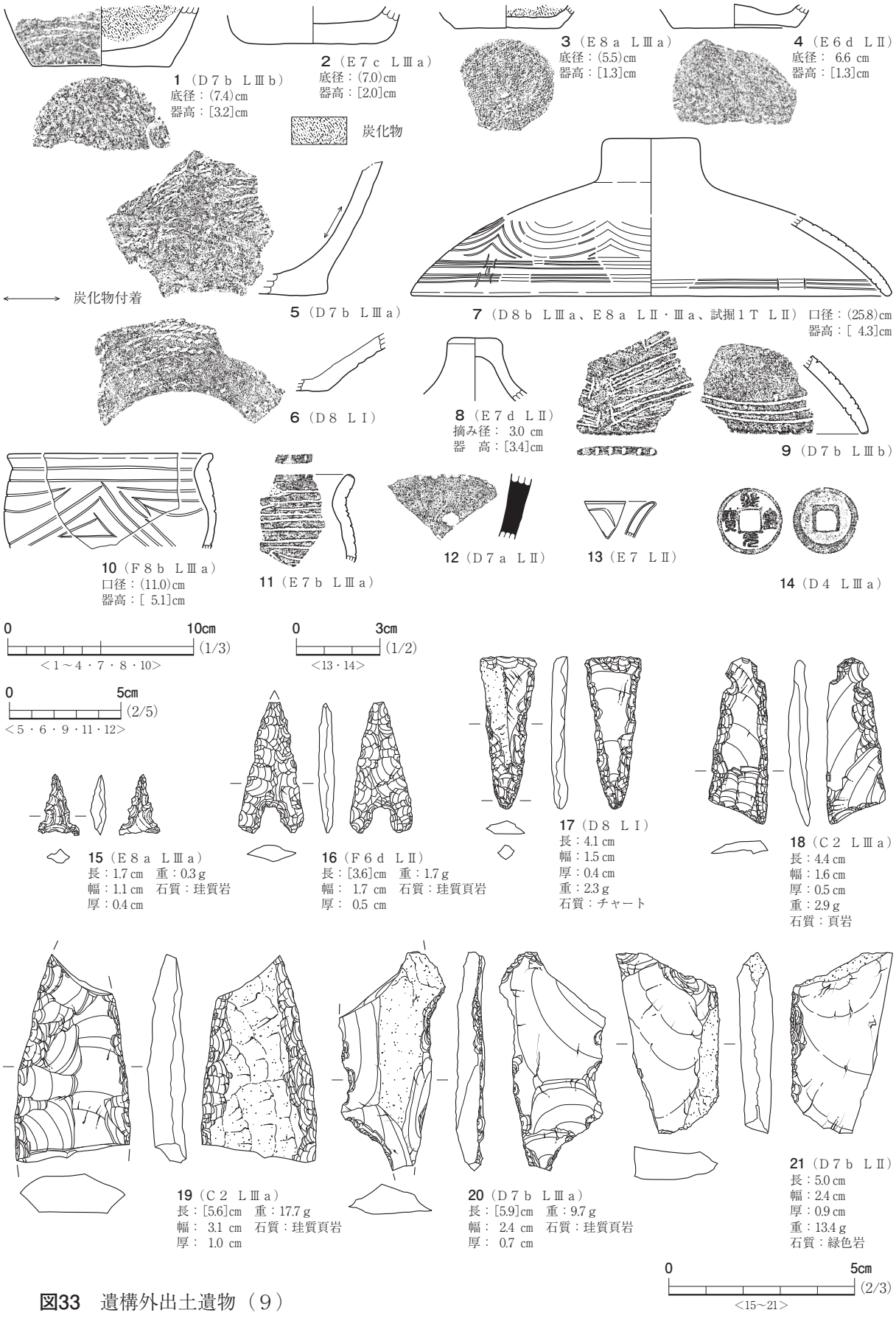


図33　遺構外出土遺物（９）

図34－5～7は二次調整のある剝片である。石質は5がガラス質安山岩、6・7が珪質頁岩である。5は厚みのある剝片に調整を加えている。6は縦長の剝片に調整を加えたもので、左側縁には微細剝離も観察できる。7は扁平に近く、下端を中心に剝離が観察できる。

図34－8・9・図35－1～7は微細剝離のある剝片である。石質は珪質頁岩、緑色岩、砂岩、チャート、輝石安山岩がある。図34－8は輝石安山岩で、縦長の剝片である。左右の側縁に微細な剝離が見られる。図35－1は砂岩で、縦長に割り出した剝片である。厚みがあり、自然面が残っている。左側縁の抉れた部分に微細剝離が観察できる。

図34－9・図35－2・3は珪質頁岩で、図34－9は不定形、図35－2は縦長、図35－3は横長の剝片である。図34－9は側縁に抉り状に微細剝離を加えている。図35－2は左右の側縁に微細剝離が見られ、3は上下の縁に細かな剝離が見られる。

図35－4～6は緑色岩を素材とする剝片である。いずれも縦長の剝片で、長側縁のいずれかに微細剝離を加えている。5は片側の長側縁が抉り状に割られていて、下端部付近には自然面が残る。

図35－7はチャートを素材とした横長の剝片である。同図8は不定形の剝片で、石質はガラス質安山岩である。右側の長側縁に微細剝離が観察できる。

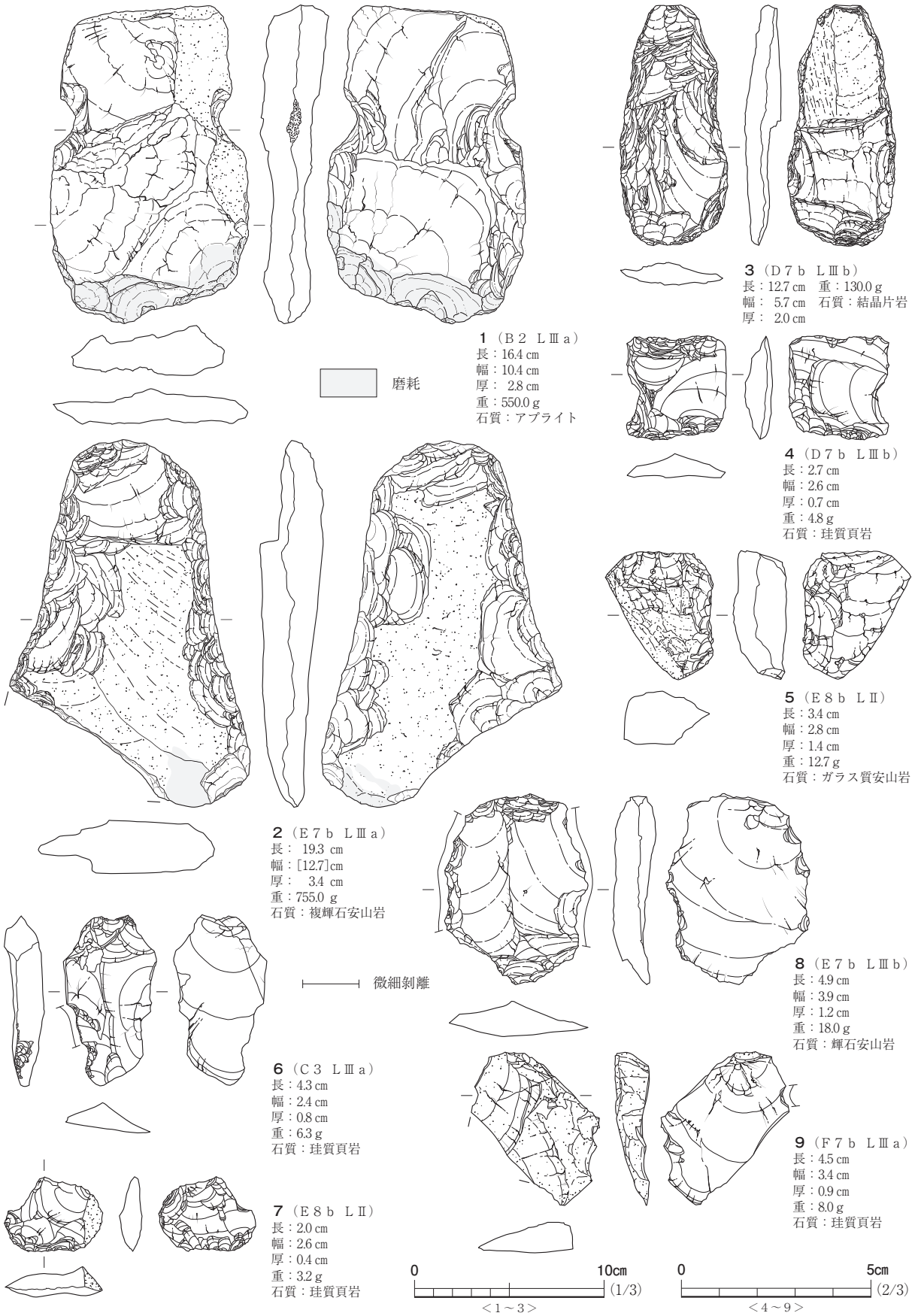
図36－1～3は剝片で、石質はいずれも緑色岩である。

図36－4は石核で、石質は緑色岩である。自然面を残す場所が少なく、ほぼすべての面で剝片が採取されている。同図5も緑色岩で、ブランクと考えられる。縦長の礫の相対する長側辺を割っているが、自然面が多く残る。

石器は石核やブランク、剝片、石鏃・石錘・打製石斧・石鍬などの完成品まで出土しており、共通して緑色岩が使われているものが比較的多く確認できる。

以上の遺物は、縄文または弥生時代のものと考えられる。このうち、石鏃、石匙、削器は縄文時代のものと考えられる。石匙は縄文早期から前期に見られるものである。また、石鍬は弥生時代のもので、ほかのものについては時期を特定できない。

図36－6は砥石で、側面に使用痕がある。古代または中世のものと推定される。　（鶴　見）



1（B２ LⅢａ）
長：16.4 cm
幅：10.4 cm
厚： 2.8 cm
重：550.0 g
石質：アプライト

2（E７b LⅢａ）
長： 19.3 cm
幅：[12.7]cm
厚： 3.4 cm
重：755.0 g
石質：複輝石安山岩

3（D７b LⅢb）
長：12.7 cm　重：130.0 g
幅： 5.7 cm　石質：結晶片岩
厚： 2.0 cm

4（D７b LⅢb）
長：2.7 cm
幅：2.6 cm
厚：0.7 cm
重：4.8 g
石質：珪質頁岩

5（E８b LⅡ）
長：3.4 cm
幅：2.8 cm
厚：1.4 cm
重：12.7 g
石質：ガラス質安山岩

6（C３ LⅢａ）
長：4.3 cm
幅：2.4 cm
厚：0.8 cm
重：6.3 g
石質：珪質頁岩

7（E８b LⅡ）
長：2.0 cm
幅：2.6 cm
厚：0.4 cm
重：3.2 g
石質：珪質頁岩

8（E７b LⅢb）
長：4.9 cm
幅：3.9 cm
厚：1.2 cm
重：18.0 g
石質：輝石安山岩

9（F７b LⅢａ）
長：4.5 cm
幅：3.4 cm
厚：0.9 cm
重：8.0 g
石質：珪質頁岩

図34　遺構外出土遺物（10）

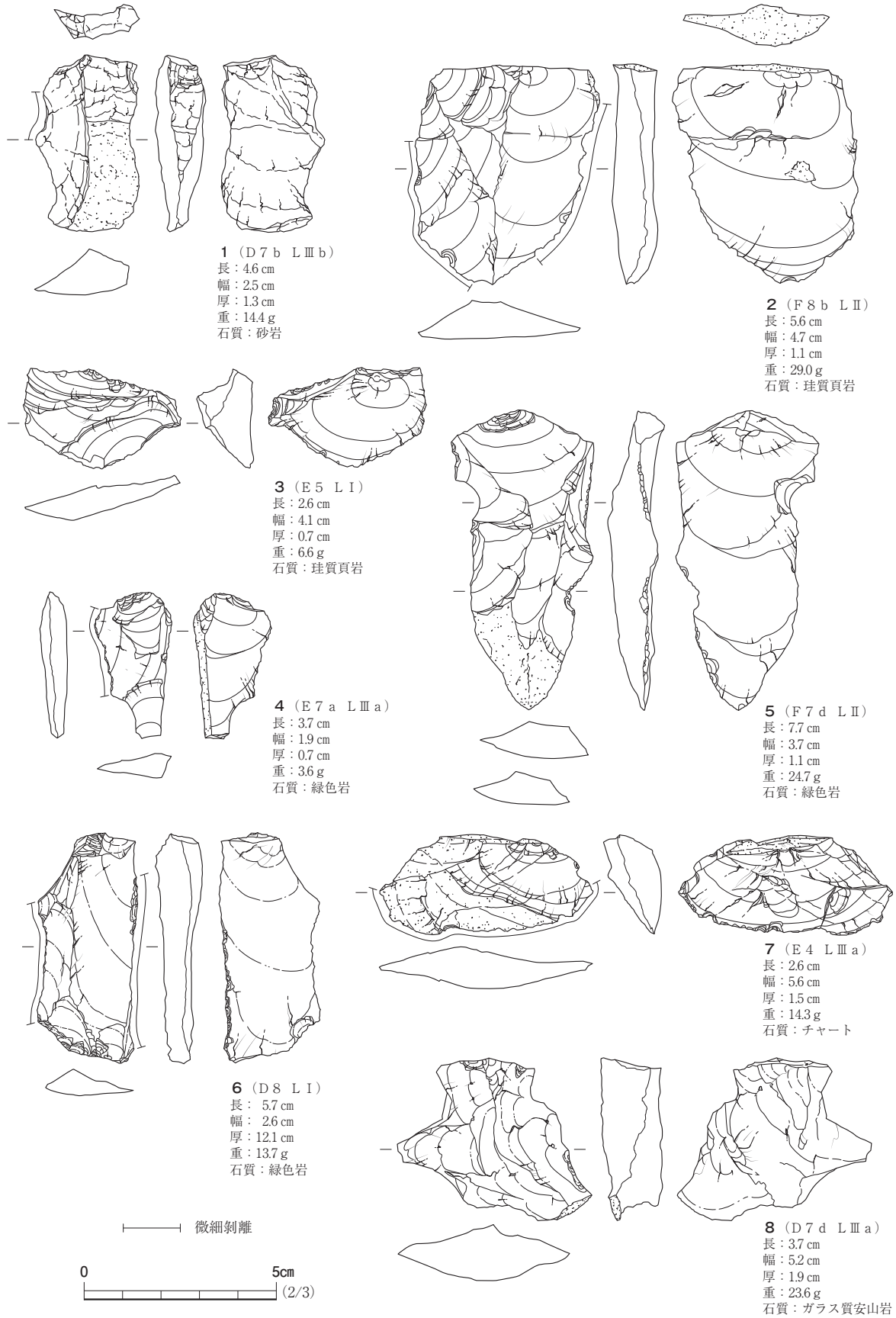


図35　遺構外出土遺物（11）

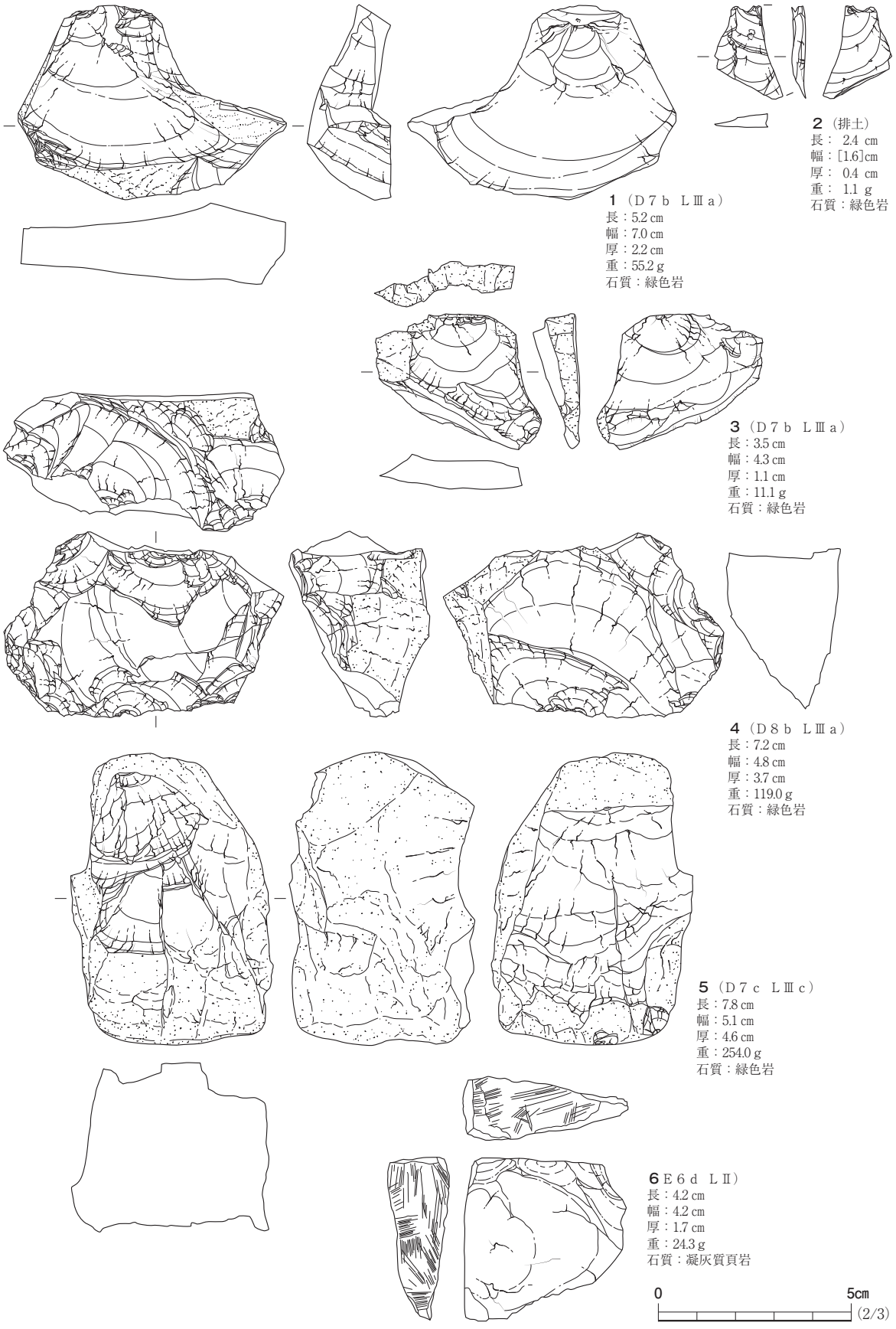


図36　遺構外出土遺物（12）

第３章　　総　　括

本遺跡の調査では、竪穴住居跡１軒、土坑33基、井戸跡１基、集石遺構２基、焼土遺構２基、小穴371基、遺物包含層１カ所を調査した。遺物は、縄文時代早期・後期・晩期、弥生時代中期、平安時代、鎌倉時代のものが出土している。時期ごとに遺構・遺物についてまとめる。

縄文時代

縄文時代の遺物は、早期･後期･晩期の縄文土器と石器が出土している。土器は、早期後葉の鵜ヶ島台式期、日向前Ｂ式期、後期前葉の堀ノ内式期、後期中葉の加曾利Ｂ式期、後期後葉の瘤付土器、晩期の大洞Ｂ式・ＢＣ式期に比定できるものを確認した。早期の遺物は少量であり、後期・晩期が主体である。特に、後期の土器は前葉から後葉まで確認でき、24点と出土点数も多い。

早期・後期の土器は、弥生土器と同じＬⅢａから出土しており、東側の斜面から流入してきた土砂に含まれていたと判断している。調査区外にあたる東側斜面上方には平坦な場所が確認でき、遺物の出土状況から、東側の平坦な場所でも縄文時代の遺構・遺物が確認できる可能性が高い。調査区内では竪穴住居跡が見られないことから、東側斜面上方に集落があったと推定している。

弥生時代

弥生時代の遺物は、中期後半の弥生土器と石器が出土している。土器は川原町口式のもので、長頸壺、短頸壺、甕、鉢、蓋、高杯を確認している。川原町口式土器の特徴については、二本同時引きの沈線で文様を描いていることが一つの指標になっている（中村　1976）。また、近年では南御山Ⅱ式から御山村下式までの文様の変遷が検討され、川原町口式では一本引きのものも含まれ、一本引きのものが古く、二本同時引きのものが新しいという指摘がされている（佐藤　2012）。本遺跡出土の資料では、二本同時引きのものはほとんど見られず、一本引きの資料が多い。

土器に見られる特徴として注意しておきたいのが､二次的に熱を受けた壺が見られることである。外面や内面の炭化物･煤の付着や、二次被熱によって器面が赤色化しているものが多数ある。特に、図28－２・３などは頸部内面に使用の痕跡が明瞭に残り、煮炊きに使用されていた可能性がある。一般的に、弥生時代以降は壺と甕の使い分けが明確になり、壺は貯蔵具、甕は煮炊具として利用されていたと考えられている。しかし、本遺跡出土の資料に限ってみると、用途が区分されているとは言い難い。福島県では弥生時代の集落遺跡の調査事例が少ないため、集落における土器の様相は完全には把握されていない。そのため、本遺跡での状況が福島県の集落遺跡において普遍的なものであったのか、特殊なものであったのかは現状では評価できない。

また、土器の表面に残った圧痕の分析によって、栽培植物であるイネとキビの種子圧痕が見つ

かった。本遺跡出土の弥生土器の製作地については不明だが、福島県で弥生時代中期に農耕が行われていたことを示す資料となった。

今回の調査では弥生時代の竪穴住居跡は見つかっていないが、調査区内を含む近隣に集落があったと考えている。福島県では弥生時代中期の竪穴住居跡が見つかる事例は少なく、地面に痕跡が残りにくい構造をしていた可能性が指摘されているため、調査区内が居住域として利用されていた可能性は高い。また、18号土坑のような、土坑墓の可能性がある遺構もあり、集落に伴って墓が営まれていた可能性もある。

古代から中世

古代から中世の遺構は、竪穴住居跡、土坑、井戸跡、焼土遺構、小穴を確認した。このうち、竪穴住居跡は平安時代頃のものと推定している。下郷町では、古代の竪穴住居跡の調査事例として、南倉沢遺跡などがある。平面形は方形、カマドのいずれかのコーナーに接して構築しているという点が、本遺跡の竪穴住居跡と共通している。本遺跡の竪穴住居跡からは古代の土師器・須恵器などの土器類が出土していないため、詳細な時期は特定できないが、住居跡周辺の小穴や遺構外から古代の土師器・須恵器が出土していることや周辺での調査事例との共通性から、古代の竪穴住居跡である可能性は高い。小穴で古代に属すると考えられているものは、放射性炭素年代測定では７世紀から８世紀前半という結果が示されているが、その時期の遺物は出土していない。出土した土師器は全体の形態が不明なため時期は特定できないが、ロクロ成形であること、黒色処理が見られることなどから、おおむね９世紀に属するものである。年代測定の結果は、伐採年を示している可能性があり、小穴も古代のものは９世紀に属すると推定している。

中世の遺構で中心となるのは小穴群であるが、重複が激しいため、どの小穴で建物が構成されるのか明確にできない。小穴の年代を示す遺物には火打金がある。透かしのある火打金は、12世紀後半から14世紀に類例が多いことが指摘されている（鶴見貞雄　2005）。この年代は年代測定の結果とも近似しているため、中世の建物の存在が考えられる。また、遺構外出土ではあるが、青磁碗の破片が出土している。13世紀後半から14世紀のものと推定される。出土遺物の年代を踏まえ、12世紀後半から14世紀にかけて、ある程度の幅を持って小穴の年代を考えておく必要がある。

建物跡に伴うと考えられる井戸跡は、縦板を組み合わせた井戸側を持つ特徴的なものである。同じ特徴の井戸跡は、福島県では郡山市荒井猫田遺跡の1290号土坑や1317号土坑などの類例がある。このうち、1290号土坑からは13世紀から14世紀頃の遺物が出土しており、中世の井戸跡であることが判明している。１号井戸跡の井戸枠の年代測定結果は、これより古い年代を示しているが、13世紀から14世紀にも建物が機能していたと推定されることから、13世紀から14世紀まで時期が下る可能性も残されている。

下郷町で行われたこれまでの発掘調査では、平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構・遺物が見つかった事例はなかった。古代末から中世初頭は、南会津地域で長江荘が成立した時期に近く、本

遺跡はその時期の状況の一端を示している可能性もある。

また、本遺跡の北側、又見山の山腹には中世城館とされる白岩城跡がある。発掘調査が行われていないため詳細は不明だが、立地が近く、白岩城の成立時期によっては、詰め城と根小屋のような関係であった可能性もあるが、確証はない。今後、白岩城跡を含む周辺の城館跡の詳細が明らかになることを期待したい。　　（鶴　見）

参考文献

門脇秀典ほか　2016『福島県内遺跡分布調査報告 23』　福島県教育委員会
黒沢俊廣ほか　2001『荒井猫田遺跡－第 12・13 次発掘調査報告－』　郡山市教育委員会
小滝利意ほか　1996『瀧平遺跡発掘調査報告書』　下郷町教育委員会
作田一耕ほか　2016『会津縦貫南道路遺跡発掘調査報告１　栗林遺跡（１次調査）』　福島県教育委員会
佐藤　啓ほか　2013『平成 21～24 年度埋蔵文化財調査報告書　下平遺跡（１・２次調査）・明神遺跡・小平城跡』　下郷町教育委員会
佐藤祐輔　　2012「東北地方南部における弥生時代中期後半の土器編年と遺跡立地」『考古学集刊』　明治大学文学部考古学研究室
鶴見貞雄　　2005「「透かし入り火打金」小考－関東および山梨県出土火打金の古代から中世への形態変化－」『古代東国の考古学』　慶友社
寺島隆太ほか　2008『平成 18・19 年度町内試掘調査報告書』　下郷町教育委員会
中村五郎　　1976「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』　寧楽社
西ヶ谷恭弘　　1986『第一次・第二次　下郷町城館址調査報告書』　下郷町教育委員会
西ヶ谷恭弘　　1994『九々布城跡Ⅰ』　下郷町教育委員会
西ヶ谷恭弘　　1997『九々布城跡Ⅱ』　下郷町教育委員会
芳賀英一ほか　1988『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告Ⅵ　一ノ堰Ａ・Ｂ遺跡』　福島県教育委員会
樋口弘一　　1990『下郷町遺跡分布調査報告書』　下郷町教育委員会
福島雅儀ほか　2003『一般国道 289 号南倉沢バイパス遺跡発掘調査報告１　南倉沢遺跡　稲干場遺跡』　福島県教育委員会
古川利意　　1987『窪田遺跡』　只見町教育委員会
堀金　靖　　1994『川原町口遺跡』　会津若松市教育委員会
室井徳人ほか　2006『左走遺跡発掘調査報告書』　下郷町教育員会

付章　自然科学分析

第1節　火 山 灰 分 析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．はじめに

下郷町に所在する瀧ノ入遺跡は、西会津山地を流下する阿賀川の支流である隈川上流域右岸に分布する丘陵上に立地する。発掘調査では、弥生時代の土坑の他、古代の竪穴住居跡や中世以降の掘立柱建物跡等が確認されている。本報告では、調査区内で採取された、火山灰と考えられる砕屑物を含む土壌と軽石を対象として、その特性を明らかにすることにより、火山噴出物(テフラ)の同定を行い、土層の年代に関わる資料を作成する。

2．試　　料

試料は、瀧ノ入遺跡の基本層序地点№１、№２で採取されており、№１ではＬⅢａから試料番号１、ＬⅢｂから試料番号2が、ＬⅢｃから試料番号３が、ＬⅢｄから試料番号４がそれぞれ採取されている。№２ではＬⅣａから試料番号５が、ＬⅣｂから試料番号６が、ＬⅤから試料番号７がそれぞれ採取されている。

採取された試料は黒褐色を呈する火山灰土５点と２点の軽石である。試料には試料番号１～７までの番号が付されているが、これらのうち、試料番号３と試料番号６が軽石である。

火山灰土試料は、いわゆる黒ボク土の外観を呈し、いずれも砂質である。試料番号１や２には、径数㎜程度の軽石と思われる砕屑物が認められるが、他の火山灰試料には目立った砕屑物は認められない。試料番号３の軽石試料は、径約38㎜、灰褐色を呈し、発泡はやや良好である。斜方輝石、角閃石および斜長石の各斑晶をやや多く包有する。試料番号６の軽石試料は、径約29㎜、褐色を呈し、発泡は良好である。斑晶は試料番号３に比べると少なく、斜方輝石や斜長石が認められる。

本分析調査では、試料番号１、２、４、５、７についてテフラ検出・同定を、試料番号１～７について火山ガラス比分析、重鉱物・鉱物組成分析、屈折率測定を実施する。

3．分析方法

(１)テフラの検出同定

火山灰土試料５点を対象とする。試料約20ｇを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

(２)重鉱物・火山ガラス比分析および屈折率測定

火山灰土試料５点と軽石試料２点の全７点を対象とする。火山灰土試料は約40g、軽石試料は適度に粉砕した後に、水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16㎜以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4㎜－1/8㎜の砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分

離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、上述のテフラ分析におけるそれと同様である。また、火山ガラスにおける「その他」とは、軽鉱物分における火山ガラス以外の粒子（石英や長石類などの鉱物粒子および風化変質粒など）である。

屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

4．結　果

（1）テフラの検出同定

結果を表4に示す。軽石が、試料番号1に中量、試料番号2に少量、試料番号4、5、7にそれぞれ微量ずつ含まれる。試料番号1の軽石は、最大径約12.5㎜、淡灰褐色を呈し、発泡良好なものと灰白色を呈し、発泡良好なものとが混在する。いずれの軽石にも、角閃石の斑晶の包有が認められる。試料番号2の軽石は、最大径約5㎜、色調や発泡度は試料番号1の軽石とほぼ同様であるが、発泡がやや良好の軽石も認められる。試料番号4と5の軽石は、最大径3.5㎜程度であり、白色を呈し、発泡は良好、角閃石と斜方輝石の斑晶の包有が認められる。試料番号7の軽石は、最大径約9.2㎜、灰白色を呈し、発泡は不良、角閃石の斑晶の包有が認められる。

火山ガラスは、無色透明軽石型の火山ガラスが試料番号1に極めて微量認められたのみであり、他の試料は認められなかった。スコリアは、いずれの試料にも認められなかった。

（2）重鉱物・火山ガラス比分析および屈折率測定

重鉱物・火山ガラス比分析の結果を表5、図37に示す。重鉱物組成は、7点の試料ともに、斜方輝石、角閃石、不透明鉱物の3者を主体とし、微量の単斜輝石を伴うという組成を示す。これらのうち、試料番号1と軽石試料の試料番号3と6は、角閃石が最も多い組成であり、試料番号4と5は不透明鉱物が最も多く、試料番号2は3者が同量程度である。試料番号7は斜方輝石が最も多い。

火山ガラス比は、いずれの試料においても微量しか含まれない。形態は中間型および軽石型が多い傾向が窺える。

火山ガラスの屈折率を図38に示す。試料番号1は、レンジがn1.498－1.502、モードはn1.500、試料番号2は、レンジがn1.498－1.503、モードはn1.499とn1.502の複数ある。試料番号3は、レンジがn1.500－1.504、モードはn1.503、試料番号4は、レンジがn1.498－1.504、モードがn1.501、試料番号5は、レンジがn1.499－1.501、モードはn1.500、試料番号6は、レンジがn1.497－1.507、モードはn1.501－1.502、試料番号7は、レンジがn1.497－1.503、モードがn1.500と1.502の複数ある。

5．考　察

試料番号1より、中量検出された軽石は、黒ボク土層中という層位と瀧ノ入遺跡の地理的位置、および軽石の色調や発泡度、さらには包有する斑晶鉱物の種類と屈折率とから、約5,000年前に沼沢湖カルデラから噴出した沼沢湖テフラ（Nm-N：町田・新井 2003、山元 1995）に由来すると考えられる。採取地点№1では、軽石の層位的な産状から、ⅬⅢａの形成時期にNm-Nの降下堆積があり、その後の土壌化作用により、下位のⅬⅢｂにも拡散したことが推定される。なお、山元（1995）によるNm-Nの給源付近の産状は、火砕流堆積物を含む4つのユニットから構成されており、軽石にもデイサイト軽石と安山岩軽石とが認められている。今回の分析でも、試料番号1と2では、火山ガラスの屈折率において比較的広いレンジや複数のモードなどが認められているが、これは特性の異なる複数のユニットに由来する砕屑物が混在していることに起因すると考えられる。

さらに下位のＬⅢｃから採取された試料番号3の軽石については、屈折率や斑晶の重鉱物組成などが、試料番号１や２の軽石とほぼ同様であることから、同じ沼沢湖カルデラの噴出物に由来する可能性がある。ただし、その粒径は試料番号１や２の軽石に比べるとはるかに大きいことと表面が円磨され風化していることから、Nm-Nより以前に噴出した沼沢湖カルデラの火山砕屑物に由来する可能性がある。沼沢湖カルデラは、約５万年前に水沼火砕堆積物と呼ばれるテフラを噴出しており（山元 1995）、このテフラに由来する砕屑物が再堆積した可能性がある。このことは、ＬⅢｃよりも下位の採取地点№１のＬⅢｄの軽石や採取地点№２の各試料中の軽石についても同様に考えることができる。

引用文献

古沢　明　1995「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』第101号　123-133pp.

町田　洋・新井房夫　2003『新編　火山灰アトラス』東京大学出版会　336p.

山元孝広　1995「沼沢火山における火砕流噴火の多様性：沼沢湖および水沼火砕堆積土の層序」『火山』40巻　67-81pp.

表４　テフラ分析結果

試料採取地点	層名	試料番号	スコリア	火山ガラス		軽石		
			量	量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径
№１	ＬⅢａ	1	－	(+)	cl･pm	＋＋＋	PGBr･g(ho)，GW･g(ho)	12.5
	ＬⅢｂ	2	－	－		＋＋	PGBr･g(ho)，GW･g(ho)，GW･sg(ho)	5.0
	ＬⅢｄ	4	－	－		＋	W･g(ho･opx)	3.5
№２	ＬⅣａ	5	－	－		＋	W･g(ho･opx)	3.5
	ＬⅤ	7	－	－		＋	GW･b(ho)	9.2

凡例　－：含まれない　(+)：きわめて微量　＋：微量　＋＋：少量　＋＋＋：中量　＋＋＋＋：多量
PGBr：淡灰褐色　GW：灰色　W：白色　(opx)：斜方輝石斑晶包有　(ho)：角閃石斑晶包有　最大粒径単位：㎜
g：良好　sg：やや良好　sb：やや不良　b：不良　cl：無色透明　br：褐色　bw：バブル型　md：中間型　pm：軽石型

表５　重鉱物・火山ガラス比分析結果

試料採取地点	層名	試料番号	種別	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
№１	ＬⅢａ	1	軽石	69	2	110	0	0	68	1	250	0	1	2	247	250
	ＬⅢｂ	2		87	5	76	0	0	81	1	250	1	2	1	246	250
	ＬⅢｃ	3	軽石	57	7	111	0	0	75	0	250	1	0	0	249	250
	ＬⅢｄ	4		71	7	80	1	0	91	0	250	1	3	3	243	250
№２	ＬⅣａ	5		57	2	71	0	1	119	0	250	0	2	4	244	250
	ＬⅣｂ	6	軽石	67	5	95	0	0	83	0	250	0	0	0	250	250
	ＬⅤ	7		122	12	43	0	0	72	1	250	0	5	1	244	250

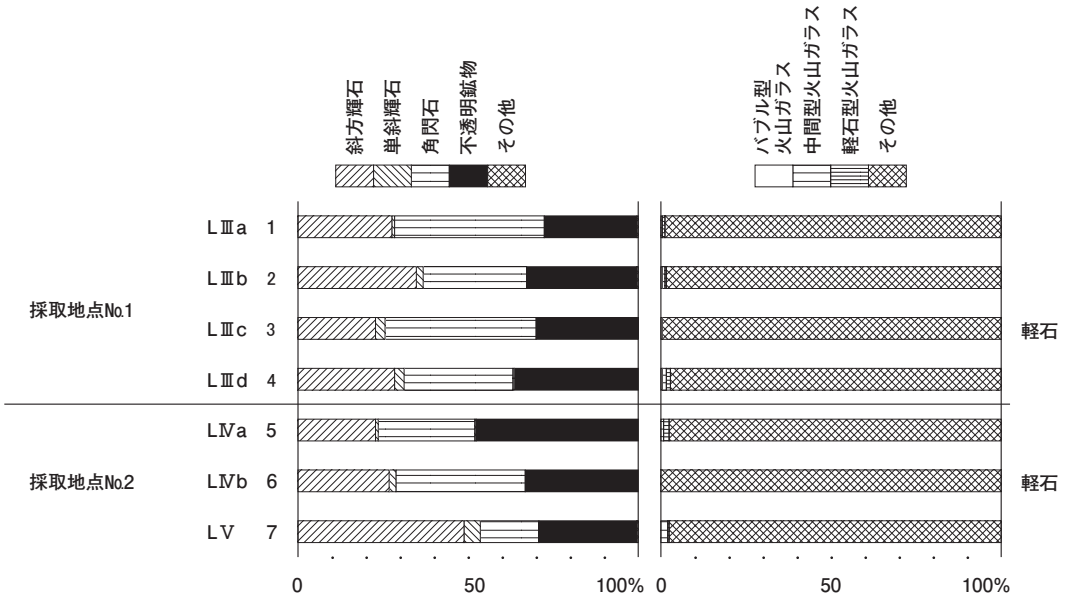


図37　重鉱物組成および火山ガラス比

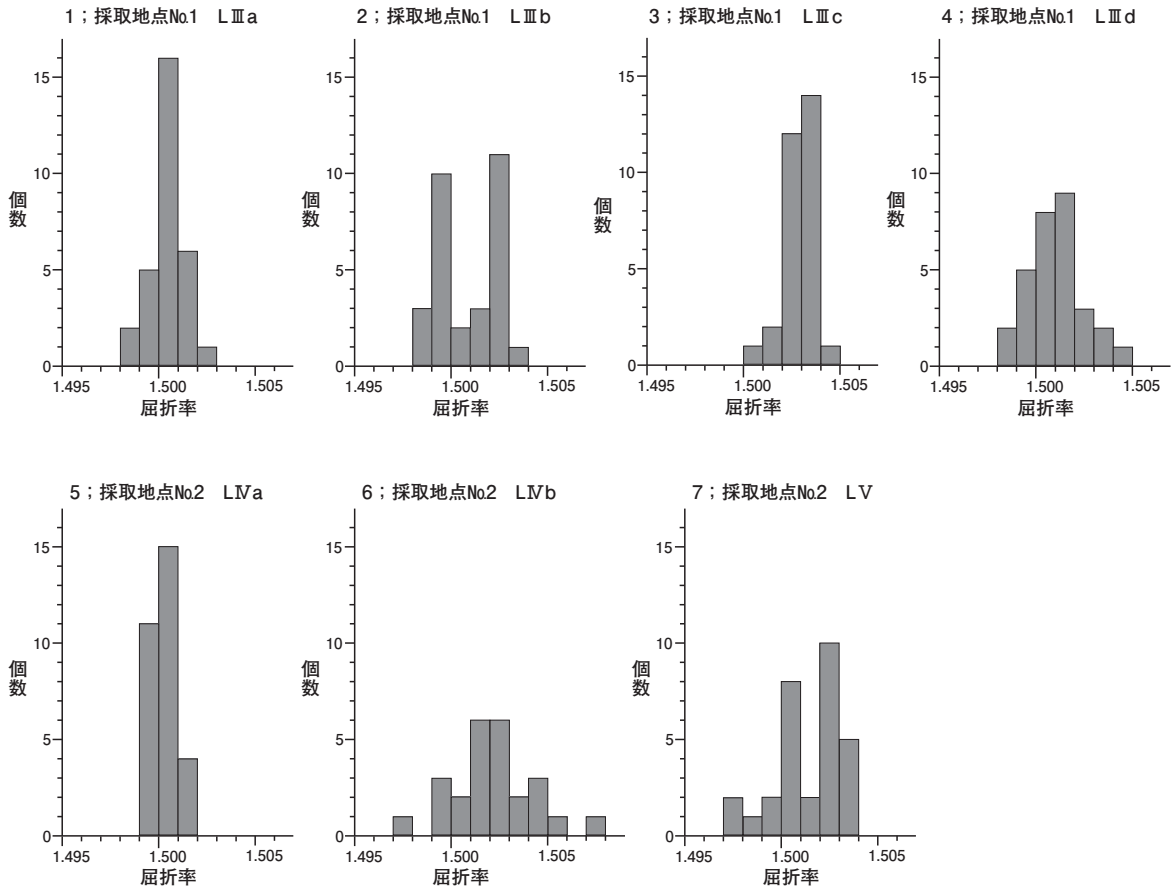
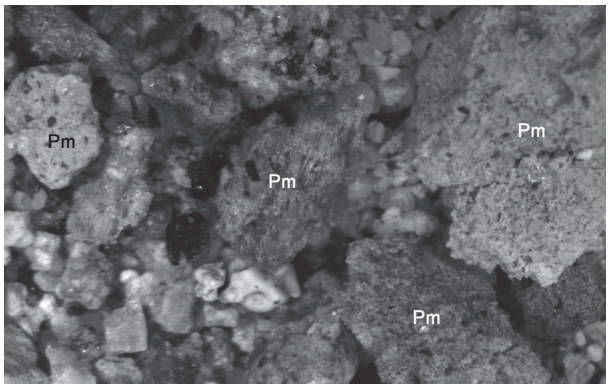
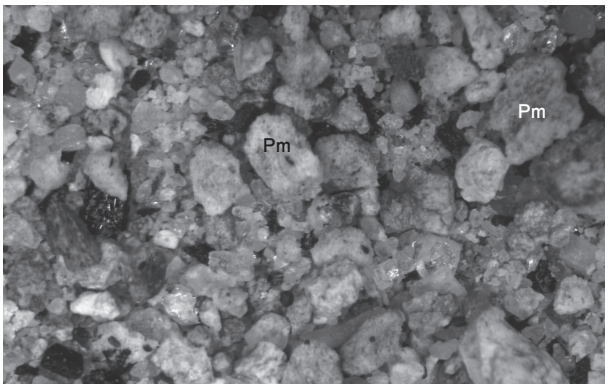


図38　火山ガラスの屈折率

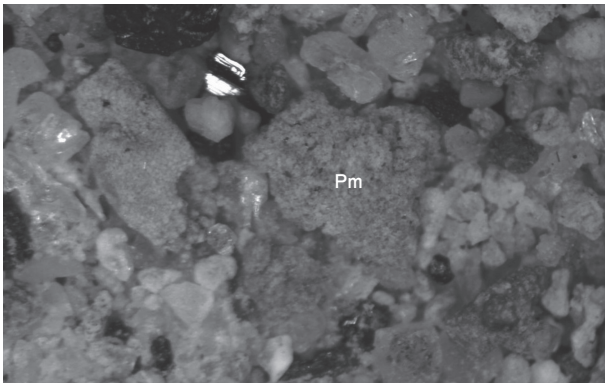


1．軽石(採取地点№1　ⅬⅢａ：1）

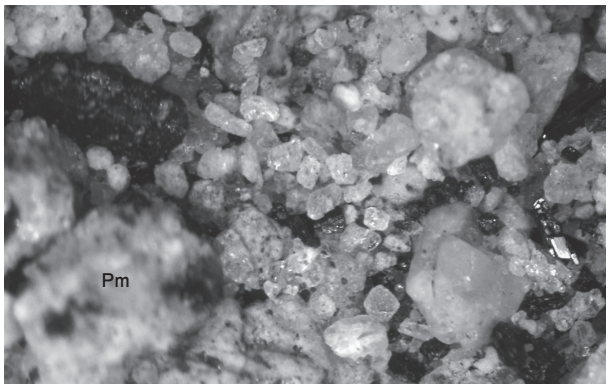


2．砂分の状況(採取地点№1　ⅬⅢｂ：2）

3．軽石(採取地点№1　ⅬⅢｃ：3）

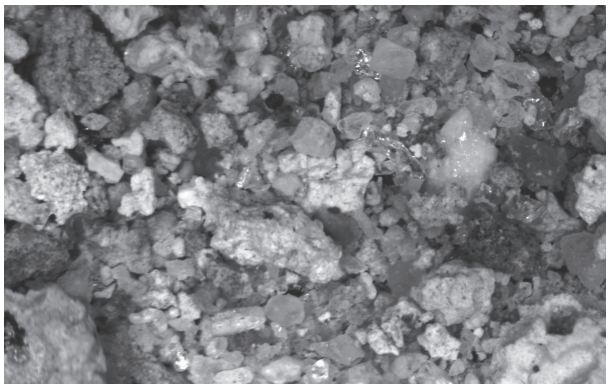


4．砂分の状況(採取地点№1　ⅬⅢｄ：4）



5．砂分の状況(採取地点№2　ⅬⅣａ：5）

6．軽石(採取地点№2　ⅬⅣｂ：6）



7．砂分の状況(採取地点№2　ⅬⅤ：7）

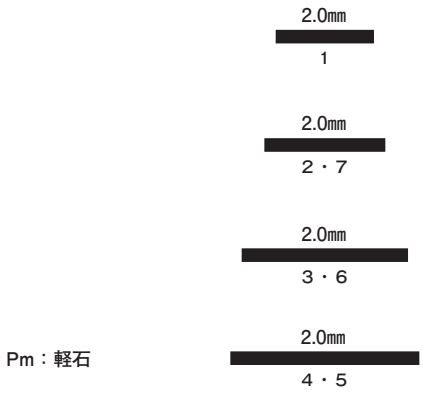
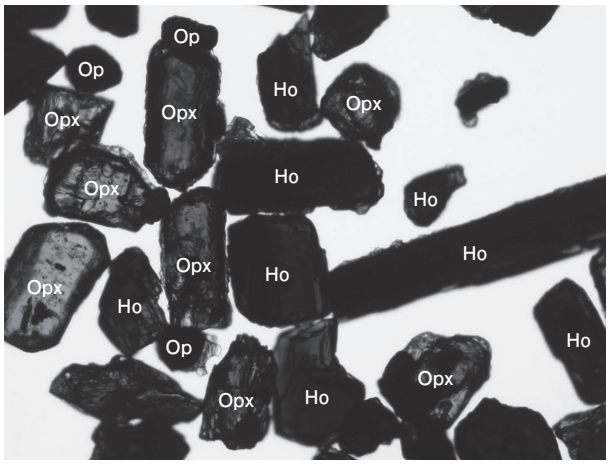
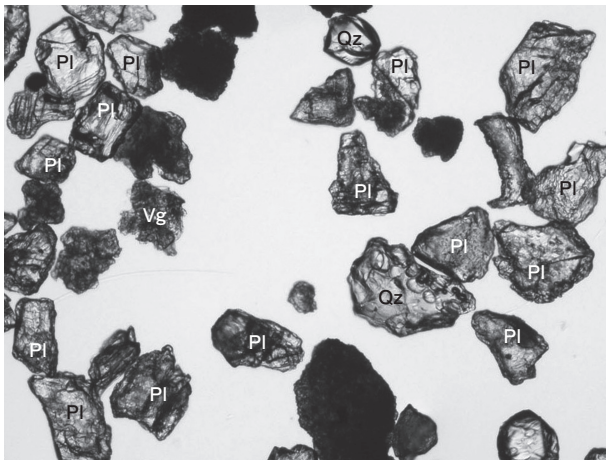


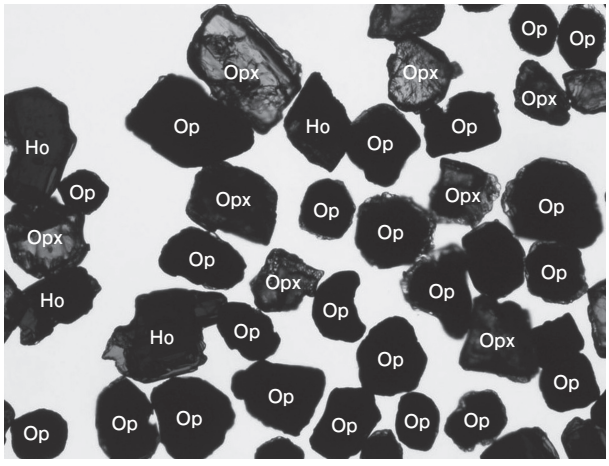
図39　テフラ・砂分の状況



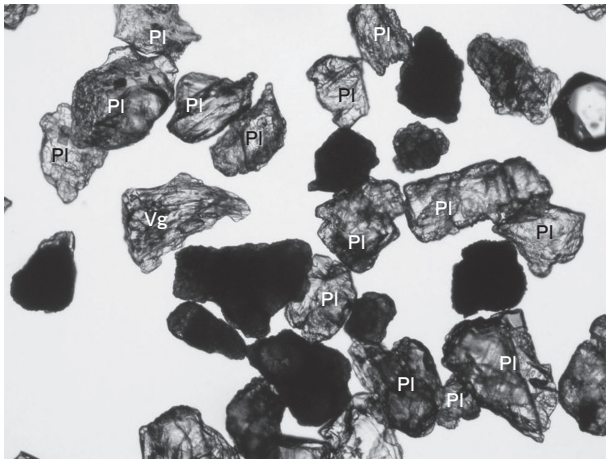
1．重鉱物（採取地点№1　ⅬⅢａ：1）



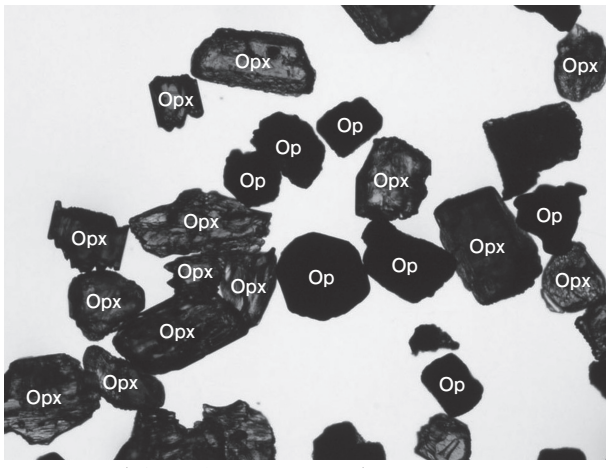
2．火山ガラス（採取地点№1　ⅬⅢａ：1）



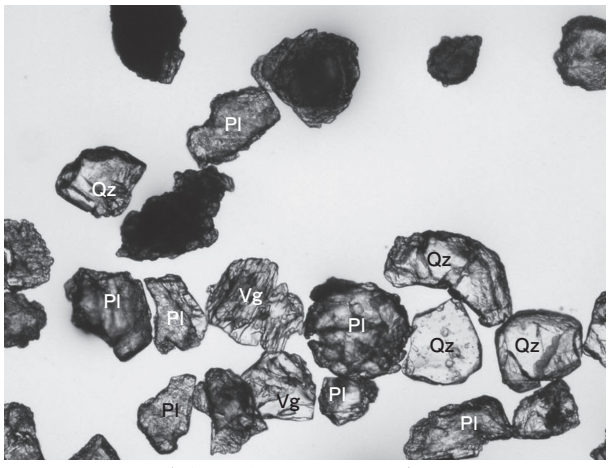
3．重鉱物（採取地点№1　ⅬⅢｄ：4）



4．火山ガラス（採取地点№1　ⅬⅢｄ：4）



5．重鉱物（採取地点№2　ⅬⅤ：7）



6．火山ガラス（採取地点№2　ⅬⅤ：7）

Opx：斜方輝石　Ho：角閃石　Op：不透明鉱物　Vg：火山ガラス　Qz：石英　Pl：斜長石

0.5㎜

図40　重鉱物・火山ガラス

第2節　樹 種 同 定

株式会社　加速器分析研究所

1．試　　料

瀧ノ入遺跡は、下郷町大字白岩字瀧ノ入の阿賀川支流の隈川右岸段丘上に位置する。本遺跡では、中世と思われる小穴群に伴う井戸跡ＳＥ01が検出され、井戸枠が出土したことから、当時の木材利用状況を調査する目的で木片１点の樹種同定を行った。

なお、同一試料の放射性炭素年代測定が実施され、12世紀後葉～13世紀前葉頃の年代値が示されている(付章第３節参照)。

2．分析方法

木片から、ステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の切片を採取し、ガムクロラールにてプレパラートを作成し、現生標本の形態に基づき生物顕微鏡で観察・同定した。

3．結　　果

井戸枠材の木片はスギと同定された(表６)。以下に同定の根拠を示す。

・スギ(*Cryptomeria japonica*（L.f.）D.Don)

早材から晩材への移行はやや急で年輪界は明瞭、出土材は年輪幅が狭いが晩材部接線方向に黒い樹脂細胞が並ぶ。放射組織は単列で長さは３－７細胞程度と短く、すべて柔細胞からなり、分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に２個存在する。

4．考　　察

井戸枠材が出土した遺構は中世とされ、年代測定により12世紀後葉～13世紀前葉頃の値が示されている。福島県内では鎌倉・室町時代の古舘遺跡や宮東遺跡で井戸材にスギが使われており、全時代を通じて井戸材にスギが40%と多く使われている(伊東ほか 2012)。本遺跡の同定結果も、こうした傾向と調和的であった。

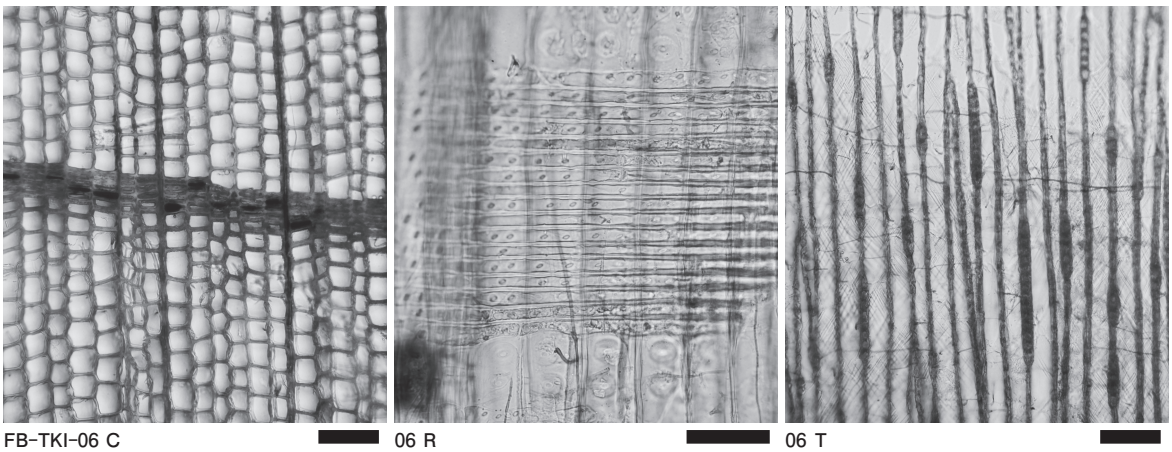
※)本分析は､古代の森研究舎の協力を得て行った。

参考文献

伊東隆夫・山田昌久(編)　2012 『木の考古学　出土木製品用材データベース』海青社

表６　出土井戸枠材の樹種

試料番号	遺構	層位	試料形態	樹種
FB-TKI-06	ＳＥ01	ℓ３	井戸枠	スギ



FB-TKI-06 C　　06 R　　06 T

図41　出土井戸枠材の顕微鏡写真

Ｃ：横断面　**Ｒ**：放射断面　**Ｔ**：接線断面　**スケール**：0.1㎜

第３節　放射性炭素年代測定

株式会社　加速器分析研究所

１．測定対象試料

瀧ノ入遺跡は、福島県南会津郡下郷町大字白岩字瀧ノ入（北緯37° 17′ 3″、東経139° 54′ 45″）に所在し、阿賀川支流の隈川右岸段丘上に立地する。測定対象試料は、焼土遺構や井戸跡等から出土した炭化物、木炭、木片、土器付着炭化物の合計８点である（表７）。FB-TKI-06は井戸跡から出土した井戸枠材から採取された木片である。FB-TKI-07・08は弥生土器付着炭化物である。なお、木片FB-TKI-06については樹種同定も実施されている（付章第２節参照）。

FB-TKI-01・02・05は中世以降、FB-TKI-03・04は古代から中世、FB-TKI-06は中世と推定されているが、各遺構の時期を直接示す遺物は出土していない。FB-TKI-07、08の土器付着炭化物は、弥生時代中期後半（川原町口式）とされる土器片から採取された。

２．測定の意義

出土遺物がなく、時期の判断が難しい遺構のおおよその年代を確認する。また、福島県内で測定例の少ない弥生土器に付着した炭化物を測定し、実年代を検討する。

３．化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常１mol/ℓ（１M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから１Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Mに達した時には「AAA」、１M未満の場合は「AaA」と表７に記載する。

（３）試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

４．測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、^{14}Cの計数、^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C）、^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５．算出方法

（１）δ^{13}C は、試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表７）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は、過去の大気中^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代はδ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表７に、補正していない値を参考値として表８に示した。^{14}C 年代と誤差は、下１桁

を丸めて10年単位で表示される。また、^{14}C 年代の誤差（±１σ）は、試料の^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon）は、標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し、pMC が100以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ^{13}C によって補正する必要があるため、補正した値を表７に、補正していない値を参考値として表８に示した。

（４）暦年較正年代とは、年代が既知の試料の^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、１標準偏差（1σ＝68.2％）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4％）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、δ^{13}C 補正を行い、下一桁を丸めない^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表８に示した。暦年較正年代は、^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

６．測定結果

測定結果を表７・８に示す。

焼土遺構、小穴、土坑、井戸跡から出土した試料６点の^{14}C 年代は、2990 ± 20yrBP（FB-TKI-05）～600 ± 20yrBP（FB-TKI-02）の間にある。暦年較正年代（1σ）は、最も古いFB-TKI-05が1262～1132 calBCの間に２つの範囲、最も新しいFB-TKI-02が1312～1398calADの間に３つの範囲で示される。FB-TKI-05は縄文時代晩期初頭頃に相当し（小林編2008）、中世以降とする推定より大幅に古いことから、古い年代の炭化物が混入した可能性がある。他の５点は古代から中世頃の値となっている。

弥生土器付着炭化物の^{14}C 年代は、FB-TKI-07、08がともに2090 ± 20yrBP である。暦年較正年代（1σ）は、弥生時代中期頃に相当する（小林 2009）。中期後半とする推定におおむね近いとみられる。

試料の炭素含有率はすべて50％を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

参考文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51 (1), pp.337-360.

小林謙一　2009「近畿地方以東の地域への拡散」西本豊編『新弥生時代のはじまり　第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代』雄山閣　pp.55-82.

小林達雄　2008『総覧縄文土器』総覧縄文土器刊行委員会　アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years calBP, *Radiocarbon* 55 (4), pp.1869-1887.

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19 (3), pp.355-363.

表7　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 補正値）

（試料№の頭部「FB-TKI-」を省略表記）

測定番号	試料№	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}C$（‰）（AMS）	$\delta^{13}C$ 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-161757	01	SG01　ℓ 1	炭化物	AAA	−24.99 ± 0.22	960 ± 20	88.70 ± 0.24
IAAA-161758	02	SG02　ℓ 1	炭化物	AAA	−25.59 ± 0.27	600 ± 20	92.82 ± 0.21
IAAA-161759	03	P18　ℓ 1	木炭	AAA	−23.98 ± 0.19	830 ± 20	90.24 ± 0.24
IAAA-161760	04	P92　ℓ 2	木炭	AAA	−24.91 ± 0.21	1,290 ± 20	85.11 ± 0.23
IAAA-161761	05	SK28　ℓ 2	木炭	AAA	−26.62 ± 0.22	2,990 ± 20	68.95 ± 0.21
IAAA-161762	06	SE01　ℓ 3	木片	AAA	−23.00 ± 0.19	850 ± 20	89.93 ± 0.24
IAAA-161763	07	D6d　L Ⅲa	土器付着炭化物	AaA	−23.91 ± 0.28	2,090 ± 20	77.07 ± 0.21
IAAA-161764	08	D7b　L Ⅲa	土器付着炭化物	AaA	−23.55 ± 0.18	2,090 ± 20	77.09 ± 0.22

表8　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 未補正値）および暦年較正年代

［参考値］

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-161757	960 ± 20	88.70 ± 0.23	963 ± 21	1025calAD – 1046calAD（29.1%） 1094calAD – 1120calAD（32.7%） 1141calAD – 1147calAD（ 6.4%）	1020calAD – 1055calAD（34.3%） 1076calAD – 1154calAD（61.1%）
IAAA-161758	610 ± 20	92.71 ± 0.20	598 ± 18	1312calAD – 1332calAD（26.6%） 1337calAD – 1359calAD（28.9%） 1388calAD – 1398calAD（12.7%）	1303calAD – 1367calAD（73.7%） 1382calAD – 1405calAD（21.7%）
IAAA-161759	810 ± 20	90.42 ± 0.24	825 ± 21	1206calAD – 1255calAD（68.2%）	1169calAD – 1260calAD（95.4%）
IAAA-161760	1,290 ± 20	85.13 ± 0.23	1,294 ± 22	674calAD – 710calAD　（43.6%） 745calAD – 764calAD　（24.6%）	665calAD – 726calAD　（61.6%） 738calAD – 769calAD　（33.8%）
IAAA-161761	3,010 ± 20	68.72 ± 0.20	2,986 ± 24	1262calBC – 1193calBC　（59.9%） 1143calBC – 1132calBC　（ 8.3%）	1281calBC – 1124calBC　（95.4%）
IAAA-161762	820 ± 20	90.30 ± 0.23	852 ± 21	1170calAD – 1176calAD（10.1%） 1182calAD – 1216calAD（58.1%）	1156calAD – 1250calAD（95.4%）
IAAA-161763	2,080 ± 20	77.24 ± 0.21	2,092 ± 21	162calBC – 129calBC　（29.5%） 120calBC – 90calBC　（27.4%） 73calBC – 59calBC　（11.3%）	174calBC – 50calBC　（95.4%）
IAAA-161764	2,070 ± 20	77.32 ± 0.22	2,089 ± 22	161calBC – 131calBC　（24.8%） 119calBC – 88calBC　（26.8%） 76calBC – 56calBC　（16.6%）	175calBC – 47calBC　（95.4%）

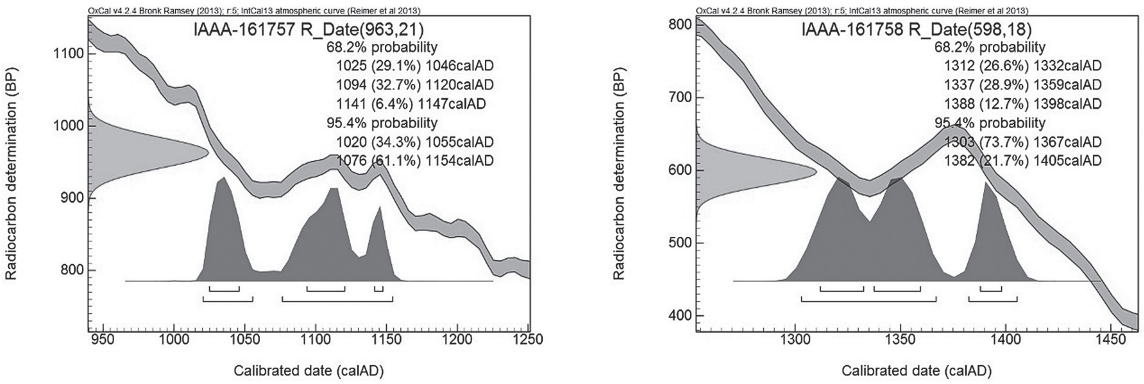


図42　暦年較正年代グラフ（1）

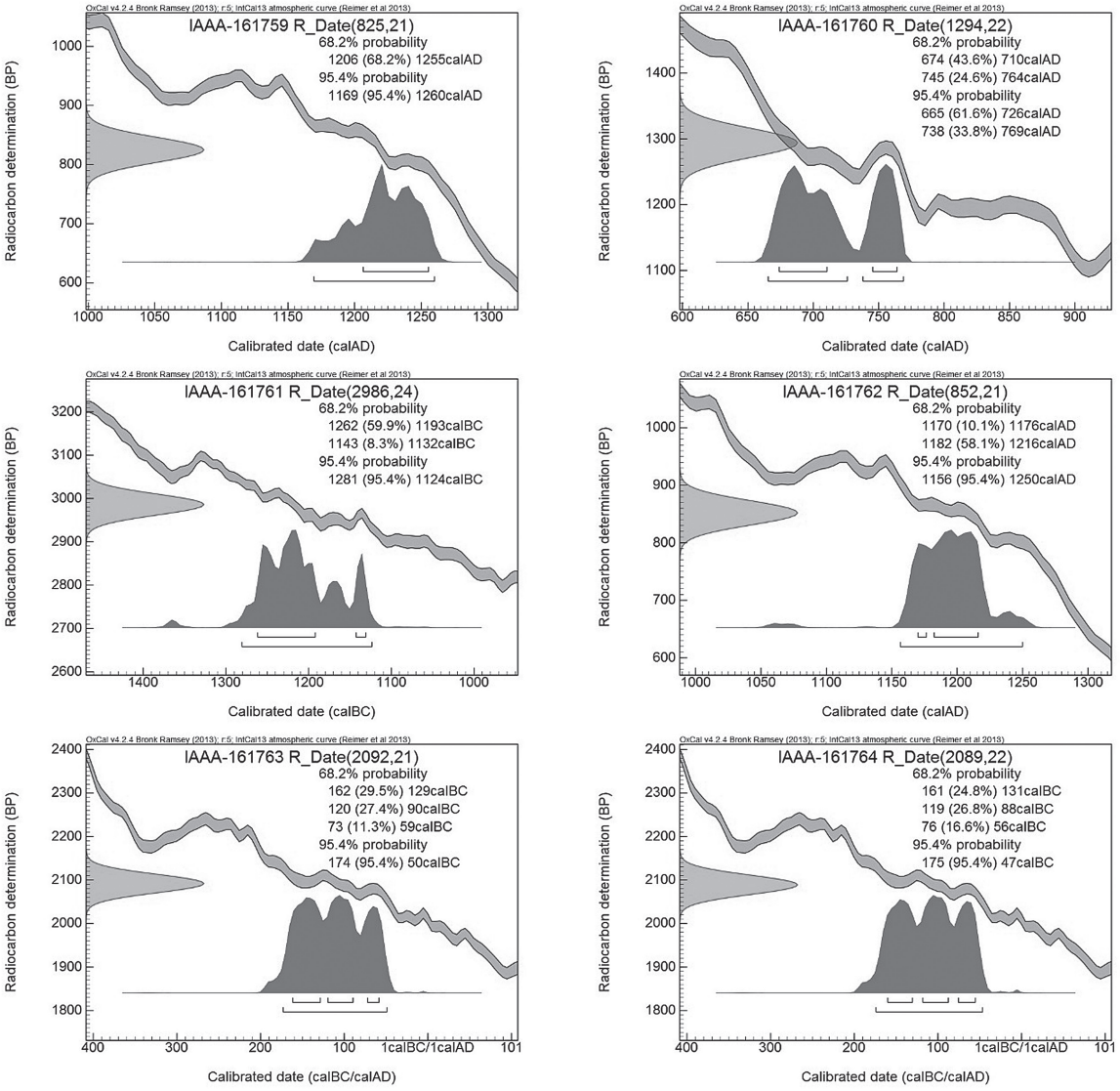


図43　暦年較正年代グラフ（２）

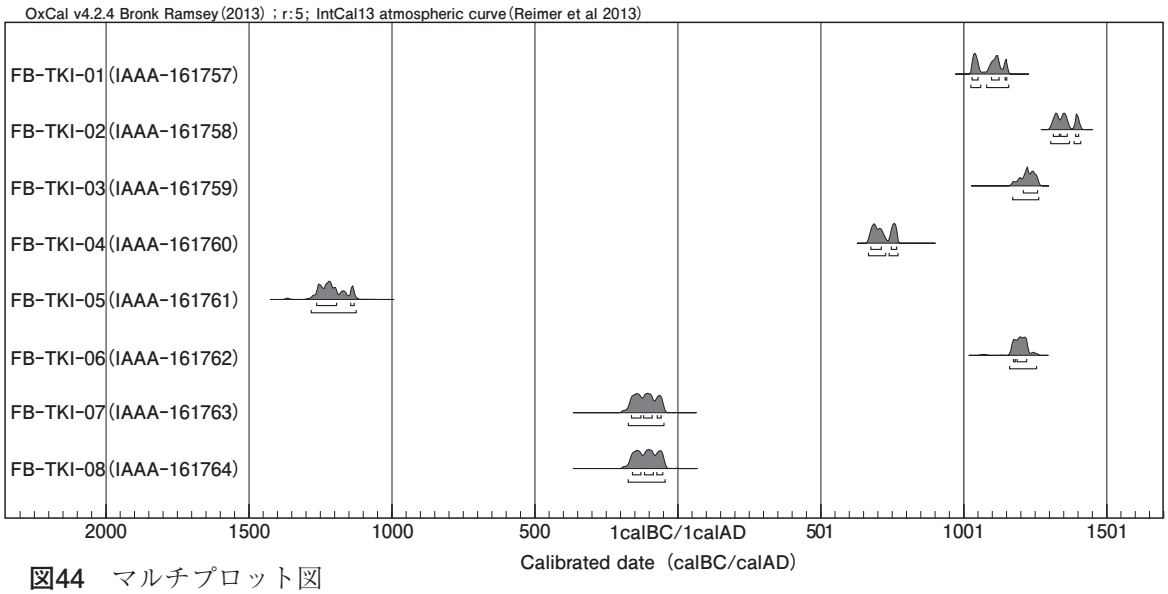


図44　マルチプロット図

第４節　レプリカ法による土器種実圧痕の同定

株式会社　パレオ・ラボ
佐々木由香・米田恭子・バンダリ スダルシャン

１．はじめに

福島県南会津郡下郷町に所在する瀧ノ入遺跡は、阿賀川の支流である隈川右岸の丘陵上に立地する、縄文時代と弥生時代、古代、中世の複合遺跡である。弥生時代では、弥生時代中期後半の土器と土坑墓が検出された。弥生時代中期後半の土器の表面もしくは断面には、種実の圧痕と思われる痕跡が確認された。ここでは、レプリカ法によって採取された種実圧痕レプリカの同定を行い、弥生時代中期後半に利用された種実について検討した。

２．資料と方法

資料は16点で、シリコンを用いて採取された土器圧痕のレプリカである。資料の抽出は、公益財団法人福島県文化振興財団によって行われた。土器の時期は、弥生時代中期後半の川原町口式である。

土器圧痕について、丑野・田川(1991)等を参考にして、以下の手順でレプリカを作製した。圧痕内を水で洗い、付着物を除去した。次に、資料の保護のため、パラロイドＢ72の９％アセトン溶液を離型剤として圧痕内および周辺に塗布した後、印象剤に用いるシリコン樹脂(JMシリコン レギュラータイプ)を注射器に入れて圧痕部分に充填し、レプリカを作製した。

同定方法は、最初に実体顕微鏡下でレプリカを観察・同定し、種実ないし植物の圧痕がどうかを判断した(１次同定)。さらに、走査型電子顕微鏡での観察が必要と判断されたレプリカについて、金蒸着を行い、走査型電子顕微鏡(KEYENCE社製　VE-9800)で観察および写真撮影を行い、同定した(２次同定)。最終的な同定は、走査型電子顕微鏡写真を参考に、レプリカを実体顕微鏡で観察して行った。また、種実と思われる圧痕レプリカの大きさを、走査型電子顕微鏡を用いて小数点第２位まで計測した。土器およびレプリカは、公益財団法人福島県文化振興財団に保管されている。

３．結　　果

同定の結果、８点については何らかの植物の圧痕と判断した。種実と同定されたのは、草本植物のイネ籾(粃)とキビ種子(頴果)の２分類群が各１点の、計２点であった。その他には、不明木材(６点)が得られた。同定結果を表９に示す。以下に、分類群ごとの記載を行い、同定の根拠とする。

(１)**イネ** *Oryza sativa* L. 籾(粃)

イネ科(№14：甕胴部内面)　30図13

上面観が楕円形で、側面観は長楕円形。２条の稜があり、表面には四角形の網目状の隆線と隆線上の顆粒状突起が規則正しく並ぶ。小穂軸は残存するが、護頴は残存していない。先端部に芒の着点と思われる痕跡が残る。長さ6.85㎜、幅3.30㎜。比較した現生のイネの大きさは、長さ6.24㎜、幅3.02㎜、厚さ1.33㎜(粃)と、長さ6.45㎜、幅3.27㎜、厚さ2.20㎜(籾)。全体的に扁平で、隆線の間が狭く、かつ窪む特徴から、普通の籾ではなく、粃と判断した。

(２)**キビ** *Panicum miliaceum* L. 種子(頴果)

イネ科(№７：壺胴部外面)　29図23

内頴側が検出された。円形で先端がやや窄まる。断面は片凸レンズ形で、厚みがある。胚の長さは全長の1/2程度と短く、幅が広いうちわ型。長さ1.93㎜、幅1.94㎜。比較した現生のウルチキビ種子の大きさは、長さ2.24㎜、幅1.89㎜、厚さ1.40㎜。

(３)**不明** Unknown 木材(№２・３・４・６・12・16)

長軸方向に繊維方向があり、不規則な割れがみられる個体(№２・３・６・16)と、丸木で枝状の個体(№４・12)がある。いずれも横断面の観察ができず、科以上の詳細な同定はできなかった。

４．考　　察

弥生時代中期後半の土器に見られる圧痕について、レプリカ法により検討したところ、栽培植物のイネとキビが各１点の、計２点の種実圧痕と不明木材６点の圧痕が確認された。

土器に残された種実などの圧痕は、土器作りの際に偶発的に混ざった可能性や、意図的に混和されたり、押し付けられたりしてついた可能性がある。今回同定できた種実のイネとキビは栽培植物であり、これらが土器作りの場やその周辺に存在した証である。瀧ノ入遺跡では弥生時代中期後半の集落は検出されていないが、周辺に集落が存在していたと推定されている。

東北地方の弥生時代前期の土器圧痕で、イネ以外の栽培植物はこれまでに確認されていない(中沢2017)。弥生時代後期には岩手県滝沢市湯舟沢Ⅲ遺跡で、キビとアワが検出されているが(滝沢市埋蔵文化財センター 2016)、中期では雑穀の検出例は報告されていない。したがって、瀧ノ入遺跡で検出された弥生時代中期後半のキビは、東北地方の弥生時代中期の土器圧痕でイネ以外の栽培植物が見つかった最初の例になる。

引用文献

中沢道彦　2017「日本列島における農耕の伝播と定着」『季刊考古学』138　pp.26-29.

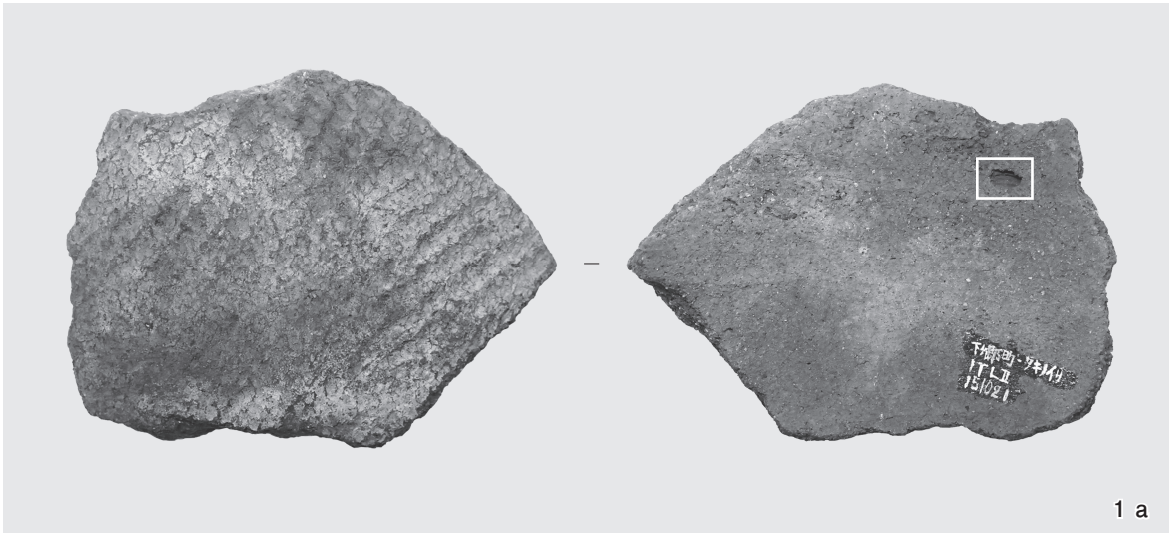
小畑弘己　2011『東北アジア古民族植物学と縄文農耕』同成社

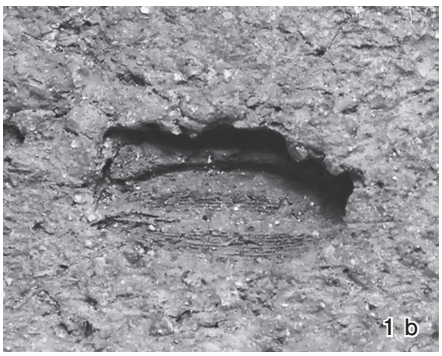
滝沢市埋蔵文化財センター　2016「弥生のムラ湯舟沢」『湯舟沢Ⅲ遺跡弥生土器圧痕レプリカ法調査報告書』　50p,　滝沢市教育委員会

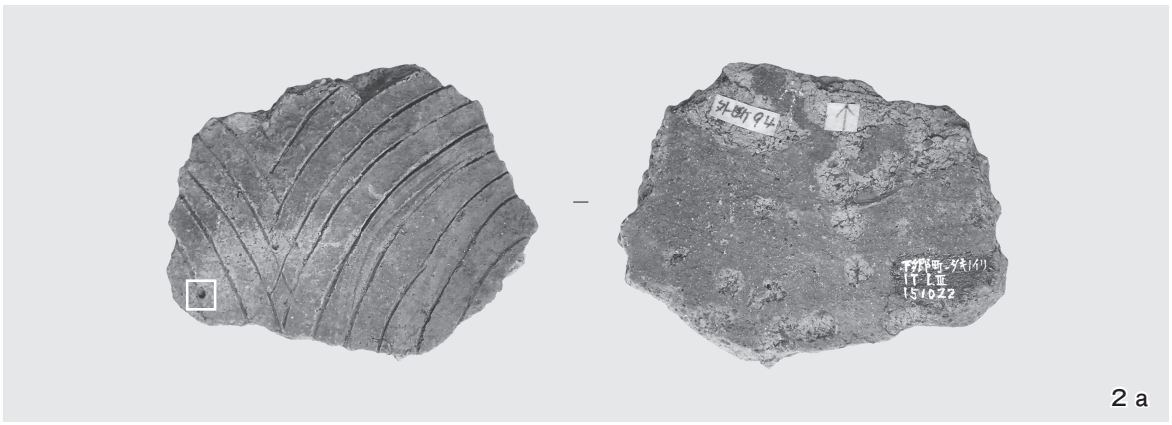
丑野　毅・田川裕美　1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24　pp.13-36.

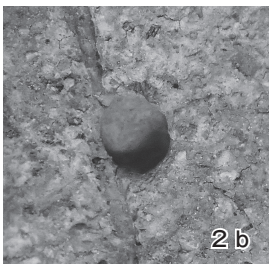
表９　出土土器圧痕の同定結果

分析№	層位	器種	部位	圧痕位置	時期	土器型式	同定結果		SEM	法量（㎜）	
							分類群	部位		長さ/長軸	幅/短軸
1	遺物包含層	壺	口縁部	内面	弥生時代中期後半	川原町口式	種実ではない		－		
2		壺	口縁部～頸部	頸部内面			不明	材	●		
3		蓋	口縁部	外面			不明	材	●		
4		蓋	口縁部	内面			不明	材	●		
5		壺	胴部	外面			種実ではない		－		
6		壺	胴部	内面			不明	材	●		
7		壺	胴部	外面			キビ	種子	●	1.93	1.94
8		壺	胴部	内面			不明	礫	●	3.53	1.69
9		壺	胴部	外面			種実ではない		－		
10				外面			種実ではない		－		
11		壺	胴部	内面			種実ではない		－		
12		壺	胴部	内面			不明	材	●		
13				内面			種実ではない		－		
14		甕	胴部	内面			イネ	籾(籾)	●	6.85	3.30
15		壺	口縁部	内面			種実ではない		－		
16		甕	口縁部	内面			不明	材	●		









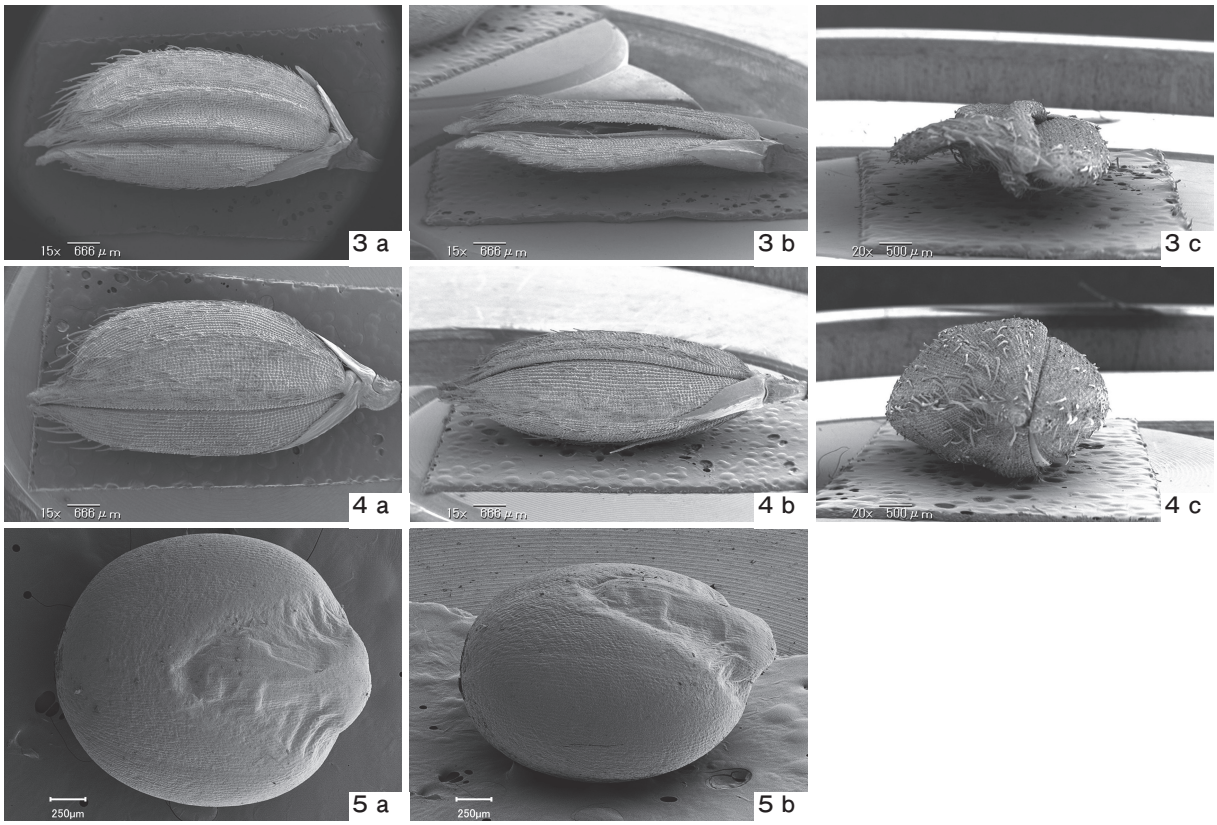
a：2㎝

b：2㎜

1．分析№14　　a：土　　器

2．分析№７　　b：圧痕部拡大　　※土器写真内の白枠は圧痕位置を示す

図45　出土土器と種実圧痕の写真

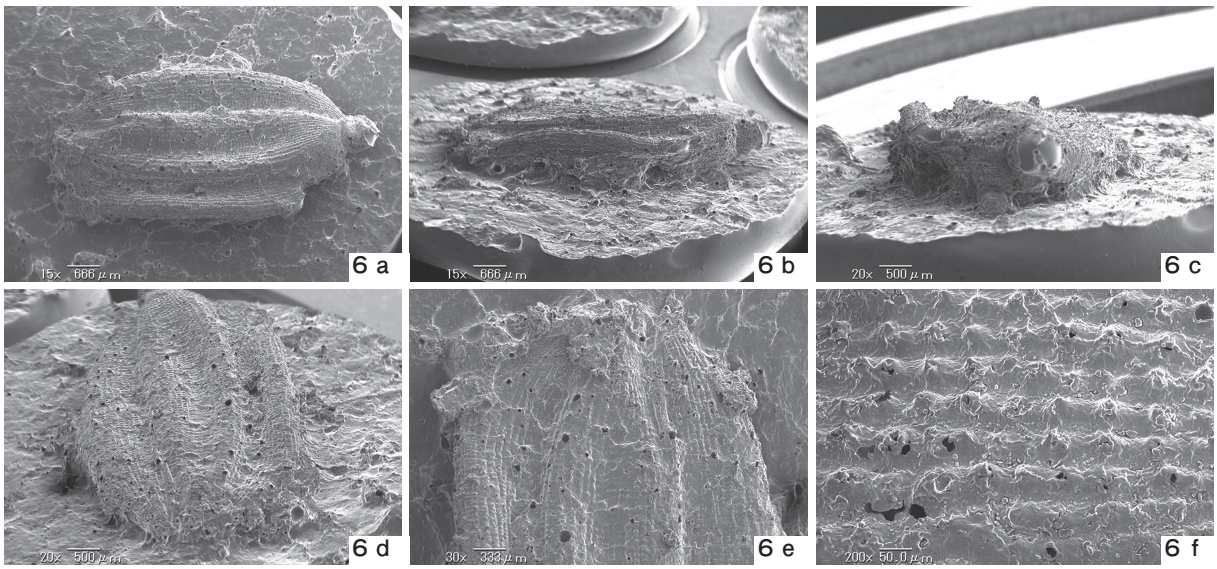


３．イネ籾－粗　　（石川県小松市大野町採集、2015年12月18日）

４．イネ籾　　（石川県小松市小野町採集、2013年９月）

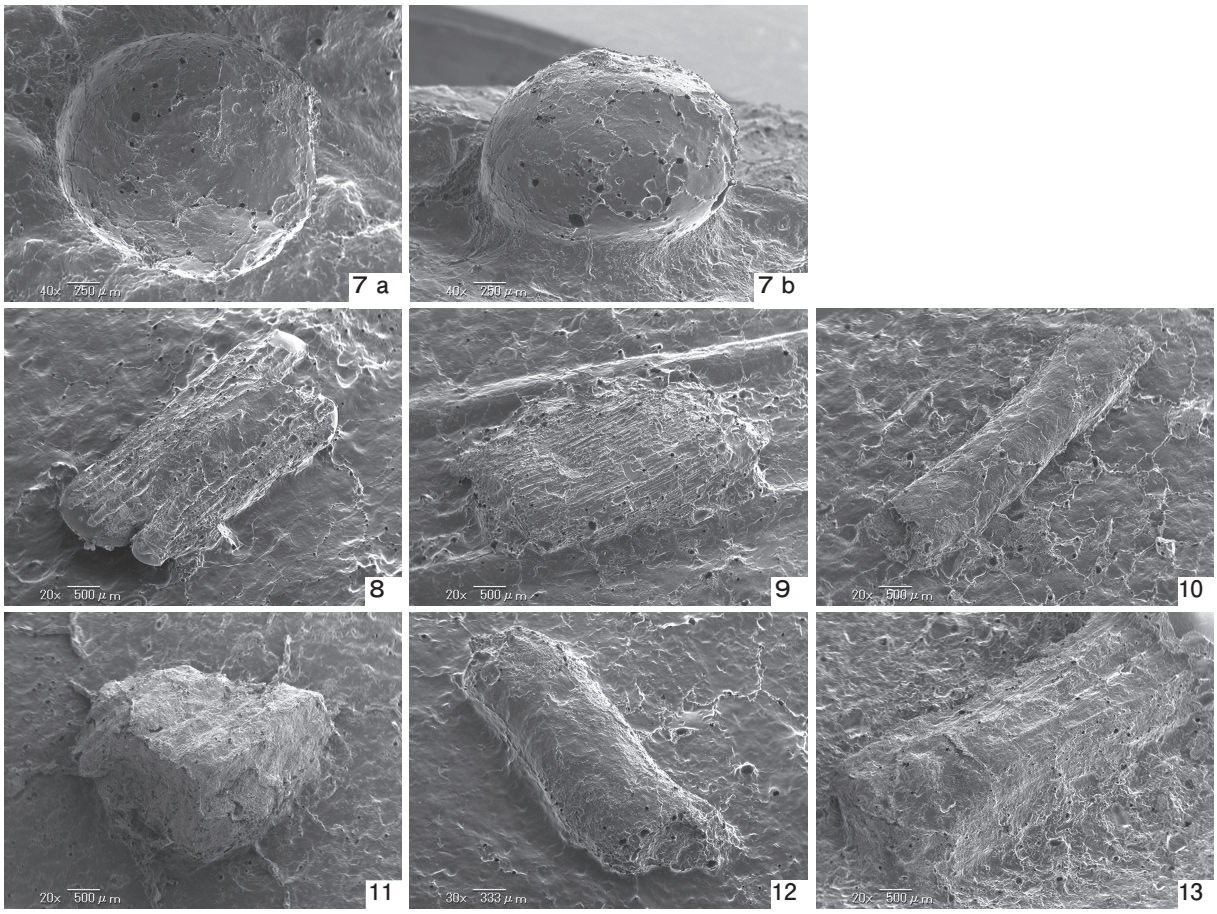
５．ウルチキビ種子（山梨県小菅村採集、2011年10月９日）

図46　原生標本の走査型電子顕微鏡写真



６．イネ籾－粗（分析№14）　　a：側面観　b：内頴側　c：上面観　d：先端側　e：先端部拡大　f：顆粒状突起の拡大

図47　出土土器圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（１）



7．キビ種子（分析№７）　　a：側面観　　b：内頴側

8．不明木材（分析№２）　　**9**．不明木材（分析№３）　　**10.** 不明木材（分析№４）

11. 不明木材（分析№６）　　**12.** 不明木材（分析№12）　　**13.** 不明木材（分析№16）

図48　出土土器圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（２）

写　真　図　版

1　調査区遠景（東から）

2　遺跡全景（上空南から）

3　調査区遠景（西から）

4　調査区遠景（南東から）

5　調査区北側小穴群（上空南から）

6　調査区各部

a　調査前全景（北から）
b　Ｃ３～Ｅ４グリッド小穴集中部遠景（北東から）
c　調査区南側基本土層（南西から）
d　南側遺物包含層（北西から）

7　1号住居跡全景（北から）

8　1号住居跡細部

a　土層断面（南から）
b　カマド全景（北から）　　**c**　遺物出土状況（西から）

9　1～8号土坑

a　1号土坑（東から）　**b**　2号土坑（東から）
c　3号土坑（東から）　**d**　4号土坑（西から）
e　5号土坑（西から）　**f**　6号土坑（東から）
g　7号土坑（北から）　**h**　8号土坑（北から）

10　9～16号土坑

a　9号土坑（南東から）　**b**　10号土坑（東から）
c　11号土坑（北から）　**d**　12号土坑（西から）
e　13号土坑（北西から）　**f**　14号土坑（南西から）
g　15号土坑（南から）　**h**　16号土坑（西から）

11　17～24号土坑

a　17号土坑（西から）　**b**　18号土坑（南から）
c　19号土坑（北東から）　**d**　20号土坑（南東から）
e　21号土坑（西から）　**f**　22号土坑（南東から）
g　23号土坑（東から）　**h**　24号土坑（北から）

12　25～27・30号土坑

a　25号土坑（北東から）　**b**　26号土坑（東から）
c　27号土坑（東から）　**d**　30号土坑（南西から）

13　1号井戸跡

a　土層断面（北東から）　**b**　全景（北東から）
c　井戸枠検出状況（北東から）　**d**　全景（北東から）

14　１・２号集石遺構検出（西から）

15　１・２号集石遺構細部

a　１号集石遺構断面（東から）　**b**　１号集石遺構全景（東から）
c　２号集石遺構断面（東から）　**d**　２号集石遺構全景（東から）

16　Ｂ３～Ｅ３グリッド小穴群完掘全景（西から）

17　Ｄ３グリッド付近小穴群

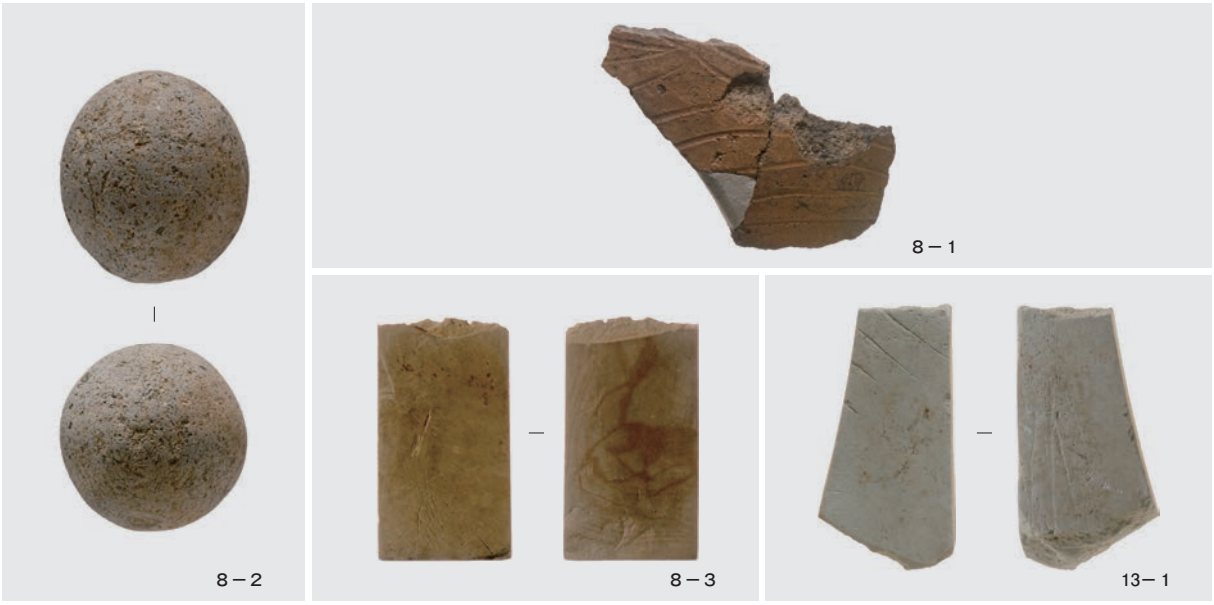
a　Ｄ３グリッド北側検出（東から）　**b**　Ｄ３グリッド北側完掘全景（南から）
c　Ｄ３グリッド南側検出（東から）　**d**　Ｄ３グリッド南側完掘全景（南から）

18 小穴（1）

a Ｐ４断面（東から）　**b** Ｐ５断面（北から）
c Ｐ８断面（南から）　**d** Ｐ18断面（西から）
e Ｐ30断面（南から）　**f** Ｐ35断面（南から）
g Ｐ44断面（西から）　**h** Ｐ65断面（南から）

19 小穴（2）

a P69 断面（南から）　**b** P92 断面（南から）
c P95 断面（南から）　**d** P111断面（南から）
e P298断面（南東から）　**f** P299断面（南から）
g P304断面（南から）　**h** P311・312断面（南から）



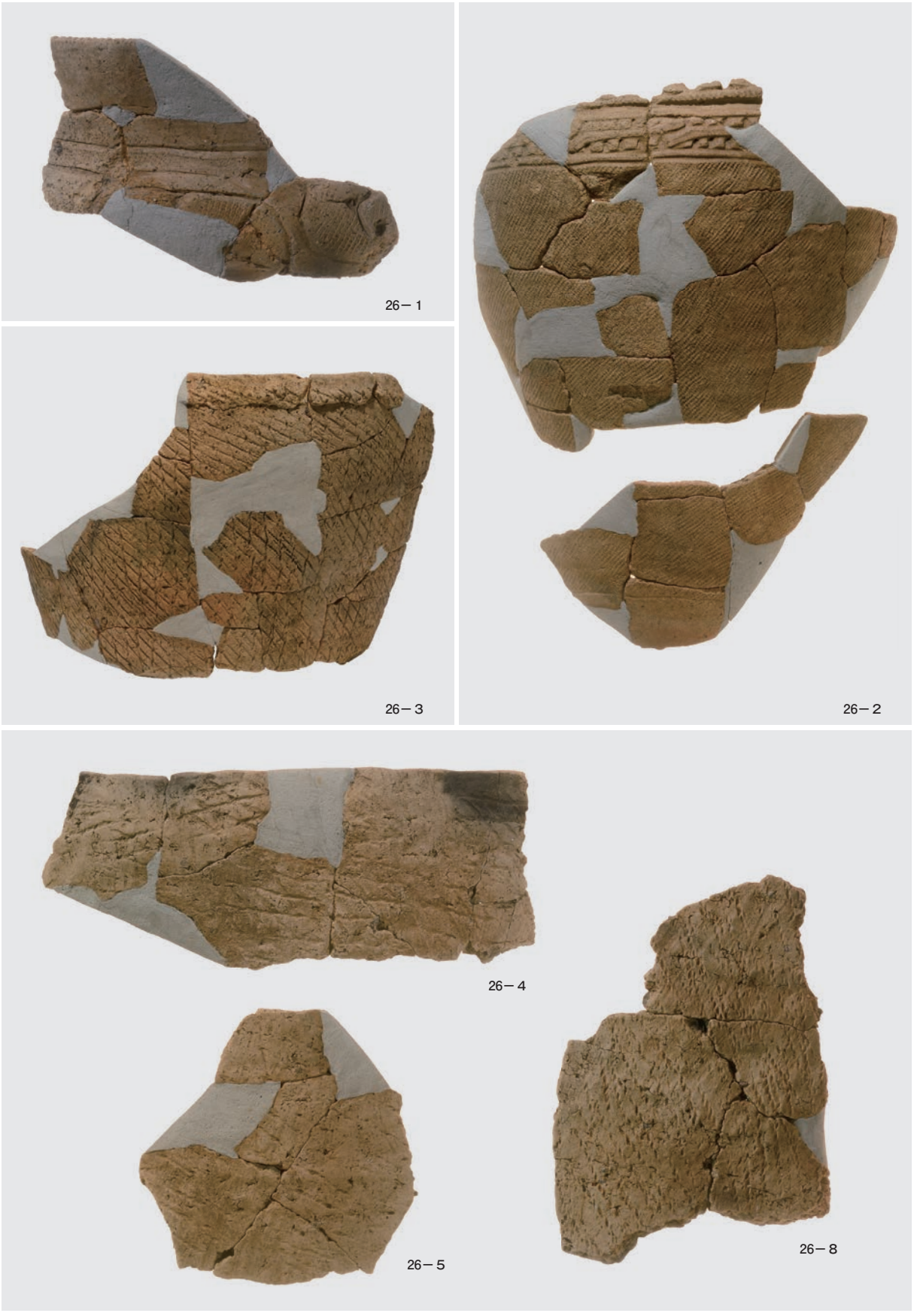
20　1号住居跡・30号土坑出土遺物

21　1号井戸跡出土遺物（1）

22　１号井戸跡出土遺物（２）

23　小穴群出土遺物

24　遺構外出土遺物（１）



25　遺構外出土遺物（２）

25－1
25－2
25－3
25－4
25－8
25－5
25－6
25－7
25－10
25－15
25－9
25－13
25－12
25－11
25－14
27－9
25－16
27－10
27－4
27－3
25－18
26－9
26－10
26－12
26－6
26－7
26－11
26－13

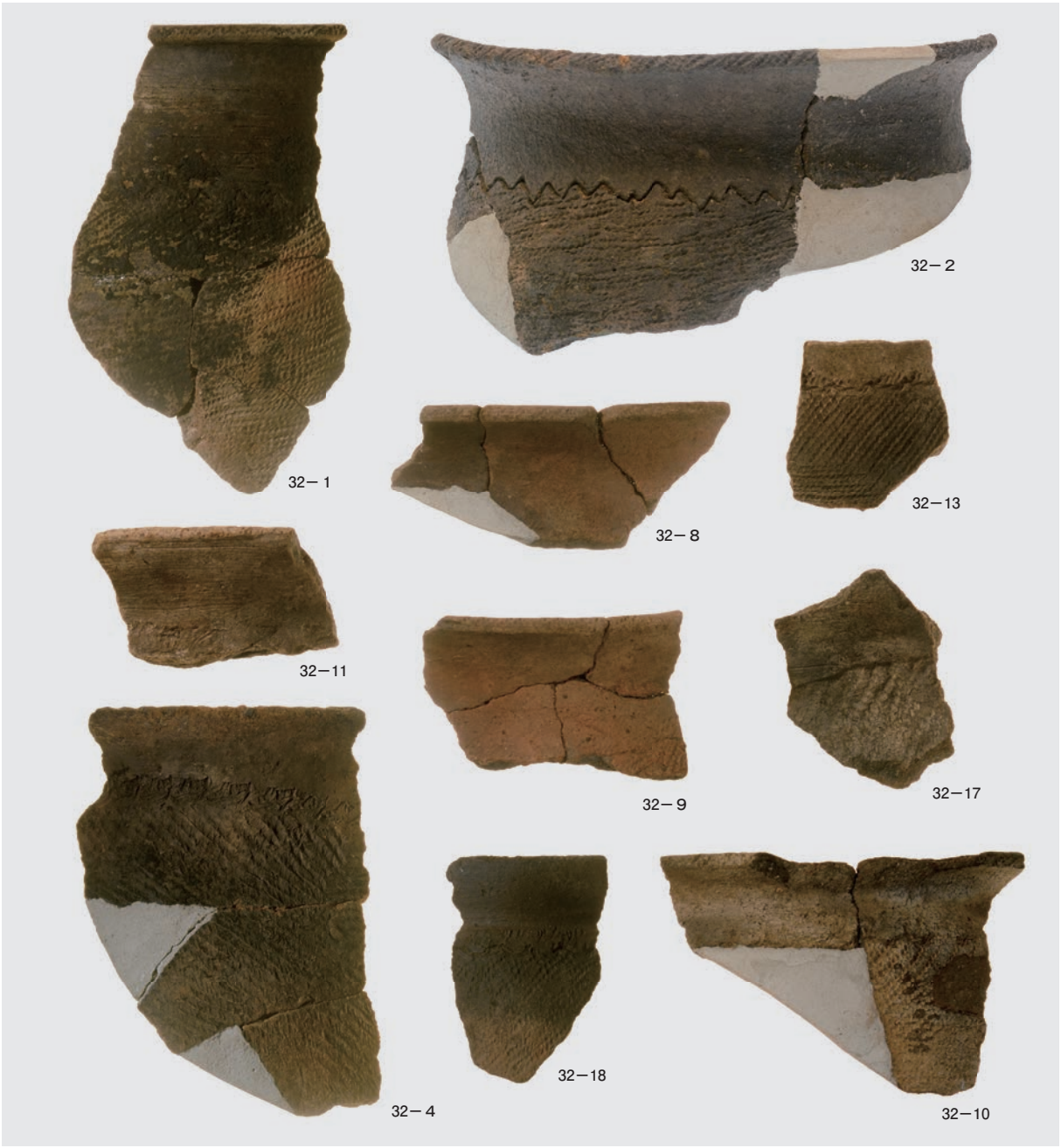
26　遺構外出土遺物（３）

27　遺構外出土遺物（４）

29－1
29－2
29－3
29－4
29－6
29－5
29－9
29－8
29－7
29－15
29－10
29－11
29－13
29－14
29－16
29－18
29－12
29－20
29－17
29－21
29－19
29－22
29－23
29－24
29－25
29－26
29－27
29－28

28　遺構外出土遺物（５）

29　遺構外出土遺物（６）


32－1
32－2
32－8
32－13
32－11
32－9
32－17
32－4
32－18
32－10

32－16

33－7
33－8
33－10
33－9
33－11

30　遺構外出土遺物（７）

31　遺構外出土遺物（8）

32　遺構外出土遺物（9）

33　遺構外出土遺物（10）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	あいづじゅうかんみなみどうろいせきはっくつちょうさほうこく２
書 名	会津縦貫南道路遺跡発掘調査報告２
シ リ ー ズ 名	福島県文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第522集
編 著 者 名	吉野勤也　　鶴見諒平
編 集 機 関	公益財団法人福島県文化振興財団　遺跡調査部 〒960－8115 福島県福島市山下町1－25　TEL 024－534－2733
発 行 機 関	福島県教育委員会 〒960－8688 福島県福島市杉妻町2－16　TEL 024－521－1111
発 行 年 月 日	2017年11月30日

所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
瀧ノ入（たきのいり）	福島県南会津郡下郷町大字白岩字瀧ノ入（みなみあいづぐんしもごうまちおおあざしらいわあざたきのいり）	07362	00141	37° 17′ 3″	139° 54′ 45″	20160511 ～ 20161125	4,100㎡	会津縦貫南道路の建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
瀧ノ入	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代 鎌倉時代	竪穴住居跡 土坑 井戸跡 集石遺構 焼土遺構 小穴 遺物包含層	1 軒 33 基 1 基 2 基 2 基 371 基 1カ所	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 石器 木器 金属器	今回の調査では、縄文・弥生時代の遺物包含層と古代から中世にかけての小穴、井戸跡などを調査した。

要 約	瀧ノ入遺跡では、弥生時代中期後半の川原町口式期の土器・石器が多く出土した。土器に煮炊きの痕跡があることから、近隣に集落があった可能性が高い。古代から中世では掘立柱建物跡の柱穴と考えられる多数の小穴が見つかり、その中からは東北地方で出土例の少ない透かし入りの火打金が出土している。

＊経緯度数値は世界測地系（測地成果2011）による。

福島県文化財調査報告書第522集

会津縦貫南道路遺跡発掘調査報告２

瀧ノ入（たきのいり）遺跡

平成29年11月30日発行

編　集　公益財団法人福島県文化振興財団　遺跡調査部
発　行　福島県教育委員会　（〒960－8688）福島市杉妻町２－16
　　公益財団法人福島県文化振興財団　（〒960－8116）福島市春日町５－54
　　国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所　（〒963－0111）郡山市安積町荒井字丈部内28－１
印　刷　六陽印刷株式会社　（〒960－8056）福島市八島田字中干損田８－１